一将功成りて万骨枯る

キューブケーキ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

劉表の息子、劉琦に成ったオリ主。プロット無しで、行き当たりばったりに書き綴る。

目　次

1. 俺は劉琦様 ―― 1
2. 劉琦様びっくり ―― 27
3. 劉琦様でかけましょう ―― 52
4. 劉琦様ばんざい ―― 79
5. 劉琦様なぜなぜ戦争 ―― 101
6. 劉琦様ウソとホントのはらのうち ―― 124
7. 劉琦様といっしょ ―― 146

1．俺は劉琦様

1―1

豪華な寝台、鳥のさえずりが目覚まし代わりとなる。控えめな声がかけられた。

「劉琦(りゅうき)様、お早うございます」

傍らに侍る女官に優しく起こされて俺の一日は始まる。

「ああ、おはよう」

女官のおっぱいを軽く揉みながら応える俺は劉琦。

「あぁ……だめです……！」とか言われてるけど、無理矢理ではないからな。

（ナイスおっぱい）

おっぱいを揉むのは挨拶だ。睦事(むつみごと)の様に愛撫をするには日が高い。だから優しく触れるけど、感度が良いのか、首を反らせて嬌声を漏らし愉悦に呑まれている。

良い声で反応しくれるから、つい調子に乗ってしまう。俺が悪いんじゃない。彼女の為で、仕方がないんだ。

「可愛いぞ」と耳元で囁き、くちづけをする。で、なんやかんやと朝からハッスルしてしまった。

気に入った女官を侍らせて人生を堪能しているようで、俺は人生の生き方に悩み模索中の男だ。

俺の親父は劉表、前漢景帝の子、魯恭王劉余の末裔で荊州(けいしゅう)を牧として治めている。要するに本物の皇族の末裔で特権階級の富裕層だ。

荊州は孫子が言う所の衢地(くちち)だ。どうせなら益州とか端っこが良かった。

将来、群雄割拠の時代がやって来る。そうしたら荊州を欲しがる奴はわんさかと出てくる。……つまり俺は嫌でも、クソッタレな世界を生き延びる為に戦う時が来る。

俺は長男と言う事で、何れは国を背負わねばならない立場だ。

運命と言う言葉は嫌いだが、敷かれたレールは存在する。例えば、親父から生前贈与と言うか修行の一貫として荊州北部にある新野城

を与えられた。
　これが小さい城でな、練習にはもってこいだった。親や家臣、民に期待されている。そして民の税で俺は育てられたと言う自覚もあった。
　権力を持つ強者が弱者を導くのは生まれながらの義務だ。これを怠る事は許されない。
　平民に生まれていれば兵役や納税とかもあるから、結局は誰しも食って行く為に働かなくてはいけない。俺は利益を還元し、食い扶持を稼ぐ。
　次男の劉琮（りゅうそう）は異母弟だが仲も良く、今回も俺に着き従って新野城に赴任した。でも親父の部下の蔡瑁（さいぼう）は快く思って居ない。
「軍は私塾とは違う。お遊びでは務まらない。そしてお前らは兵士ですらない。本物の兵士が我が兄、劉琦の御為に戦う為の盾だ。お前達は盾として死ね」
　劉琮は新兵の人格を否定し、誇りを壊し我が軍の一員とすべく教育を行っていた。
　怒鳴るのは教官、助教として付けられた校尉や古参兵が行う。
「生き残ったその時こそ、我が兄の兵士となれる。その時までお前達は等しく盾の価値しかない」
　戦をするなら指揮系統確立は絶対条件だ。命令に従わぬ兵はいらん。
　だから徹底的に自尊心をへし折る。朝鮮人のやる注入式教育と言うやり方で、後は競争心を煽りながらやる気を与えてやる。
　少なくとも他所よりは良い職場だと俺は信じている。給料も休日も各種手当ても保証している。
　賊や罪人の糞共の処刑で度胸を付けさせたり、劉琮は新兵の心を掴み精神的支配下に入れていた。うーん、やっぱり頼りに成る身内は最高だな。
　今日の所は、可愛い娘も居ないし他所に移動するか。
「さーて、城下の見回りでも行くか」
　コネと言うのは大切だ。地元の名士、名族と知り合い人脈を築く事

は、今後、楽をする為だ。利用出来る物は利用する。内政は文官にぶん投げて、俺はそう言った調整を行う。
「店主、変わりは無いか」
新野城に赴任してから馴染みとなった本屋に顔を出した。この店主、意外に顔が広く本屋は道楽でやっている。本業は手広く多角経営の総合商社と言った感じだ。
「これは劉琦様、お勤め御苦労様です」
満面の笑顔で寄ってくる店主。俺は少し距離を取る。
全くこの世界は変わってる。店には製本された天然色の本が並んでおり、巷には服飾、化粧品や食材、嗜好品等と様々な物が流通していた。建築資材や武具、日用品にも鉄器が普及している。
(歴史の知識なんてあてにならんな)
民が飢えている。漢王朝は腐敗し、生活が困窮して賊に身を落とす。そう言う話を聴いていたが、俺の周りでは笑顔が絶えない。これは親父の統治が優れていると言う事ではない。
腐っているのは一部だけで、大袈裟に騒ぎ立てられている。
(誰かが大乱を引き起こそうとしている?)
実際に、うちの領内で不正をしてるやつは、庶民のガス抜きも兼ねてぶち殺す。
と言っても綱紀粛正何てやり過ぎても息苦しいだけだ。やり過ぎなければ目こぼしはする。このやり方で反乱は起きていない。賊の発生も数えるほどだ。
恩と義理で人は動かせる。そこに金があれば言う事は無い。
例えば戦もそうだ。いかに気持ち良く敵を倒せるか。効率良く損害を減らして倒しても、人々の心に訴えかける物が無ければ誹謗中傷される。勝利とは心を掴む事なのだから。
今の生活に不満は無い。前世は一発逆転、東芝の株で信用取引レバレッジ最大をやって追証が発生し破産した。ある意味、楽になれた。最低から最高ではないが最適な生活に生まれ変わった。
この世界では何もしなくても収入を得られるが、頑張れば頑張っただけ収入も安寧も手に入れられる。方法は簡単、人脈を作り人を右か

ら左に紹介すれば良いだけだ。
親族や血縁に頼るだけでは人材も限られる。そこで、こうやって市中を見回ったりして縁を繋ぐ事もやってる。
「劉琦様のお陰で組合は、全国に４０００もの店が提携する大規模な物に成りました」
それは良いが、俺はホモじゃねえ。指を絡めてくるな。
「商売の融資が成功すれば皆が幸せになれるな」
やんわりと手を離して更に距離を取る。邪険に扱え無いので面倒くせぇ。
組合は資金の調達にも役立つ。楽市楽座を信長はやったと言うけど、あれは国家が運営する社会主義の経済に近い。現代日本でも全労済、農協、商工会議所とか色々な組織が存在した。組合を潰せば、絶対に自由経済で発展すると言う物でも無いと言う事だ。だから組織力の低い商人達に組合の設立を推奨した。利点も沢山出来るからな。
金、物、人、情報が集まる組合に影響力を持つ事は俺にとって力に成る。
無条件では信用しない。それは怠惰である。人の善意を疑うのは卑しい事では無い。危機管理の意識の問題だ。特にこの世界ではな。

世の中はゲームと同じで敵と味方に分けられる。協力出来るなら味方、出来ないなら敵だ。俺は宦官とだって折り合いをつけてやっている。少額でも定期的な賄賂を贈って名を売っている。いざと言う時に便宜を図って貰う為だ。
（と言うか、まもなく黄巾の乱が始まるのか）
未曾有の国難が訪れる。その時、諸侯は朝廷の命で賊の掃討に駆り出される。それはうちも同じだ。
そこで目についた食堂に入った俺は定食のメニューを眺める。
コロッケ定食、フライドポテト定食、肉じゃが肉抜き定食、じゃがバター定食、ジャガイモカレー定食、ポテトサラダ定食、じゃがいもグラタン等々、食文化は古代中国とは思えない程に発達している。
（調味料や食材の種類が多い。どうやって漢に普及したんだ？）

考えても仕方がない。あるがままに受け入れるだけだ。
俺は適当に選んで注文した。そして出来上がるのも早い。
「お待ちどうさま、焼き香蕉（バナナ）定食です」
「うむ」
店の娘の尻を挨拶代わりに一撫でする。むふふ、弾力があって良い尻だ。
「きゃっ」
顔を真っ赤に火照らせ恥ずかしがって走り去るのは、俺の周りに居る女官と違って初々しくて良い。
うちの女官は俺のお手つきばかりで反応も新鮮味に欠ける。たまにはお茶漬けが食べたく成るのと同じだ。
真の男はあらゆる女を認める。何故なら、あどけなき少女でも孕ませる事は出来るからだ。老婆もロリババアなら許す。見た目、イケテるなら立派な女性として認めてやろうでは無いか。
食べると言えば食事だ。
「さて、食うか」
俺の前に焼き香蕉と麦飯、納豆汁の定食が並べられる。南蛮から渡ってきた貴重な栄養源だ。ほとんど山ばかりの漢帝国でフルーツは限られている。だからこの料理は大流行していた。
麦飯に焼き香蕉を乗せ、納豆汁をかけてぐっちゃぐっちゃに潰しかき混ぜる。そして飲み干すのが正しい食べ方だ。
ぐっちゃぐっちゃにしていて思う。まるで朝鮮人の弁当だ。
（味も大切だが、見た目どう食べるかを気にしないのも問題だな）
人の生き様もそうだ。『どう死んだか』よりも『どう生きたか』こそが大切である。
俺は生き抜いてやる。俺以外の家臣、民草が死に絶えても俺さえ生き残れば荊州は滅びぬからだ。どんな場所で生きようと、我が力で世の中を変えれる。この先、どんな道を進もうとそれは俺の選択だ。
（この糞不味い料理も俺の選択だな……）
飯を食い終わった俺は郊外の共同墓地に向かった。
「ご苦労さん。どうだかみさんの調子は」

馴染みの守り番に声をかけた。こいつは産後の妻が家で帰りを待っている。朋輩としての意識は団結を生む。だから俺は身近な者の個人情報は頭に叩き込んでいた。
「はい劉琦様、お陰様で異常ありません」
好意を稼いで置くのも布石だ。いつかこいつの妻と会う機会があるかもしれんからな。
「かみさんに喰わせて栄養をつけてやれ」
守り番に差し入れを手渡すと施設の中に入る。
ここでは医療や防疫の研究を行っている。送り込まれた罪人は生体サンプルとして切り刻まれ活用される。
名医に数えられる華佗を誘致出来たのは幸いだった。あらゆる臨床試験を認可しており、華佗は人々を救う為だと嬉々として仕事に邁進していた。脳梁（のうりょう）を切除して分離脳を作ったり、野犬の首と罪人の胴体を繋げたり、娼婦を介して性病を、流民を介して疫病を感染させるとか、優性遺伝の理論やら中々、面白い研究をしていた。
一方で人体に有害な成分の発見も進んでいる。病原菌や劇毒物だ。俺は戦で味方の損害を減らすべく、これらの発見を利用させた。
「劉琦様、ここは素晴らしいですな。皆が病を根絶する為に寝食を忘れる程、取り組んでいる」
華佗は笑顔でそう言うが、ここは牢獄だ。医師や研究者を掴まえて放さぬ為のな。
前に進もうとすれば袋小路にはまる。だから無理に進むより立ち止まった人は強い。
守りの姿勢こそ現状を認識し視野が開ける。だから投資も出来る。

俺の元には様々な人材が訪れる。多くは俺を見極め仕えるか判断する為にだ。
雇うのは俺なのに上から目線じゃ気分が悪いわ。
今回はそうでは無かった。
「お側に置いて貰えませんか。お役にたちたいと思います」
そう言って仕官して来たのは荀彧、数年前に人拐いから助けた少女

だった。
この娘、若輩ながら名士を次々と輩出する荀家の出で、麒麟児と巷でも噂されている。その気に成ればコネだってあるし、中央での役職や仕官も望みのままだろう。それがわざわざうちに来た。
「荀文若、お前は物好きだな。うちは確かに中原と江南を結ぶ要だが、都に比べたら色々と劣るぞ」
「その様な事、劉琦様にお仕え出来るなら問題ではありません」
答える荀彧の容姿を観察する。まだ成長途中か、身長、胸囲共に足りない。だが俺に仕えたいと言う心意気は買ってやる。
「うちでは年若いからと官吏を遊ばせて置く余裕は無い。覚悟しろ。荊州の為に馬車馬の様に働いて貰うぞ」
荀彧は金髪を揺らして力強く頷いた。
「はい！」
この時代は身分制度が厳しく、官位を持つ者とそうでない者の差は隔絶している。
平民の搾取と虐待。気に入らないと権力者は民に暴力を向け命さえ簡単に奪えた。何の罪があったのか？　無実でも無実の罪と言う罪だと捏造出来た。正にやりたい放題である。
しかしそれは民を統べる者として相応しくない。品位に欠ける行為だ。
官匪は漢帝国を滅ぼす獅子身中の虫と言え逮捕か処刑すべき相手だった。
しかし現実は目こぼしされ、私腹を肥やしてやがる。
だから俺は親父の為にも風通りを良くしてやろうと動いた。
「どれにしようかな」
荊州の地図を前に鏢（ひょう）を投げる。刺さった場所が今回の目的地だ。
豪族の不満分子を処断する。これは州牧であるうちの親父の権威を見せつける事に成る。奴等の貯め込んだ財産は国庫に入れるし、領内は引き締められる。良いことづくしだ。
俺は直接手を汚す事はしない。世間での印象って大切だからな。信頼のおける武官、関羽を呼んだ。

関羽は俺の情婦でもある。しかし公私を切り替えられる良い女だ。
「ここの一族、好き放題にやってるんで邪魔に成ってきたから、ちょっと行って皆殺しにしてくれるか」
俺が多くを語る前に、関羽は何か納得したのか頷く。
「民草を苦しめていると噂を聞いております。性悪な連中、叩き直す事も出来ぬなら処断も仕方ないでしょう。承りました」
「ああ、だが若い女子供は助けてやれ」
ロマンチストで過去を忘れず男は復讐に走るが、女は昔の男なんてすぐに忘れる。儒教の教えがどうの、品位に欠けるとか関係無い。現実主義だから状況を受け入れる。子供は幾らでも教育で書き換えられる。やっぱり周囲の環境の影響が大きいな。
「それは真っ先に処断すべきでは無いでしょうか。情をかけても遺恨を残す事に成りましょう」
眉をひそめ異論を唱える関羽だが、まあ一般的な見解だな。俺とは見えてる物が違う。
「何処にでも居る普通の家族。善き父、夫、兄であったかもしれない。だが民にとっては最悪をもたらす者であった。その事実を確りと教えてやれば良かろう。考え違いをさせるなら、それは俺の努力が足りなかった結果だ」
お陰で死ぬならそこまでって事だな。
俺は「頼むぞ、愛紗」と真名を呼び、拱手(きょうしゅ)の礼をした関羽の肩を叩いた。

治安部隊や民兵グループは正規軍の補助的な役割がある。外敵が侵攻して来る有事に備えて実戦経験を積む良い機会だった。俺は新兵に合流する様に命じた。
関羽が手勢を率い疾風迅雷と出発して行くと、後続として弟が鍛えている新兵を、物資の輸送と死体の処理に送り出す。兵士は血に慣れる事が必要だからな。戦の雰囲気も体感出来る。
責任者は最終確認をする義務がある。
関羽の仕事は早い。俺にとって邪魔者は始末してくれる。

俺は制圧した街に悠々と入城した。我が兵士は、痩せ細った民に食事を配給している。
宣撫工作ってやつだ。
「劉琦様だ」
俺に気付いた民が感謝の声をあげる。
「劉琦様、有り難う御座います」
劉琦様、劉琦様と騒ぐ民に笑顔で手を振り、屑の首と御対面に向かう。
素直に縛につく連中でも無いから生き残りは女子供だけに成ったそうだ。
街は綺麗に清められており血の臭いもしない。屑が幾ら死のうと構わんが、民の生活を乱せば収益も減る。それは宜しくない。だから整理整頓、清潔清掃は当然だ。
遊んだ後はお片付け、殺した後は清掃。社会の常識だな。
とは言ってもこの時代、町の道端には糞尿が普通に垂れ流しされている。俺の前世でもバスの中で女性がやって注意され、逆ギレの暴行を起こした事件があった。中華の民族性は凄い。数世紀経とうが変わらないって事だ。
だけど俺は不潔なのは我慢できない。何かヤバい病気が流行るからだ。
「準備出来ました」
「よし、いっちょぶわぁーっと行こう」
死体を作る時は後始末に配慮する。纏めて燃やした。
立ち上る煙を眺めながらぼんやりと洋画の葬式シーンを思い出した。神父か牧師が台詞を言っていた。
（ａｓｈｅｓ　ｔｏ　ａｓｈｅｓ，　ｄｕｓｔ　ｔｏ　ｄｕｓｔ、いやこの場合はｄｕｓｔよりｇａｒｂａｇｅの方が正しいか？）
何しろ殺される連中は、殺されるだけの罪を犯して来たゴミだからな。

1―2

「あっ、劉琦様、んっ……悪戯は駄目ですぅ……」
「むふふ、良いでは無いか」
　若い女官に膝枕をして貰いながら俺は今後の生存戦略を考えていた。嘘じゃないぞ。いかに来るべき乱世を生き残るか。これが難しい所だ。
「ひぁ！　劉琦様がいらっしゃるから動けないのに……そんな所ばかり触らないで」
　太股を撫でるとくすぐったいのか、可愛らしく痙攣していた。哀願する様に劣情を感じさせる。
　するとドタドタと足音が聴こえて来た。
「劉琦様、大殿より火急の使者が参りました」
「何だ、親父に隠し子でも居たか？」
　そんな冗談を言いながら使者を通した。拝礼しようとするのを止め用件を告げさせる。
「急用なのだろう？　挨拶は良いから話せ」
「はい、袁術配下の孫堅が南郡に攻め寄せて参りました。樊城（はんじょう）に於いて黄祖将軍が果敢に抵抗しておりますが、敵の兵力は圧倒的。劉表様より参陣のご指示です」
「ふぁっ？」
　孫堅、江東の虎と自称する中二病っぽい奴だと思っていたが、うちに攻めてくるとは覚えていなかった。孫堅は三國志の英雄、ガチで勝負するには不味い。主人公補正で此方が負けると思った。
「豫州から来るのに、どうやって此方の警戒を突破したんだ？」
　豫州は荊州の東、南郡は新野城の西。間には俺の新野城があるのにだ。競合地域である南陽郡で動いていたら流石に気がつく。考えられるとしたら江夏郡から水路を利用した浸透であろうか？
「それは後で考えれば良いでしょう。孫堅だけでも手強いのにこの上、袁術軍主力が到着すればどうなるかは明らか。兄上、ここは急ぎ父上に合流すべきかと」
　親父の物は将来、俺の物に成る。すなわち俺の私有財産が脅かされている。それは許せねえ。

「劉琮、関羽。お前達にここを任せる。背後を突かれてはかなわんからな」
「お任せ下さい。兄上の留守は確りと御守り致します」
俺は襄陽城(じょうようじょう)の親父に合流すべく兵を率いて南下した。

襄陽城に入城した俺は親父と合流した。親父は漢水の水運を使い、俺より先に到着していた。情報も早いな。流石は領主様だ。
「遠路、御苦労だったな」
「父上の命とあれば地獄の底まで御供します」
畏まった口調とは裏腹に俺はニヤリと笑みを投げかけた。
「はっはっはっ」
親父は機嫌良く笑うと俺の肩を叩き、軍議の席に招いた。本当に儀礼を重んじるなら使君とか呼ばないといけないのだろうけど、ここには身内と家臣しか居ないので親父もざっくばらんだ。
親父の傍らには蔡瑁の野郎が居やがった。視線が合うと一礼して来た。
「孫堅の仕掛けてきた戦は孫家開闢以来の愚挙であると考えます。これを討ち滅ぼすは我ら荊州、劉表様の家臣として正義であり武人の名誉であります」
軍議が始まると最初の発言は、蔡瑁の精神論的な発言だった。
「ごたくはいいから、本題に入れよ」
俺の言葉に蔡瑁は顔を歪める。
「敵は樊城を包囲、黄祖将軍は敵中に孤立しております。どの様に救援を行うべきかが目下の議題であります。敵は大兵力で袁術の資金によって装備も優れていますが、地の利なく、我々が大義に基づいて行動すれば解囲は容易いでしょう」
蔡瑁の言葉に苦笑を浮かべる親父や武官連中だった。言葉を飾った所で現状は変わらん。俺は親父に意見具申した。
「父上、俺は来たばかりだし、ちょっと偵察に行って来ても良いですか？」
親父の許可を得ると早速、俺は敵情を自分の目で見るべく少数の供

周りを連れて前線に向かった。英傑と言う物を直に見たかったのだ。
「何だと……！」
だけど予想外の光景が広がっていた。
略奪と殺戮が行われている。自分の領土に組み込もうとするなら民を虐げてはならない。
だが、それを行っていたのは孫家の兵達であった。
特に長女の孫策は血塗れで、兵士も民も関係無しに殺しまくっていた。
くすくす笑い声をあげながら切り殺して行く姿は恐ろしい。そして俺の視線も釘付けだった。
（何て見事なおっぱいだ。ぷるんぷるんとしてはち切れんばかりじゃないか）
組合の情報網で孫策が女だと言う事は知っていた。特徴的な褐色の肌と桃色の髪、報告書にあった似顔絵にそっくりだ。だけどおっぱいについては書かれていなかった。
俺好みではあるが、あいつを倒して俺の女にしてやる、とかはチラリとも思わなかった。
何しろ相手は猛獣。油断すれば此方が喉笛を食い千切られる。
猛獣を倒すには散弾銃とか猟銃だろうけど、火薬式の武器は俺の手元に無い。
「あれ使うか」
劇毒物使用、毒矢による奇襲を思い付いた。卑怯とは言わせない。相手も非道を行う連中だ。目撃者もぶっ殺せば後腐れ無い。
侵略者の親玉を殺せば荊州は平和に成る。殺さねば民の暮らしが脅かされる。
だから俺は悪くねえ。
「糞共を必ず全部ブッ殺せ」
俺の指示を伝えると伝令が足早に走って行った。
外聞もあるし広言は出来ないやり方だが、成功すれば親父は黙認するだろう。

孫堅の後を継ぐべき孫策は気分屋で、よく周りに迷惑をかけており古参武将から叱責を受けていた。
だが彼女には生まれ持った動物的直感と言う最大の特技があった。故に配下の者は誰も彼女の心配をしない。信頼していたのだ。
その事を俺は知らなかったのだが、殺戮の血に酔っていた故に孫策には油断があった。
（とりあえずあいつから潰すか）
俺は陽動を開始した。堂々とあいつの前に俺は姿を現した。
「孫伯符、我が領を犯し民草への虐殺、断じて許せん。これ以上の暴虐は俺が止めて見せる」
「誰よアンタ？」
桃色の髪をかきあげながら孫策は俺を見下した視線で問いかける。
「腐った袁術の犬に答える舌は持たぬ」
あ、でも我が領とか言っちゃった。でも俺が誰かまでは気付いてないみたいだ。
「いい度胸ね」
孫策が真顔で斬撃を放って来た。あぶねぇ、避けたら後ろの木が木っ端微塵に成った。
「なんちゅう攻撃をして来るんだ」
ぞっとしながらも俺は計画に従って孫策を伏兵の位置まで誘き寄せる。後退する途中で何人かの部下が倒されてしまった。仇は必ず討つ。
俺を追って孫策は隘路に入った。腐れ外道め、天誅を食らわせてやる。
「今だ、放て！」
甘寧の奇襲部隊によって落とされた大岩が孫策の退路を断った。続けて矢の雨が彼女を襲う。
孫策に続いていた孫家の兵は主人を守ろうと盾となるが次々、矢に射たれ倒れていく。残るは孫策のみ。実に勿体無い女だがやむを得ない。
「とどめを刺してやれ」

俺が部下を煽ったら、「雪蓮！」と大声が聴こえた。岩で塞いだ退路から騎馬が一騎、飛び込んで来た。
「母様、どうして！」
「馬鹿娘を守るのも親の務めだ」
孫堅だ。ムチムチとした色香を放っており、子持ちにしては体の線も崩れておらず美しい。
何とも凛々しい姿だが、岩を越えて来たのは彼女だけだった。
「くっ……！」
剣を振り回し矢の雨を凌いでいる。母娘揃ってなんちゅう身体能力をしてるんだ。
だけどこれは戦なんだ。感動の再会やご都合主義な救援が間に合うなんて事はあり得ない。
「かっ……あっ……！」
二人はじわじわと体力を削ぎ落とされ、矢の雨に針鼠となって倒れた。泥と血にまみれて無惨だ。
華佗の発見した病原菌、マジ強ぇ。ちょっとかすっただけで致死量だからこれだけ食らえば死ぬわな、当然。
よく見ればまだピクピクと痙攣している。命も風前の灯火か。だが油断はいかん。
「息の根を止めてこい。ただし遺体は丁重に扱え」
生きていても邪魔だが、死体なら役に立つ。
俺は孫権に会談を申し込んだ。母と姉の不在で彼女が遠征軍を指揮している。
会談の場で脇を固めるのは古参の将、黄蓋と軍師の周瑜。対して俺は身に寸鉄も帯びず、供も置いてきた。
「孫文台殿、孫伯符殿は我が軍が討ち取りました」
「炎蓮（いえんれん）様と雪蓮（しえれん）を？　あり得んな」
周瑜は軍師でありながら現実を認めない。
一方で、俺の言葉に表情を変える孫権。脇に控える黄蓋は鋭い視線で此方を観察している。
「元々、我らと孫家の間に恨みはない。御遺体をお返しいたします」

俺は死体を凌辱して喜ぶ性癖は無い。反応が無いなんて詰まらないからな。
「うあああああああっ！」
疑ってかかっていた様だが、遺体と対面すると孫権達も流石に動揺を見せた。叫び声をあげたのは周瑜か。
連中は混乱しており、家臣の中には誠意を見せた俺に殺意を向けてくる者さえ居た。だが誠意を見せた俺を斬れば悪名が広がる。そこら辺は阿呆でも分かる理屈だ。
孫権は感情に耐えながら口を開いた。残され家を継ぐ者としての自覚か。
「御配慮に感謝します。しかし我らは亡き主君の命により、引き下がる分けには参りません」
袁術の命令による出兵孫堅が死んでも義理を通す価値があるのか疑問だ。
「それですよ」
俺は素直に疑問を投げかけた。
なぜ袁術は動かないのか。俺が兵を率いて来るまで猶予はあった。袁術軍が孫堅軍に合流していれば、此方の損害は計り知れない。だが敵は勝機を掴まず、逆に孫堅と孫策が死んだ。
「誰が一番、得をするのか」
荊州を攻める孫堅。双方が共倒れをすれば絵図を書く者にとっては理想的だろう。勝てば荊州が手に入る。負けても孫堅の鍛えた軍勢が手に入る。
「本当に倒すべきは誰だか心当たりがあるのでは無いですか？」
はっとした表情を浮かべる孫権。一方、周瑜は俺に厳しい視線を向けてくる。
俺が囁いたのは、袁術と孫家の間に疑心暗鬼の不和を生み出す為の毒だ。効果はじわじわと効いてくるはずだ。
こいつらが撤退しない場合、漢水の江賊やヤクザを扇動して兵站をかき乱してやる。食中毒を流行らせて苦しめてやるのも楽しそうだ。

孫権がどう動くか色々と考えていたが、杞憂に終わった。
孫権は夜を徹して軍を返し袁術を攻めた。孫家の戦意は高く瞬く間に旧袁術領を制圧したが、袁紹が袁術の仇討ちを名目に軍を派兵、孫権はこれも撃ち破った。
しかし国力など持たない孫家は継戦能力の限界に達していた。一方の袁紹は宦官に訴え、孫権討伐の勅許を求めていた。袁紹は名家の面子にかけて引き下がる分けには行かなかったのだ。
悪いのは袁家で、俺も何とかしてやりたかったが、袁家は腐っても名門。孫権ごときとは影響力が違った。
賄賂を贈って来ない孫権は宦官に受けもよろしくない。故に孫権討伐の命が下された。
「孫権は朝敵、か」
荊州にも勅使が来た。親父は俺に諸侯との顔繋ぎも兼ねて行って来いと丸投げして来た。
新野城に戻った俺は家臣を集めて相談をした。
「孫権を追撃しないと聞いた時は驚きましたが、深謀遠慮の策、袁家をここまで疲弊させるとはお見事です」
家臣は離間の計と俺を褒め称えるが、スッキリしないな。
「だけどこれでは袁紹を助ける事に成る。孫権討伐に参陣せよと言う命令だが、どうするか」
うちは皇族の末裔、それでも袁紹の風下に立つ事となった。
「頃合いを見て孫家の将を引き抜き、あるいは保護してはどうでしょうか」
荀彧は新参者と言う立場に臆するされることなく、堂々と見解を述べた。
荊州を治めるうちにとって人材は少ない。この機会を活かして人的資源の確保を行うべきだと。
確かに滅ぼされる事に成る孫家なら吸収するのも悪くは無い。それなら討伐に参加する意味もある。
侵略者であった孫家に家族を殺され復讐したい民も居る。諸悪の根元であるくそったれの袁術は取り巻きの豪族や官吏と共に孫権達

が皆殺しにしたから、俺としてはもう復讐はどうでも良い。賊軍であっても漢にバレなければ匿っても問題にならない。保護する事が今後の乱世で荊州が生き延びる術と成る。
「基本、その線で行こう。行く面子だが、劉琮は残れ。俺が死んだらお前が後を継ぐ立場だからな」
「はい、兄上のご指示に従います」
指揮官と次席指揮官が同じ船に乗る事があってはならない。船が沈めば一気にスタッフが壊滅するからだ。例えるなら織田信長の政権を支える中枢が本能寺の変で壊滅し、織田家が滅んだのと同じだ。
信長と嫡男信忠が死んで残ったのはぼんくらばかり。そりゃ秀吉の良い様にされるわ。

諸侯の軍勢や義勇兵から成る官軍による孫家討伐。
官軍の総大将に任じられた袁紹のお顔を拝みに行く前に、俺は準備の為に動いた。
これからの戦を感じさせないうららかな日差しの中、それは実行した。
金髪と白い肌。何処が漢人なのかと思うが、その特徴は袁家を表している。
川で水遊びをする袁紹主従。その周囲を金色の武具を纏った親衛隊が警護している。しかしざるだな。
護衛の数は少ないし、俺の位置からは視姦出来るぐらいだ。俺は林の中に伏せていた。
「そろそろです」
甘寧の言葉に頷く。
喚声が聴こえた。部下に身分を隠して雇い集めさせた者達が、ケツ拭いて待ってた。そして頃合いを見て襲撃に移った。
一斉に飛び出した襲撃者は、護衛を数の力でねじ伏せて警戒を突破する。脆すぎる。俺の兵なら失格だ。
「何事ですの！」
慌てて衣を身に纏う袁紹の前で護衛の兵が次々と倒されて行く。

親衛隊の名が泣くぞ。
「お命頂戴する」
「させるかぁ！」
側近の武官は主人の盾として立ち塞がる。しかし数で押され始めていた。
流民を雇い襲撃させる。計画通り上手く行っている。だけどこのまま死んで貰っては都合が悪い。
頃合いを見ていた俺は供回りを連れて、馬を走らせ襲撃者に切り込んだ。
「そぉい！」
俺の斬撃で敵の首が転がって行く。駆けつけた振りをして袁紹は救出、襲撃者は全員殺して証言者を消す。
我ながら、計画が上手く行きすぎて怖いくらいだ。
「どなたか存じませんが、御助成、忝（かたじけ）ない。此方は袁家当主の袁本初様、貴殿の御名前を御伺いしても」
討ち漏らしは無い様だ。死体の数を数えていると、袁紹の家臣が謝辞を述べて来た。
俺は名乗った。
「俺は荊州の劉琦だ。本初殿に怪我は無い様だな」
俺の視線の端で袁紹は侍女に着付けの介助を受けている。濡れた体に着た衣類の着心地が悪いのか、体をひねったりもじもじしている。
「何と、劉表様の御子息であらせられますか。これは御無礼を」
改めて礼をさせて下さいと言うが、俺は兵を率いてこの地にやって来たばかり。宿営地の手配もあるし後程、参陣の報告も兼ねて御伺いします、と応対した。
向こうも当然と納得する。だが俺はここで更に好感度を稼いでおく事にした。
「本初殿、ここで知り合ったのも何かの縁、帰りの護衛に俺の従者を半分、同道させましょう」
襲撃にあったばかりで護衛の数も減っている。目に見える形で貢

献できる。
「あら、劉琦様は親切ですのね」
皇族の末裔である俺に様の敬称を一応、付けてはいるが何か上から目線だ。単に阿呆の子か？
無礼で非常識な者は実力も知れている。袁紹もその程度の器量と言う事だな。
国を守るのは言葉だけではない。目に見える武力が抑止力となる。民を信じ諸侯と同盟を組むにしても、絶対必要な力だ。
俺は颯爽と駆けつける事で袁紹に恩を売り、力の一端を見せつけた。
国家に真の友人は存在しない。やるかやられるかだ。最初の掴みとしては悪くないスタートだ。

歴史に転換期や特異点があったとしたら、袁術が倒れた事だろうか。
南陽郡は豊かな地であった。だが孫権と袁術の戦い、そして袁紹と孫権の戦いで疲弊した。孫権は袁紹の侵攻を撃退した後、戦力の回復を行うべく豪族の私兵である部曲に限らず、民からも大規模な動員を行っていた。それは生産力の低下を意味する。
本拠地の渤海を離れやって来た袁紹は、接収した地方領主の屋敷に討伐軍の本営を置いていた。太守と言う地位は諸侯を束ねる総大将として不足無い。俺は袁紹を襲撃から救った事と、名家の生まれと言う事で次席指揮官の地位を得た。
「劉琦様、私は曹孟徳と申します」
隣の席に座る金髪クルクルヘアの娘が話しかけてきた。曹操は宦官の孫と言う卑しい生まれだが、歴史を俺は知っている。だから友好的に対応した。
「貴様が曹孟徳か。中々の切れ者だそうだな。活躍を期待してるぞ。まぁ、うちはコネだけはあるから金以外の事なら大抵、相談に乗れると思う」
飾らない言葉に曹操は驚いていた。

「そ、そうですか。有り難う御座います」
俺が曹操や諸侯から挨拶を受けていると、頃合いを見て軍議が開かれた。
「皆さん、今回は私の為にお集まり頂き有り難う御座います」
袁紹の開口一番な言葉に、お前の為じゃねえよ、と内心で皆が突っ込みを入れたはずだ。
「お馬鹿さんな孫権さんは愚かにも劉表様を攻めましたけど、尻尾を巻いて逃げたと言うじゃありませんか。それにも飽きたらず、今度は高貴な私に刃向かって来ました。名門中の名門である袁家を敵に回すとは、即ち漢を敵に回すと言う事ですわ」
以下省略、袁紹は長々と喋りっぱなしだった。だから途中から俺は聞き流す事にした。
これだけの官軍を動かすと兵糧も大量に必要と成る。
この頃の漢は農村が多く重工業は存在しなかった。逆に言えば農作物の自給率は高い。
だから金のある袁紹が兵糧を負担してくれていた。
それだけは役に立っているな。
「麗羽、本題に入ってくれないかしら」
お、勇者が居た。
「ちょっと、華琳さん、人がお話をしてるのに口を挟まないで下さるかしら。まだ終わってはいませんわ」
俺の隣に座っていた曹操がうんざりした口調で口を挟んだが、かえって袁紹を調子づかせた様だ。
うちの荊州もそこそこ金がある。まもなく黄巾の乱が起きると言う知識で、各地から米を買い漁っている。そうすれば米の相場が動く。どんどん釣り上がって行くが、その分、市場の流通量が減り庶民の口に入る量も減る。
結果として蜂起を助長する。それは乱世の始まりを加速させ、俺にもチャンスがやって来る。
（結局、戦で適度に間引かれるから食料事情も好転するし、その後に出生率も上がるし、日常の大切さを認識するから平和への近道かもな）

勝てる戦を選んで戦う。先ずはこの戦からだ。
官軍と孫権の戦は南陽郡を襲う三度目の戦禍となる。多くの民が巻き込まれるが仕方ない。それに荊州にとっては民を殺された復讐戦でもある。
(何人か良い人材を確保出来れば儲け物なんだが、孫家が玉砕するまで抵抗されると厄介だな。どうやって接触するか……)
俺が色々、考えている内に袁紹の演説も終盤に差し掛かって居た。
「それに、これは聖なる戦いですのよ。私達が孫権さんを討たねば誰がやると言うのかしら?」
袁紹は正義のヒーロー気取りでそう言うが、獣の血が騒ぐ戦いだろう。皆、飢えた虎や狼に成る。心まで武装しろとは言わないが、頭のネジがぶっとんでるのは確実だ。
袁紹と目があったので俺は軽く頷く。勝ち方は大切だからな。悪評は千里を駆ける。
「私と同じく高貴な血を継ぐ劉琦様は、他の皆さんと違い名家なだけにお分かりの様ですわね」
文句の付け所の無い勝利こそ俺は求める。
「まったく、目立ちたがりの馬鹿ね」
曹操の呟きに反応して視線を向けると彼女と視線が合った。お互い苦笑を浮かべた。
(曹操は幼児体型で男に日照ってるから女に手を出してるらしいな)
最低限の情報交換、行軍序列の割り振り等で議事は進んで行く。
袁紹は本気で勝つ積もりだろうが、頭が足りていない。四世三公を輩出した袁家と宗室の流れを組むうち。どちらも名家だが、最後は本人の努力だ。
袁紹は恵まれた立場に甘えている。それでは勝てる戦も負けてしまう。総大将が阿呆だからと言っても共倒れは御免だ。
俺の明るい生活を守る為にやるべき事は多い。荊州を守る事は前提条件だ。
世界の片隅ではなく要所なので厄介だ。
うちに喧嘩を売って来た孫堅、そして親玉の袁術は消えた。荊州の

平和の妨げに成る者は皆、殺す。その覚悟はある。だけど今回の目的は人的資源の確保、忘れては居ない。
軍議といいながら攻撃計画は決まらず、中身としては実り薄く、ほとんど諸侯の顔見せだけで終わった。流石にそれでは不味いので、俺は斥候の派遣により更なる情報収集を進言した。
「お任せしますわ」
袁紹は簡単に了承したので、用件は済んだ。行動に移すべく宿営地に戻ろうとした。
「劉琦様」
しかし袁紹に呼び止められた。なんじゃらほい。
「まったくあのちんちくりんは、私に嫉妬してるのですわ」
御自慢の金髪をいじりながら袁紹は俺に不満を漏らしている。曹操とは真名を交換する間柄だが生意気だとか、あの髪型は自分に対する憧れだとか思い込みも混ざっている。
他人の愚痴に付き合うほど鬱陶しい事は無い。このまま袁紹に付き合っていては日が暮れる。
「それなら曹孟徳には手柄を立てる機会を与えない。後方に配置すればどうでしょう。本初殿は孫権相手に負け戦をされたが、最後に勝てば良い」
とりあえず目についた敵にぶつけて消耗させ磨り潰す方法もあるが、曹操は三國志の英雄。簡単には潰せないだろうから出世の機会を潰す方向を勧めた。
「そうですわね。華琳さんには後詰めをして貰いましょうか。米蔵の番人がお似合いですわ」
何と言っても、道義的にも討伐の勅許が出た官軍には正義がある。だけど討伐は簡単に済まないはずだ。賊軍の汚名を被った孫権には後が無い。だから戦意は高い。
古来より名将は天才ではなく変人である場合が多い。名将を支えたスタッフこそ優れて居たと言える。孫権の軍事行動を支える将と軍師をもぎ取れば、抵抗力も削がれる。
「民を苦しめない為にも、速やかに孫権を撃ち破りましょうぞ」

勿論、建前である。

袁家の名声と勅許と言う錦の御旗で集まる有象無象の輩。お陰で官軍と孫権の兵力差は１０倍まで膨れ上がって上がっていた。これだけあれば孫家を潰すことだって出来る。

（幾ら袁家が金持ってると言っても出費がでかそうだな）

戦費の報奨は略奪の自由と言う形で報われる。

報告によると、諸侯の兵は各地で略奪をしながら進んだ為に、進行は遅々として進んで居なかった。一方、親父の率いる荊州兵は南陽郡を解放、俺は長沙から豫州に入った。汝南を落とす事は官軍の最終目標だが、俺は着実に地固めをした。

捕虜はそのまま荊州に送り、ふるい落しにかける。此方に鞍替えをするか、役立たずで朝敵の賊として扱われるかだ。そして孫権には、不幸にして刃を交える事に成ったが落ち延びるなら受け入れる用意がある、と密かに伝えておいた。お陰で敵の抵抗はほとんどなく、此方も無駄な攻撃を行なう必要が無かった。

たまに話が伝わっておらず襲って来る奴も居たが、孫権から通達の行って無い身内以外のＭＯＢだろうから、此方も遠慮なく反撃し叩き潰した。

まともに孫家の猛者を相手にしていたら荊州の損害も大きい。八百長試合を申し込んで良かったと思う。

初めに投降して来た有力武将は孫家の宿将である黄蓋だった。黄蓋と言えば投降を偽装して火攻めを成功させた逸話を思い出すが、今回は孫家を生かす事に繋がるから裏切りは無いと思う。

「袁紹にはしてやられた。わしらは負けた様じゃな」

疲労感を漂わせて黄蓋は言った。

普通に考えて消耗戦に持ち込めば官軍は勝つ。孫権は負けだった。

黄蓋の大きな胸から顔に視線を向けて俺は答える。

「いや、お前らの選択は正しい。意地を張っても民を苦しめるだけだ。まぁ悪い様にはしないから任せろ」

黄蓋は頭を下げた。

「宜しく御頼み申す」
黄蓋は連絡と調整の為に俺の所に残り、他の兵や官吏は家族共々、後方の荊州に送り出す。
いくらうちの領内でも、本来は捕らえたら処断すべき賊軍の将だから自由に出歩く事はさせられない。暫くは不便をかけるが我慢して貰う。
（全部が全部、助けられる訳じゃないしな。そこは仕方ない）
神ならぬ身、己に出来る事も限界があるが、主だった将と家族は救えると思う。

袁紹の従妹、袁術は字を公路と言い、汝南汝陽の人、司空であった袁逢（えんほう）の子……って、そんな事はともかく、豫州の汝南郡は、袁家発祥の地らしい。と言う事で袁紹は聖地奪還に燃えていた。
袁紹が従妹の復讐にどの程度の感心があったのかは知らん。曹操や俺らにとってはアウェイで無理に血を流す必要は無かった。
とりあえず参加した諸侯は稼ぎ時と言わんばかりに略奪に邁進し、北東の魯国、梁国、沛国を制圧。潁川群で抵抗を受けている。俺達、荊州兵は南から進撃し汝南郡に一番乗りをしている形だ。
袁術が倒れた時点で、袁家は面子を失っている。袁紹には、下がった袁家の威信を取り戻す事は出来ないだろう。
今後、ライフラインの復旧等でも莫大な金が必要に成る。袁家の資産は湯水の如く消費されるだろう。従妹のつけが高くついたな。
（そう言えば株と妹って漢字が似てるな。置き換えると意味が全く違って面白い）
等と考える余裕すらあった。
結局、この戦は賊軍の将、生死不明の形で終わった。
「孫権の首、この手で取りたかったですわ」
威勢の良い言葉を袁紹は言うが、このお嬢様は、実際に人を殺した事は無いだろう。
「本初殿は胆が太いですな」と上部だけ誉めておいた。
高笑いをする袁紹と別れて俺は、火事場泥棒の様に孫家の面子を連

れて帰国した。
「劉琦様、この度の御配慮に感謝致します」
プライドの高そうな女だが、孫権は躊躇無く俺に頭を下げた。孫権の胸を覗く形に成ったので、楽しみながら俺は告げる。
「孫仲謀、借りはいつか返して貰うぞ」
「はい」
荊州は人口が多い。前に人が多いなら、と親父に言って税率を他所より下げてみた。
するとますます人が増え、税収が増えた。産業革命以前の時代で農業主体ではあるが経済活動も発達している。
北朝鮮がミサイルを撃ったとか、アメリカが空母を派遣したとか地勢リスクで為替や株価が変化すると言う時代では無いので、内需で補えている。孫家が来ても負担は少なかった。
今回の討伐で朝廷には「５０萬的孫家将士全被殲滅」「最震撼的戦役」等と報告を成されており、これは住民の殺害数も含まれている。
実際、孫家の将兵はうちの荊州兵より戦闘力があるはずだ。数はうちの方が多いけど1対1なら負ける。三國志の英雄相手に勝つ自信は無い。だからこそ奇策や武器に頼る。それで孫権の母と姉を殺した。幸い孫権は俺達に感謝していたので、婚姻や姻戚関係で無理に血を入れ無くても信頼関係は出来た。
「朝廷から見たらお前達は逆賊だが、俺はそうは思わない。荊州で心と身体を休めると良い」
俺としては荊州を守ると言う大義があるので、利用できる者は利用する。その為の布石だ。
「孫家の力、如何様にでもお使い下さい」
「先ずはそうだな……知り合う事から始めよう。お前達の事を教えてくれ」
俺には荊州と自分の生活を守と言う目標がある。それで孫家の将にうちの連中を鍛えて貰えれば良い。
袁紹に対しては、愚者を導くのは高貴なる者の務めと適当に吹き込んで置いた。袁紹はただの暗愚では無い。馬鹿っぽい所もあるが寛

容さも併せ持っており、民を慈しむ心もある。多分な。

だから、袁家はこれから復興に忙しいだろう。此方を窺う余裕は無いはずだ。

2．劉琦様びっくり

2―1．

優秀な人材を囲い込む。それは政を行う事にとって必然だ。それには利と情だ。

利益は目に見える物で、情は恩や義理、親愛と言った形で与える。

「君はとびきりの美人だ。今夜、一緒に寝ないか」と孫家の面子をストレートに誘ってみた。

江南の女は褐色の肌をしている為に漢では下賤な蛮族と蔑まれている。俺にとってはそれなりの見た目でおっぱいさえあれば良い。

穴さえあれば良いと、突っ込む事しか考えない下品な連中と俺は違う。柔軟に対応した者が人生を楽しめるのだ。

「あぁ……劉琦様っ……」

そんなこんなで、新たに加わった孫家諸将のおっぱいを一杯、堪能している内に時が流れるのは早い。孫家の者は情熱的で、閨では甘い声を響かせてくれる。

重臣だけではなく孫権も対象だ。

戦に疲れた孫権の心を癒したのは俺だ。家臣を導く主君としての重荷は若い彼女を苦しめていた。友すら簡単には出来ない。

心の隙間を埋めるのは簡単だった。

「ねぇ、私の体……どうかしら？」

孫権は情熱的にくちづけをして来る。だから優しく応えてやった。

「そうだな。俺の子供を産ませる価値はあるぞ」

愛を囁き抱き締めるとチョロい。簡単に落ちた。

俺も初めは肉欲に溺れハッスルしまくったが、孫家を侮っていた。

痛みの後に快楽の疼（うず）きを覚えた孫権は自分から迫って来た。

「愛してるわ」

「あ、うん。ソウダネ、俺モ愛シテルゾ。でも、ちょっと休もうか」

だけど孫権はしがみついて来る。しかも名器で、きゅっきゅっと締め付けて来るから、その感覚に身を任せてしまい、結局は搾り取られた。

「……もう勘弁してくれ」
何度も求められ、体力的に疲労困憊の賢者タイムに成った。隣で静かに寝息をたてる孫権は清らかな表情のままだが、どこか艶々していた。孫家、恐るべし。それが俺の結論だ。
それからしばらくして黄巾の乱が始まった。
来るべきイベントがとうとう来た感じだ。司隷は皇帝陛下のお膝元だから除外するとして、荊州を含めて青州、徐州、幽州、冀州、揚州、⊠州、豫州の八州で賊が急増した。
乱を逃れて来る流民の数は多かった。肥沃な荊州に雪崩れ込んで寄生生活を送ろうとする薄汚い連中だ。これは荊州存亡の危機である！
食い尽くされる訳にはいかない。この世は弱肉強食、だから俺は命じた。連中の息の根を止めてやれ。殺せと。
俺は別に天下を統一したい訳ではない。俺にとって、世界は様々な宗教、民族、思想で別れていて当然で、争いは無くならないと言う認識があった。だから荊州さえ守れれば良い。現状維持なのだから漢が滅びない程度には手を貸す積もりだ。だから他国の民はどうでも良い。
「賊を荊州にいれるな」
一応、俺は清流派と思われているが、うちは国境を堅め流民の入国を制限した。有刺鉄線の鉄条網は無いから、柵と壁を作っている途中だ。その費用は関税で補っている。
移住の基準は働く気のある者だけ許す。それ以外、施しだけを求めて来た難民は必要無い。荊州の民も食わねば生きていけないからだ。最低でも自分の食い扶持を稼ぐ事はして貰う。入国して即座に生活保護申請なんてどこかの国みたいな不正を許しはしない。
偽善者なら救恤とか慈善活動を行うのだろうが、死ぬなら勝手に死ね。生活が出来ない人生を歩んできた自己責任だ。
「天の御遣いが現れてこの乱世を静める、か。下らん」
最近、巷で流れる噂だ。しかし天の力を借りねば鎮圧出来ない反乱と思われているとは、漢の権威も低下したな。俺達が頂く天は帝の

み、と流言を取り締まらせた。これには軍師、官吏も挙って賛同し、朝廷からも誉められた。もし自称天の御遣いが現れても即座に捕らえて斬首だな。

「殺した流民の首は切り取って柵に並べろ」

それを見せれば一罰百戒の役に立つ。死と恐怖を頭に認識させる。だが流民の足を止めても、次に黄巾賊の襲来がある。

「流石、劉琦様。この仕置きを見れば善からぬ事を企む者も震え上がる事でしょう」

ここでは俺の全権を預けられた潘濬（はんしゅん）が、南陽野戦軍の攻撃の指揮を執っていた。俺の傍らで荀彧は、廖立（りょうりつ）の立案した防衛計画の進行を見極めている。

数は多くてもロシアみたいに空挺（VDV）や特殊部隊（SPETSNAZ）を用いて浸透突破をして来る訳ではない。

「弓兵斉射、続けて各個に射て」

守ると言う事は戦う事だ。友愛の精神にも限度がある。限度を超えた無法はぶっ飛ばす。

「痛い、痛い！」

矢の雨が黄巾賊の頭を抑える。俺が房中術の本を読んでる間に味方歩兵は両翼を延伸させるべく前進した。荊州将兵は流血流汗をものともせず勇戦した。

一方の敵だが、しょせんは無辜の民を食い物にする賊だ。正規軍相手に動きは鈍く、此方の動きに翻弄されている。ＯＭＧの様に縦深打撃を行える訳でも無い。そして脆い。

「死ねイ！　このクソ野郎！」

「来いッ」

本来、武は汚い。人を殺す術だ。だから敵をぐちゃぐちゃの肉塊に変えて行く。

「好き勝手に生きたんだ。これも自業自得だな」

敵が例え戦術を知っていて方陣を布いて居ようが、円陣を布いて居ようが、勝利を布陣して居ようが、要害の地に布陣して居ようが、戦うべき時と戦わざるべき時を見極めておけば撃ち破る事が出来る。

獅子は兎を狩るにも全力を尽くす。それと同じだ。
少し妙なのが、太平道の宗教はアイドルの追っかけぽいと言う事だった。
宗教やアイドルを否定する訳ではない。一部、頭のおかしい連中が世間を騒がして顰蹙を買う。今回もその類いだろう。
「劉琦様、戦果と損害の概算が出ました」
竹簡を受け取りながら目を通す。遺棄された賊徒の遺体は４桁、鹵獲された金属製品は潰して再利用する。金目の物は少ない。
紙の専売が廃止され、出版物が増えても竹簡は保存の観点から残されている。公文書を竹簡で保存するのはかさ張るから場所を取りすぎる。その上、重くて手が疲れる。帰ったら親父に竹簡廃止を進言しよう。

黄巾賊起の報が届いて、どれくらい経ったか覚えてはいない。ただ、上から無茶振りをされるのは何時の時代も変わりがない。
「首魁の張角が何処に居るか。はっきりと分かってないのに討伐しろとは、簡単に言ってくれるな」
ほどなくして朝廷からの指示で、黄巾賊の反乱を鎮圧すべく官軍が編成された。
「面倒臭い」
ま、今は従っておく。いずれ宦官の阿呆どもが、何進大将軍を殺害すると言う不祥事をやらかして皆殺しにされる。その時は俺も宮中の糞どもをぶっ殺してやるぜ。
形だけは仕事をするかと、うちから比較的近場の豫州に向かった。
「すんなり討伐に成功されたとしても、この後も引き続き、⊠州、冀州の賊徒討伐も命ぜられるでしょう」
閨で語る軍師連中の予測だ。訪れる未来にうんざりした。それでは北征か北伐と言った長征に成る。
今回の鎮圧には顔馴染みが何人か参加していた。
曹操が率いてきた縦隊は１７００名、俺は独立師の１２００名。作戦計画によると主力打通の袁紹の兵団が５万。これでは実質的に袁

紹軍だ。戟より槍の装備が多い。やはり金のある袁家は装備が良い。
「劉琦様、率いて来た兵はそれだけですの？」
そう言われたのも仕方が無い。北方の守りである公孫賛（こうそんさん）は幽州から3万もの兵を動員して来ていた。公孫って聞くと曹と宋の故事を思い出す。
（曹を滅びに導いて主君の曹伯陽（そうはくよう）と共に討たれた公孫彊（こうそんきょう）は祖先かな？）
前回、袁紹に協力した時は万の兵を動かした。だが今回は得られる物も金と官位だけ。阿呆臭い戦で兵を損なう気は無かった。曹操の所はどう言う腹積もりかは知らん。
「本初殿が居るから十分だろうと、頼りにしておりますぞ」
「当然ですわ」
上機嫌の袁紹に兵糧を恵んで貰う事にした。荊州から運ぶコストを考えたら、少しでも安くしておきたい所だからな。俺のおっぱい予備軍、荀彧の提案だ。
「袁紹は豫州の復興を怠っており、汝南郡以外には興味が無いそうです。復興に回さなかった分、袁家の資金はまだ余裕があります。余裕があるなら、借りを作っても踏み倒せば良いと考えます」
袁紹は復興をしたくても出来ない理由があった。略奪と殺戮で住民は減り、税収も減っている。人の上に立つ以上は命令した責任もある。高笑いしてたら済む話ではない。
まあうちにとっては、周辺国の国力が低下する事は喜ばしい。仮想敵は弱いほど良いしな。
とりあえず荀彧は「流石、我が子房よ」と誉めておいた
（しかしおっぱいの成長率は芳しく無いな）
顔を赤らめて照れる荀彧にちらりと視線を向けて、同じ軍師でも周瑜との違いを比較してしまった。周瑜の存在を主張するふくよかなおっぱいに対して、荀彧はストーンとした体型で、色香や艶やかさはまだまだ足りない。
蕾は美しい華に成ってから愛でるのがマナーだ。俺は荀彧の成長を応援してるぞ。

袁紹が主攻を行う間、曹操は騎兵により迂回して敵の側背に助攻を行った。俺は無理せず包囲網の形成を手伝っていた。
接触線＝前線で、戦線を構築すれば後は簡単だ。敵を包囲網から出さずに掃討すれば良い。ＣＯＩＮ作戦と同じだ。
「皆、励め。民の為、漢の為、賊徒を殺せ」
袁紹と曹操の攻撃で敵は北へ敗走していた。荊州兵は弩や弓で遠距離攻撃を行うだけ。敵は冀州方面に逃走を図るが、ぼこぼこくたばって逝く。楽勝過ぎてあくびが出る。
そう思っていたら、敵は俺の本陣を目指して逆襲をしかけて来た。
「よくも同志を！」
賊将の張曼成（ちょうまんせい）は味方の前哨線を浸透突破した。その手腕には素直に驚いた。
俺の矛である関羽は前線で敵に足止めされている。まあ、そう言う時もある。
後、関羽の場合、矛より刀か
「下郎、跪（ひざまず）け。頭を垂れるなら一思いに殺してやるぞ？」
俺は慈悲の言葉をかけてやったが、恩知らずにも怒りの表情を浮かべ斬りかかって来る。
「貴様ニ土（つち）の味（あじ）を味（あじ）アワセテやる！　シネエエエエエエエエ！」
「おわっ」
壮烈な斬撃が閃光と共に放たれて来た。
汚いな。流石、黄巾賊汚い。礼節を知らず卑怯すぎる。いい加減にしろよ。
めちゃシコボディなギャルと違い相手は男だ。遠慮はしない。
「ちょ、危ないだろう！」
だが俺は防御一方で押され、何とか剣で敵の攻撃を防いでいた。疲労で腕の筋肉は切れそうだ。
「ブッ殺ス！」
「ああっ、劉琦様！」
荀彧が叫び声をあげた。本陣を急襲され親衛隊も賊軍相手に取り込み中だった。

人は肩書きさえあれば武勇は無くても生きていける。それが権力者の立ち位置だ。なのに敵の矢面に立たされている。
「糞っ……殺ってやる！　バカチンがー！」
世の中は不条理で当然だが、誇りある死なんてクソっ喰らえだ。生きる為には全て捨てられる。
「あ、あそこに張角が居るぞ！」
俺の言葉に張曼成が反応して視線を向けた。その瞬間、奴の胸元に剣を突き刺してやった。
張曼成は信じられない、と言う表情を浮かべて事切れた。
「ざまあ」
爆笑する俺を周囲はポカーンとして見ていた。
今日の俺はスペシャルだ。敵将を討ち取った事で味方の士気は天を衝く勢いだ。

親衛隊が粗方、周辺の敵を掃討した頃、薄汚い身なりの集団が現れた。
武装してるし敵の増援か、と迎撃の指示を出すと数人が此方に向かって来る。
（降伏だろうか？）
「義勇兵の代表が御挨拶に参っております」
「あ、そう」
義勇兵だった。
「劉琦様こんにちは。私、劉備玄徳と言います。皆を助けたくてやって来ました」
桃色の髪をしたおっぱいは劉備玄徳と名乗り、中山靖王劉勝（ちゅうざんせいおうりゅうしょう）の子孫だと名乗っていた。その割には汚い身なりだ。連れてる供は義妹の張飛と友人の趙雲だと言う。
「ほーん、で？」
水色のおっぱい、趙雲は俺の対応が気に入らなかったのか、目付きが険しい。
無礼と言うなら無位無冠のこいつらこそ態度が悪い。おっぱいに

免じて許してやるがな。
　趙雲は俺の視線を受けて一礼をすると口を開いた。
「我々は黄巾賊の暴虐を憂い、義によって立ちました。劉琦様の兵の端にでもお加え頂ければ、我が槍の戦働きで御期待に答えて見せましょう」
　たゆんたゆんと喋る度に揺れるおっぱいを眺めながら、気の強そうな趙雲が閨ではどんな声で鳴いてくれるのか想像する。三國志の路線で行くなら、趙雲は俺に忠を尽くす事は無いだろう。劉備も俺の元を離れて独立をしようとするだろう。中々、良い体だが見過ごすしかない。
「代償に兵糧、武具の提供か？」
　俺の言葉に劉備は勢い良く頭を下げる。
「お願いします！」
　今なら弱小勢力だから潰すのは簡単だが、それではおっぱいが無駄に失われてしまう。
　この討伐期間中、恩を売ってやれば、こいつらは義理堅く忘れないだろう。群雄割拠の乱世に成った時こそ利用価値がある。
「文若、劉備達に必要な物を分けてやれ」
　劉備と趙雲を睨むように観察していた荀彧に声をかける。俺に対する忠誠心は高いから、劉備の阿呆な挨拶に憤っているのだろう。
「畏まりました」
　軍師達には劉備達を取り込む策を考えさせよう。

　黄巾賊は、幾つかの集団軍を作り各地で暴れて居たが、豫州刺史の王允（おういん）が領内から賊軍を一掃したり、皇甫嵩（こうほすう）が朱儁（しゅしゅん）と合流して３万程の首（スコア）をあげたり、官軍の反攻で各地で敗退。冀州に集まりつつあった。数は２０万ぐらいか。うちの軍師連中の言った通りだ。
「朱儁（しゅしゅん）殿が右車騎将軍に任ぜられたそうです。それと中央では袁隗（えんかい）様に代わって廷尉の崔烈（さいれつ）様が司徒に任じられたそうです」
　宦官と仲良くしてると中央から離れていても人事の噂が流れて来た。

「出世に興味はないが、うちも負けられないな」
俺はおっぱいを愛でながら兵を北へ進ませる。黄巾賊に協力する村は見せしめとして皆殺しにして燃やした。中国の歴史で虐殺なんか何度もやっている。屠城、屠殺と言う言葉が存在する時点でそう言う事だ。
人的資源の有効活用と言う観点から言えば、奴隷として荒れ地の開墾や鉱山で働かせたり、女は更に奴隷を生む製造機として使えたが、仕方無い。食糧や金目の物だけ戦利品として確保させた。汚い金だし、宦官の賄賂にでも使わせて貰うとしよう。
「劉琦様、こんな酷い事は止めて下さい！　これが官軍のやり方何ですか」
劉備は殺戮を止めさせようと俺の元にやって来た。無礼を咎めようとする荀彧を制止して俺は告げた。
「劉備よ、お前が皆を助けたい気持ちは分かる。俺だって出来れば助けたい。しかし賊は許されないのだ。見逃せば俺も罪人だ。協力する者も賊だ。この光景を忘れるな。賊の末路だ。そしてこの者達の死は無駄では無い。よほどの阿呆かお人好しでも無ければ、これで賊を匿う者は減るだろう」
劉備は理解をしても納得出来ない様だった。よほどの阿呆でお人好しがこいつか。
「劉備、念のために言っておくが、手心加えてわざと逃がしたりするなよ」
話を終えた俺は手を振った。帰れと言う意味だ。
宗教とマルチとアカは人を洗脳する。人を堕落させる蛇ならまだ可愛いが、地獄に呼び込む悪魔の手先だ。
善悪を見分けられる視野が無いと、こうやって頬を叩かれる事に成る。
死ねば皆仏と言うけど、死者に鞭を打つ国だ。例え灰に成っても賊は許されない。
戦で勝つには相手より倍の兵力を用意する事だと紅茶提督は言っていた。中国は人口だけは多い。領民を徴兵して使い潰せるから兵

を動員する事は可能だ。袁紹の率いる豫州野戦軍は第2野戦軍、皇甫嵩（こうほすう）の率いる冀州野戦軍は第1野戦軍と改編され、決戦に挑んだ。中原大戦と言った様相を呈している。

火攻めで皆殺しをしたら楽そうだが、燃焼させる材料を集めるのも苦労する。民の支持を失う訳にもいかないし、結局、軍勢をぶつける。ただそれだけだった。

「趙雲、貴様の武、確と見せて貰うぞ」

「お任せを」

義勇軍はおおよそ1個営（大隊）に相当する。数個の連（中隊）に分かれて攻撃を開始した。お手並み拝見と行こう。

趙雲と張飛が楔を形成し、敵を吹き飛ばす。その後、関羽に率いられた荊州兵の営が、逃げ出す敵に襲いかかる。戦意が崩れた後の敵は脆い。

「殺さナイデ！　殺さナイで！」

武器を捨て懇願する声も関係無い。剣で首を飛ばされるのはまだ良い方で、戟で叩き伏せられた者は倒れ伏した後に踏み殺される。

「ごメンナさい！　ゴメンなさい！」

戦場で敵の命は無価値だ。弱者が強者に、ただ蹂躙されるだけだ。逃げる敵は味方に合流しようとする。目指す先に敵の首魁が居るのだろう。

俺個人としては、張角の首を持って来て謝罪をするなら、ある程度は許してやっても良いと思うが、皆殺しにするまでこの戦は終わらない。漢の皇帝が治める天下を乱す者は許されないのだ。

堅壁清野は守る側の行う焦土作戦だが、俺達は賊徒を殲滅する。村や街も残さない。

「義勇軍に伝令、倒した敵の物は俺の権限で全て与える。刈り取り自由だ」

給料の出るうちの兵と違い、義勇兵は文字通りボランティアだ。他者の援助に頼るしかない。だから戦場で手に入れる物が義勇兵の収入源だった。

俺が義勇兵に許可したのは戦場の清掃をさせる為だ。義勇兵は

しょせん、正規軍の兵士に成れなかった者だ。底辺は底辺らしく、分相応にゴミ拾いをして貰おう。それで戦場はある程度片付き、やつらは懐が膨らむ。Ｗｉｎ―Ｗｉｎで誰も損はしない。

義勇兵によって身ぐるみ剥がされた死体が転がる。その後、野晒しにすれば獣の餌に成るが、病気が怖いので纏めて燃やしておく。二酸化炭素の排出を考えたら、埋める方が良いのかも知れない。だが、口蹄疫で豚を埋めた朝鮮は汚水を出していたから、やっぱり焼く方が良いと思う。

はみ出たはらわたでホルモンを思い出す。ああ、焼き肉食いたいけど食の安全は不安だ。

義勇兵は勇戦している。功名心のある趙雲は得難い存在だ。現時点で、劉備を支える気があるのかは知らないが、個人の武名を優先する者は仕事に対する姿勢も意欲的だ。実に頼りに成る。帰って来たらおっぱい誉めてやろう。

「脆いな」

敵は退却に偽装した動きではない。敵の士気は低く崩壊していた。深追いは危険な気もするが、戦功をあげる機会と味方は奮い起っている。

「死ね、漢に逆らう愚民など要らん！」

それに対して何か言い返していたが知らん。

「フザケンナヨ！　民草ダッテ生キテルンダヨ！」

官軍は気持ち良く敵を殺して進んだ。その先頭は袁紹軍に成っていた。うちは予備隊として追従していた。

俺は組合から提供された地図を確認した。稜線陣地には持ってこいの場所があった。

「この先、隘路に成っているな。斥候を出しておけ。奇襲されたらかなわんからな」

そう言った直ぐ後に事態は急変した。

俺は目の前の光景が信じられなかった。万の兵力を誇る官軍が、たった一人の敵将に蹴散らされている。パァン！　と豪快に弾けているのは人だ。

「おいおいおいおい、何だよあれは」
血飛沫を巻き上げて袁紹の軍勢を蹂躙している。一人だけ無双ゲームをしてるみたいだ。
敵将の後方から続く賊軍は大した事は無いだろうが、その将が桁違い過ぎた。一頭の羊に率いられた百頭の狼の群れは、一頭の狼に率いられた百頭の羊の群れに敗れると言うアレだ。
他人の不幸は俺の幸せに繋がる事だが、袁紹軍があまり殺られ過ぎたりすると、予備隊の俺達が投入されるから困り物だった。
「あれは呂布です！」
「呂布？」
そう言えば組合からの報告で、涼州黄巾軍の主戦力として暴れまわり、董卓軍を撃破した怪物だと言う話があったと思い出す。
とりあえず弓兵に準備させた。例によって毒矢だ。
袁紹軍が壊走して来るなら、援護射撃に偽装して呂布ごと制圧する。毒を使っても証人も死ぬから口封じは問題無い。そうと決まったら腹がへってきた。俺は弁当を開ける事にした。
「呂布が向きを変えました！」
何、弁当の香りにでも釣られたか？
呂布は袁紹の本陣を突く距離まで迫っていたが、進路を変えて此方にやって来る。
「呂布の軍師、陳宮は中々の知恵者と聞きます。本陣の守りが堅いと見て、兵力で少ない此方を突破して行く積もりでしょうか」
荀彧の言葉に俺は答える。
「一撃離脱か」
なんにせよ射撃のタイミングは現場に任せている。天下無双の呂布だろうと毒矢を食らえばくたばるだろう。
荊州以外での戦は義理と遊びだ。だからこそ貴重な兵や金を無駄に消費は出来ない。
それに有力な将は確保するだけじゃなく、始末もしておきたい。金も愛情も有限だ。慈悲の心を注いでも、将来に敵に成るなら殺せる時に殺しておくべきである。特に呂布は強すぎる。袁紹軍の前衛が一

瞬で撃破されてしまったその光景を考えれば当然だ。
飼い慣らせないなら殺す。
呂布は鎧袖一触と蹴散らしながら俺の近くに迫る。緊張感が周囲を覆う。
袁紹軍の弱卒は怯えて右往左往して前を塞いでいる。邪魔だ。
いざとなれば袁紹軍の兵ごと撃ち殺せと命じている。俺の安全はそこらの凡夫より重要だ。人の命は貴賤で別れる証明だな。
荀彧がきゅっと手を握り締めているのが視界に入った。
緊張感を解してやろうと頭を撫でてやると、強い意思を宿した瞳で俺を見返して来た。何ですか。そこはナデポじゃないのか？
「劉琦様、呂布に投降を勧告してみてはどうでしょうか」
思い切って口にした荀彧の言葉に俺は考える。
何言ってんの。だが、まぁ、駄目元でやってみるか。
「呂布よ、俺は劉琦だ。お前ほどの武人が何故、賊徒に加わるのだ。お前も、お前の家族も仲間も逆賊として討伐される。俺は惜しい。お前ほどの武人を賊として討たねばならんのが」
俺は敵意は無いと両手を広げて前に出た。って言っても弓兵は待機させてるがな。
「俺に降れ。悪い様にはしない。お前も、お前の家族も仲間も身の安全を保証しよう。腹一杯だって食わせてやるぞ」
呂布が馬を止めた。おっ？　俺の方に馬を進め近付くと下馬した。
首取られないかとちょっぴりドキドキした。そして呂布は口を開く。
「本当？」
呂布は深紅の瞳で俺を見詰める。俺は呂布にだけ聞こえる様に囁いた。
「ああ、孫権の一族もうちで保護してる」
ぴくりとアホ気が揺れ動いた。賊を囲っている。それだけで大罪だが、呂布には蜘蛛の糸か溺れる前に差し出された藁だろうな。
「今なら三食昼寝とおやつもつけてやるぞ」
勿論、場を和ませる冗談だ。だけど即答された。

「劉琦様のお世話に成る」
マジでか！
俺は呂布をぶっ殺す積もりだったが、すんなり投降しやがった。こいつ裏切らないだろうな？
とりあえず、袁紹には適当に誤魔化して荊州に送る事とした。劉備は「劉琦様はやっぱりいい人ですね！」なんてぬかしやがった。口封じが面倒臭い。纏めて前線で死んでくれないかな。
そして帰りを待てずに、ついムラっとして呂布を抱いた。今は反省してる。
何故なら俺は呂布の食いっぷりを侮っていた。食費は普通の成人男性１０人前を超えており、その体力は底無しだった。
「恋は……どうすれば良い……？」なんて初（うぶ）な対応にハッスルした。
呂布は破瓜（はか）の痛みを乗り越えた後に、俺との行為に馴染んで目覚めたのか「もっと……もっと……欲しい……」と俺の腰に脚を絡めて貪欲に求められた。房中（ぼうちゅう）術を学んでる訳でも無いだろうが、呂布は閨でも天下無双だった。
よく考えると寝首を掻かれる危険性もあったのに、俺って馬鹿だ。
ナニを終えた後、呂布が俺の腕に抱き付いて来た。
視線を向けると「……迷惑？」なんて訊いて来た。だから一言、添えておいた。
「いや。好ましく愛しいぞ。ずっと俺の側に居てくれ」
護衛として。
「嬉しい」
何だか、恋しい人に寄り添う様に密着して来やがる。

２―２
組合からの情報によると黄巾賊の首魁は女だと早くから分かっていた。
「張三姉妹か」
悪くないおっぱいらしい。最近、戦場に出る事が多く、外泊用に枕を新調しようか考えていた。

（俺のおっぱいに加えるか）
本心を偽れば絆を作れる。俺は楽しみにしていた。今大事なのは新しい枕だと。
しかし総攻撃を前に曹操が抜け駆けをした。袁紹が本陣でぶちギレていた。
「俺達も行くぞ」
混乱する敵の中に荊州兵を前進させた。義勇兵を消耗させるべく前衛の尖兵を命じたが、黄巾の組織的抵抗力は崩壊していた。これでは義勇兵でも楽勝だった。
智を武器にする者は他者を見下すほど己に自信を持つべきだが、うちの軍師は謙虚だ。
「逃げる敵を追いましょう。死に物狂いで抵抗する死兵は賊軍に居ないでしょう。屑はしょせん屑で、兵士には成れません」
奥ゆかしい荀彧の言葉に頭を撫でてやる。劉備の視線を感じたので俺はついでに話しかけた。
「劉備よ、この戦が終わったらお前達はどうする」
「そうですね。どうしましょうか？」
質問してるのは俺だが劉備はあっけらかんとしてる。これは何も考えていないな。
だったら提案をしてみる。
「お前達さえ良ければ荊州に来ないか」
きょとんとした表情を浮かべて劉備は此方を見る。荀彧は黙ってやり取りを聞いていた。
「荊州ですか。でもどうして私達を誘って下さるのですか」
お前らを野放しにするより飼い殺しの方がましだからだよ。勿論、そんな事は口に出さない。
「共に民の暮らしを守る同志と見込んだからだ」
「劉琦様！」
何か勝手に感動してる。俺は手を差し出し、劉備はその手を握った。
「これから宜しくな」

「はい、劉琦様！」
劉備を近くに置く事で、いつでも殺せる様に成った。孫権も呂布も同じだ。俺が飽きるか、排除するその日までは可愛がってやろう。
その間に戦闘は終息を迎えつつあった。
俺の目の前で敵の本陣は燃えていた。猿轡を噛まされた三姉妹が転がされている。
「おお、曹操殿、お手柄ですぞ」
宦官の目付役が曹操を褒め称えた。
「有難う御座います。ですがまだ終わってはおりません」
そう言うと曹操は、死神の持つ様な鎌を振り上げて斬撃を放ち、三姉妹の首をポポーン、と切り飛ばした。
「漢に反逆し民を苦しめる悪逆な黄巾賊の首魁張角はここに討ち取った。漢の領土を不法占拠した賊軍は敗れ、我々は勝った！」
これはせめてもの情けだろうか？　捕まれば拷問が待っている。一思いに殺されたならましな方だろうな。
即座にそんな考えを切り捨てる。向こうから袁紹が部下を伴ってやって来るのが見えたからだ。
「華琳さん、何を勝手な事をしてるのかしら。賊の首魁は都に連行する様に命じられていたでしょう」
「あらご免なさい。こいつらの行いに苛ついて居たから」
本当かよ。
袁紹は曹操に出し抜かれた事に立腹していた。腹が煮えくり返る思いだったのか、顔面を真っ赤に染めていた。
「貴女、私を馬鹿にして……」
「ああ、本初殿。曹孟徳殿は本初殿の麾下、適切に駒を動かす見事な采配でしたな！」
俺は面倒臭く成ったので話に割り込んだ。
「なっ、そうだよな？」
周りの諸侯に振ると、空気を読んで挙って袁紹の器の大きさを褒め称えた。
「流石、本初様は優雅で心が広いですね！」

「あ、あら、そうかしら？」
阿呆に指揮権や権力を持たせると面倒だ。そして阿呆が切れると何をするか分からない。
視線を感じて顔を向けると曹操が生ぬるい目で俺を見ていた。視線が合うと目礼して来たので、軽く片手上げた。

荊州に帰った俺は親父に報告をした後、新野城に戻った。豪族や名士から戦勝祝いの挨拶が途切れる事無くやって来るので仕事も捗らない。それでも宦官や何進大将軍、皇后等の有力者に賄賂を贈る事は忘れない。
巷では曹操撃冀州殺黄巾張角斬首十萬（ゆっくりできないげすをせいさいしたよ）とか伝えられてるが、盛りすぎだ。あいつの兵は２０００にも満たない数だったのに戦果だけ倍増されている。一人頭５０人を殺したか、同数の敵としても５０回は戦った事に成る。
空気の読める俺はそんな事実を広めはしなかった。
「張角を討った曹操は一番手柄だ。今後、あいつは出世するだろうから、祝いに酒や楽器を贈ってやれ」
「楽器ですか？」
俺の指示に手配を行っていた文官は顔に疑問符を浮かべていた。
「あいつ、中々の文化人らしいからな」
コネは大切だが、曹操は宦官や諸侯の受けも宜しくない。俺は三國志の英雄と言う事で、そこまで宦官の孫だからと馬鹿にはしていなかった。攻められない様に一応、付き合いだけはしておく積もりだ。
課業終了後、退庁する官吏に混ざって俺も城下に出た。庶民っぽい服装をしてお忍びで気分転換だ。
冀州戦役で首魁を討たれ、黄巾の乱が鎮圧されると避難民は収まったが、今度は移民や旅人が増えて来た。
金を落としてくれて荊州の経済が回るのは良い事だが、入国者数が多いと見落としも出てしまう。そう言う時に限ってトラブルは発生する。
「お兄さん、一緒に飲まない？」

「飲むだけか」
俺の言葉に腕を絡める事で答えたおっぱいのでかい女。飲み屋の店員だろうか、誘いに乗る事にした。
「こんな所に店があるのか？」
繁華街から離れた路地に入ると男達に囲まれた。笑い声を漏らす男達は、チビ、のっぽ、デブと言った特徴的な連中だ。
「兄ちゃんスケベ心を出して残念だったな。怪我したくなかったら持ってる物全部渡せ」
何と言うかテンプレ過ぎる台詞に呆れた。俺の街でこんなごろつきまだ居たとは驚きだ。
後で警備隊の責任者を叱責してやるが、その前にこいつらに仕置きだな。
「うるせぇ、エビフライぶつけんぞ！　いや、俺はエビフライが食べたい。むしろ食わせてくれ」
「何を言ってやがる。舐めてるのか？」
ノッポは短剣を片手に近付いてくる。
「うるせえ、シナチク野郎！　てめえこそ誰に口効いてるのか分かってんのか？」
美女がエロい下着を着て迫ってくる訳でも無く、何か凄んでやがるから顔面ぶん殴ってやった。相手の骨が砕けた感触があった。カルシウム取ってないのだろう。
「兄貴ぃ！」
仲間が剣を向けて来た。だが俺も護身術は習っている。
「無駄だボケ」
せっかくのお忍びを邪魔されて苛立ちはＭＡＸに近い。
「死ね！　この街の城主の顔も知らん流れ者の屑め」
路地には、俺を嵌めた女を含めて四人の死体が転がった。身の程を知らん馬鹿共だ。
殺しをした後は興奮が覚めていないらしく、帰ったら俺のおっぱい達に心配されたが、何人も相手にハッスルした。そして俺は生きている事を強く実感する。これからも命果てるまで人生を楽しむ努力を

しよう。
その為にも荊州を守る事だ。民あっての国では無い。国あってこそ民の生活が守られる。
だからこそ荊州の為に何が出来るか考える。俺は、おっぱいを楽しむ自由を妨げる者達と戦う覚悟がある。俺以外のあらゆる代償を支払い、あらゆる困難に耐え、全ての敵を滅ぼすのだ。

2―3

霊帝崩御。その知らせが組合と宦官から流れてきた。
皇帝の死後、朝廷では政争が激しくなり、弁だ協だと何か揉めていた。
それで何進大将軍が殺され、何進大将軍に可愛がられていた袁紹がぶちギレて宮中に兵を差し向けて宦官を殺戮したと言う。
袁紹やるじゃねえか。俺は気に入った。だから袁紹の全面的支持を表明した。
「趙忠様より、御恩は忘れません。これから宜しくお願いしますね、との御言葉です」
趙忠は十従侍のＮｏ２であり皇帝の信認も厚い女だ。
「何それ、荊州で面倒見ろってのか」
利用価値がまだある宦官はうちが手を回して組合の伝で保護したけど、えらい事に成った。
忠義や愛国心なんて物は溝にでも捨てられたのか、何進大将軍が死んだだけで国は乱れた。俺、ワクワクするぞ。
事態は予想もつかない程の混沌とした状況で、西園八校尉でも格下であった曹操が、保護した陳留王の協を新な皇帝として擁立し、相国として実権を握った。
「妹より劣る姉はいらないわ」だとよ。
虎賁中郎将で中軍校尉の袁紹はさらにキレた。高々、議郎の曹操に手柄を掠め取られたのだから、仕方無いわな。
「醜いな。権力争いなんて」
そう言う俺の前に、『ちょっと曹操、ムカつくんで反曹操連合を作っ

てぶちのめそう』と言う主旨が書かれた檄文が袁紹から届けられていた。
独裁専横と腐敗堕落は宦官の特権であったが、曹操はそこまで腐っていない。完全な言いがかりだ。だけど諸侯に根回しせずに相国に成ったのは、曹操にしては失敗だったな。
いかに曹操と言っても連合軍相手に兵力差が開く。おれらが味方に付いた勢力が勝つだろうが、どちらにしようかな。曹操か袁紹か。
これは漢があらゆる問題を一気に解決出来る、溜まった汚物を一気に浄化されるチャンスだ。上が無能だからこう言う政争が起きる。
俺はワンマン社長ではないから家臣の意見は参考に聞く。親父に意見や報告をする前に、家臣を集めた。その中には保護している孫家の面々も居た。
俺は未来知識による発想はともかくとして、文官としても武官としても並みだからな。こいつらの助けが無いと困る。だから大切に愛でてやる。
「本来、漢を支えるべき地位の者が互いに争いを起こそうとしています。両者と親交のある我らとしては、どちらの味方に付いても角がたつ。しかし、かの者達にこの国の未来を委ねるには不安があります。事態を静観し、両者を争いで疲弊させ残った方を討てば如何でしょうか」
「いや、袁紹は傲慢で阿呆だがお人好しでも御しやすい。それよりも曹操が残れば脅威と成るでしょう。才あるあやつが権勢を高めれば、荊州の優位性も失われてしまう。ここは袁紹に協力すべきかと」
意見は色々と出たが、どれも俺の好みではない。俺としては損益を考えて、得れる物が少ない外征をする気がさらさら無かった。民は主を生かす為に犠牲と成るのは当然だが、出さなくて良い犠牲なら抑えたい。うちの被害は少なくして最大限の利益を求めよう。
「大義と成すべき事。それは第一に荊州の保全だ。それに連中も蝗害が広がれば戦の騒ぎでは無いな」
唐突な俺の言葉に家臣達は怪訝な表情を浮かべた。
「袁紹と曹操に文を送ろう。戦を止めるぞ」

戦を止めるべく、両者に会談と友好善隣条約締結を推奨した。
一方で俺は、華佗に研究させていたバッタを放つ様に命じた。このバッタは防疫の過程で発見された。敵国を食料危機に陥れ、ある期間で死滅するよう改良されている。
敵か味方かはまだ判断が付きかねている。だが何れは敵に成る。それなら少しでも打撃を与えておきたい。一人殺すのも百万人殺すのも同じだ。蝗害を受ければ、曹操と袁紹の勢力圏は打撃を受けるだろう。
それに、また米相場で一儲け出来そうだ。

日も高い内からおっぱいと戯れる程、俺も阿呆ではない。それに精力も尽きる。
献策や報告を受け、その採否や指示を行っていた。
「豫州、司隷、⊠州では蝗害の被害が早速、出始めているそうで、一月もせずに冀州と青州にも広がるでしょう。それと、曹操の支配地では徴発が始まりました」
黙って見殺しに出来るのが俺達だ。家臣からは結果に対して称賛の声も上がった。
「文字通り、倉廩満ちて則ち礼節を知り、衣食足りて則ち栄辱を知るですな。お見事な采配です」
三度三度の食事が出来る事は努力の結果だ。それが奪われるのは耐え難い事だ。
俺は荊州に住まう者には働いた分だけ幸せに成れる事を約束出来る。親父も無茶な税もかけていないし、そこは上手く行っている。
蝗害の被害で周辺国が荒れようと他所は他所、うちはうちなのである。
曹操の軍勢が掌握している範囲は狭い。食料危機に対して司隷では皇帝の名の下で、徴発と言うか略奪が始まった。行っていたのは曹仁、曹洪、曹純と言った従妹達であった。
特に曹操の金庫番である曹洪は、蝗害が自分達の勢力圏で広がる事に歯止めも出来ず、上がる相場と支出に焦っていた。

僅か数日で跳ね上がった相場でうちは大いに稼がせて貰っているが、あちらは火の車って事だ。
「お姉様は相国として皇帝陛下を擁立なさっています。その政を支えるのは漢の民として当然の義務ですわ」だとよ。
行動力のある曹仁は「ぶっ殺すっす！」と有言実行で、供出を渋る商家の主をくびり殺し、店を焼き討ちしたとも聞く。
その非道は曹家の一門が率先して行っている為に、やがてそれは支配地全域で行われる事に成ってしまった。
政も戦いだから、その行いは悪くないと俺は思う。だけど世間一般はそうは思わない。
略奪をしたと言う醜聞だけが広がる。
「それは良かった。協力者の謝礼も上乗せしてやれ」
袁紹、曹操は共に一族や豪族の支持があって成り立っている。しかし主流から外れた不満分子は必ず居る。俺はそう言った連中に組合を通して指示と支援を与えて、シンパを作り上げた。
信賞必罰をモットーにする俺は、協力者にも報いる。人は、金の詰まった袋で頬を殴ってやれば、歯を吹き飛ばしても笑顔を浮かべる。だから動かすのは簡単だ。煽動し、このまま荊州以外を滅茶苦茶にする覚悟はある。
黄巾賊や孫家残党も市中に潜み、武装勢力は軽く１０万を超えていた。しかし軍師連中曰く、まだ時期では無いと言う事で武装闘争は指示をしていない。
「孫子も戦わずに勝つのが良いと言ってます」
昔、読んだリデル・ハートっておっさんの書いた本に書いてあった。Ｉｎｄｉｒｅｃｔ　ａｐｐｒｏａｃｈとか言うやり方だ。
「そうか。全て任せる」
俺は人材を活用する。将来の君主として親父や周りから人を使う事を教えられて来た結果だ。人は環境に左右される。何でも与えられた恵まれた環境でこそ才能は花開く。逆に底辺の生活を送っていると貧困の連鎖から抜け出せなくなる。だから貧乏人の分も俺は人生を楽しむ。

彼女達が考えた策は、第一段階として、蝗害である程度、両勢力に被害を与えたら物流を止めて相場を上げ、暴動を起こさせる。次に戒厳令を布告させ、決起部隊に首脳陣を拘束又は殺害で排除させる。最後は治安維持の名目でうちの兵隊を送り込んで、不穏分子を一掃し完了する、と言う乗っ取りだった。

俺は荊州以外の土地はいらない。それに三日天下では意味無い。だが、下らない派閥抗争と権力闘争の戦いに付き合うしかない。

（小規模な局地戦に限定出来れば良いが……）

あまり大規模な戦闘に成ると色々と面倒だ。戦争するに価する敵では無い。

現状に満足し見栄も欲も限れば、全国制覇は必要と成らない。そう言う物だ。

俺の戦争なら俺が始めるしな。連中は死ぬ場所は選べない。殺す場所も死に方も決めるのは俺だ。もし荊州を敵として選ぶなら、生まれて来た事を後悔する様な死に方をくれてやる。

曹操は三公を輩出した袁家を軽んじていないと、袁紹を前将軍に任命し懐柔しようとしたが、袁紹は断った。曹操の権威を認めてないからだ。

「冀州九郡の守相である私に対して、あのチンチクリンは何を思い違いしてるのかしら？　身の程を弁えるべきですわ」

戦にも華麗を求める袁紹にとって謀は相入れない考えであった。袁紹の家臣はまた違った考えであろうが、主君が計を用いらない以上は、表向き動き様も無かった。

最初に暴発したのは袁紹ではなく曹操側だった。蝗害による被害はとどまる事を知らず、今や荊州の周辺全域に広がった。一息着いたら、その後は疫病が流行り死者を増やした。うち以外はワクチンも無いし、感染経路が分からないから余所者を殺すだけだった。馬鹿は勝手に自滅しろ。

そう思っていたら、夏侯惇が弘農郡より南陽郡に攻め込んで来た。魯陽の街を襲い略奪をしてると言う。びっくり何て物ではない。う

ちに助勢を頼みながら攻めてくるとは、曹操の考えが分からん。
「急激な情勢悪化で食糧に困窮し、士気や軍規が著しく低下していた様です」
　うちは他国に援助する程、食い物も余っている。金さえ出せば売ってやった。
「だから暴走したって言うのか……やってられん」
　弱小勢力ならともかくとして、脅して味方に付くほどうちもぬるくはない。
（ガチでうちとやり合う積もりか？）
　攻められたらやり返すがうちの流儀だ。
「うちを敵に回して何故そこまでするか、だな」
　俺は親父の名代として博望（はくぼう）に兵を集結させていた。
「魯陽の状況はどうなっている？」
「物見の兵を放ったのですが、まだ戻って来ません」
　関羽の報告によると、斥候と連絡が途絶えたと言う事だった。
「ふーん。ちょっと様子を見に行くか」
　俺の言葉に関羽は慌てる。
「劉琦様自らお出に成るまでもありません。私にお任せ下さい」
「良いって事よ」
　月明かりの下で街に向かった。敵の気配は無い。静かすぎた。
　街の入り口に近付くと、老若男女を問わず切り取られた首が並んでいた。
「野蛮人共め。この借りは必ず返してやる」
　護衛として連いて来た関羽が激昂している。落ち着きが無いな。しょせんこの程度で死ぬ連中なのに。
「落ち着け」
　そう言いながらもワクワクする。死の香りが嗅ぎ取れたからだ。
　折角ここまで来たんだ。手ぶらで帰る気も無い。俺は城内に兵を進めた。
「なっ……！」
　関羽は口許を押さえて絶句した。

俺は期待通りで嬉しく成った。
（やってくれたな）
街は鮮血で彩られていた。路上には民も兵も殺され尽くしていた。
何処の誰が殺されても勝手だが、荊州を脅かした事は開戦理由に十分だ。
民はどれだけ君主に貢献出来るかが求められる。これで曹操を潰す大義名分を手に入れた。
「安い挑発だが、やられたらやり返すのが礼儀だ。子の不始末は親に取って貰わんといかんな」
前太尉で曹操の父である曹嵩（そうすう）捕縛を命じた。
俺の言葉に関羽が顔を向ける。
「それと民を丁重に埋葬してやれ」
筋は通っているから関羽は頷いた。
こうなると司隷に対し派兵するしかない。洛陽解放、曹操討伐に流れは傾く。冀（き）州の⊠（ぎょう）を拠点とする袁紹に討伐参加の返事を送った。
「賊臣曹操は漢室を蔑ろにしている。朝臣として看過出来る事ではない。世の義士は本初殿を盟主として集い、曹操に天誅を加えるべく立ち上がるべきと考える。討つべきは今だ！」
先ずは曹操の策源地である⊠（えん）州陳留郡と司隷を遮断すべく潁川（えいせん）郡に兵を進出させた。南陽郡の隣なので移動は直ぐだ。それと同時に陳留のシンパに武装蜂起を命じた。やるなら徹底的にやってやる。
例え生き残っても、男には一切無縁、行き遅れのババアで終わる曹操が哀れだ。だからその惨めな人生を終わらせてやる。

3．劉琦様でかけましょう

3―1

俺は人の才を羨み妬む者や権力に媚びる者を優遇する。何故ならばこいつら俗物は向上心を持つからだ。

豚もおだてれば木に昇る。凡愚も信頼すれば答えようと努力する。ちょろいのだ。

「劉琦様の参陣、心強く思いますわ。力を合わせて洛陽の陛下や民をお救いしましょう！」

うちが味方に付いた事が嬉しいのか、高笑いする袁紹に俺は苦笑しながら答えた。

「勿論です。逆臣曹操、彼女は才こそありますが、才能や努力だけでは血筋や家柄を覆す事は出来ません。愚かな賊軍に対して、本来の従うべき正道を示すべく本初殿は華麗な戦を見せて下さい。その分、兵糧の手配はうちにお任せを」

袁紹は目を伏せて笑みを浮かべた。

「貴方は私こそ、華琳さんに勝つに相応しいとおっしゃるのですか？そこまで評価して下さるのは本気なのかしら」

「端的に言えばそう言う事です」

胸元を手で押さえた袁紹の表情は喜びを浮かべていた。

「でしたら、華琳さんに勝つと言う私の目的の為に劉琦様を利用させていただきますわ」

「喜んで」

俺が頷き答えると、袁紹は満足したのか頬を紅潮させて笑い声をあげた。

袁紹軍は黄河を渡り⊠州東郡を通過すると陳留郡に雪崩れ込んだ。うちの荊州兵も潁川郡より東進、民衆に食い物を配りながら進むと歓呼の声で迎えられた。買い占めた米や食い物は腐らせるほどあるからな。

今回は曹操の信頼厚い張邈、満寵と言った重臣の裏切りも効果的だった。民から略奪を行う行為を黙認した曹操に失望したと言う事

だった。我ながら上手く行きすぎて怖いぐらいだ。
中には抵抗する者も居たが兵力差で押し潰されるだけだ。
朝歌の鹿腸山に捕虜は集められていた。
「だずげで」と、ガタガタ震えた捕虜の群れに俺は近付いた。普段なら面倒臭いから皆殺しにしてる。
捕虜の管理を行っていた者達が、護衛を引き連れた俺に気付いて挨拶をする。
「落ち着きの無い連中だな」
飯を食えば落ち着くのでは無いかと思った。戦災の復興に、こいつら人的資源の活用を考えていた。
「劉琦様、彫物は如何様に致しましょうか」
「刺青？」
咄嗟に思い浮かんだのはベルメールさんのみかんとゲンさんの風車だが、ネタの通じる相手ではない。
説明を聞くと、罪人に刻む刺青のデザインを訊かれていたと分かった。
その会話を聞いて、俺が偉い人間だと気付いた捕虜達が俺に向かって懇願する。
「おでがいじまず、命だけはお助けを！」
「お、おちびが居るんです。どうか、どうか命だけはあああああっ！」
今回は賊とは違うので配慮する。
簡単に命乞いする者は、固定観念に捕らわれる事なく頭の柔らかい者だと言える。だから俺は許した。
「劉琦様、宜しいのですか」
「民や家臣は主に仕え忠を尽くす。今回は仕える相手を間違えた。まぁ、こいつらは運が悪かったんだよ。それだけだな」
俺は曹操を偉大な傑物と評価している。領内では私腹を肥やす官吏や悪徳商人を排除していた。だから残った連中は、曹操の基準ではそこそこ使えて、人間性もそれなりに信用出来た者だと分かる。
「これからは曹操の下で働いた様に、漢の為に働け」
占領統治なんて面倒な事は地元民に任せるに限る。こう言う時に

組合の伝が役立つ。
話し合いってのは大切だな。無駄な血を流さなくて済む。
だけど例外はある。曹操の一族は残らず殺せと袁紹から連合軍に通達が出ていた。俺も異論は無い。残せば復讐を選択するだろうからだ。雑草を根っこごと引き抜くのと同じだ。
袁紹が動員した連合軍は諸侯の兵力を合わせて３０万。顔良、文醜、高覧と言った諸将が田豊、審配ら優秀な軍師の智謀に支えられて、洛陽を目指して華麗に進軍している。都の解放、曹操軍主力との決戦は袁紹軍が受け持ってくれているので、占領地の治安維持はうちに任せられた。
「袁紹め、劉琦様にこの様な扱いをするとは無礼な」
苦虫を噛み潰した様な表情で不満を表して、関羽は目立たぬ裏方仕事を押し付けられたと怒っていたが、俺は気にしない。むしろ嬉しい。
荊州から都に向かうのは白地図なら近い様に見えるが、実際は山があって兵を疲弊させてしまう。俺は無駄に疲れる事はしない。袁紹が華を求めるならくれてやる。
「目立つ戦いはその分だけ被害も多数出る。精々、共食いで倒れてくれる様に頑張ってもらうさ」
俺の言葉に軍師連中も頷く。
「劉琦様、李典殿が挨拶に参られました」
「おう、そうか」
李典のはち切れんばかりのおっぱいは俺の視線を集める価値がある。それはともかくとして、李典は今回の武装蜂起で陳留制圧に貢献したシンパだ。誉めてやらねばいかん。
「曼成、久し振りだな。相変わらず見事なおっぱいよ」
「あーもう、劉琦様も相変わらずやな」
ふくれっ面をする鳳統を視界の端に入れながら、俺は李典との会話を楽しむ。
苦笑する李典には二人の連れが居た。警備隊の同僚で楽進、于禁と名乗った。

曹操の重臣ではあるが、古参の家臣では無いので忠誠度は高くなかったと言える。
「劉伯安の名に於いて、お前らには陳留を任せる積もりだ。出来るな」
「ええよ。その代わり給料は弾んで貰うで」
農業改革とか富国強兵を求める訳ではない。とりあえずの急場凌ぎで民の暮らしさえ守れれば良い。その面で、こいつらはそれなりに使える。それに良い体をしてるから楽めそうだ。

屋台で買った手羽先をむしゃむしゃ食いながら俺は朝歌(ちょうか)の街に居る。ここはもう司隷だ。
「この戦、既に勝ちは見えました。この後、漢は生まれ変わるでしょう。ですが袁紹などは場繋ぎでしかありません。荊州劉氏の時代です」
「かつての朝歌が住む者を変えたようにですね」
軍師連中は史跡研修みたいに盛り上がってるが、俺にはよくわからん。
輿(こし)に乗る俺は油で汚れた手を従者が清める間、背中のおっぱいに頭を委ねる。
「いつの時代も勝てば官軍。のうのうと生き延びれば正しいんだ」
俺の言葉に周りは納得していた。真実は一つ。正義も一つ。勝者が歴史を作るのだ。
うちの財力が物を言う。いつの時代も金は力だ。
金が無い者は成功の可能性も無い。
株の初期投資金額が大きいほど利益を得られるのと同じだ。
どうせ荊州以外は元々、持って無かった領地だから、諸侯が分けあってもどうでも良い。それよりは貸しを作って組合の加盟店を出店させたりで便宜を図らせた方が良い。これで荊州に金と物と人が更に集まる事だろう。
天下を望まなければそれなりに楽しく生きていける。才を愛し凡人を切り捨てた曹操には想像出来ない世界だ。
「兄上」

「おう、劉琮(りゅうそう)」
俺の弟がやって来た。今回は勝ち戦確定だから荊州から呼び寄せた。
呂布や孫権を使えば更に楽に成るが、諸侯の目があるので荊州に残している。
「兄上と共に戦える事は我が誉です」
真面目な弟にアドバイスした。
「気楽に行けよ。戦で勝敗を決めるのは意思の軽さだからな。肩に力が入っていては良い戦働きも出来んぞ。何なら、何人か試し斬りでもするか？」
死んで良い人間は幾らでも居る。死ぬ理由、殺される理由があれば人は死ねる。悪党は特にその対象だ。うちの弟の為なら喜んで死ぬべきだ。
弟は冗談と受け止めたのか笑っていた。まあ肩の力も抜けた様だし良いか。
「劉琦様？」
考え込む俺に背中のおっぱいが声をかけて来た。
「気にするな漢升」
そう言って黄忠の太腿に手をはわせ、下着の奥に指を伸ばすが叩かれた。
「真面目にして下さい」
「お、おう」
子持ちに見えない凄艶な美貌で俺の愛人(おっぱい)に加えた黄忠は、閨では献身的で情熱的だが、昼間は真面目で詰まらん。だが子育てをしながら軍務や政務を補佐してくれる事には感謝している。
「いつもありがとうな」
俺が礼を言うと黄忠は機嫌を治して笑みを浮かべた。
鼻がむずむずしたので俺は塵紙を手にした。曹操の書いた兵法書だ。
陳留を落とした時にかなりの書簡を手に入れた。曹操の軍略や人となりを知る手がかりと成る。あまり価値の無い物は古紙として処

分した。
鼻をかみながら曹操について想いを巡らせる。
「曹操は矜持の為には戦う」それが結論だった。
馬鹿らしい。誇りで腹は膨れないし、民も国も守れない。
死に方を求める曹操に先は無い。本当に何を考えてうちに攻めて来たのかは知らないが、踏み込んで話す機会ももうないだろう。
弟の連れて来た補充兵は予備隊に加えられた。その指揮は関羽に任せている。
「戦いでは常に一方向のみに注意を配れ。お前らの隣には戦友が居るからだ。隊形を維持しろ。お前らは個人戦を行う武人ではない。集団戦を戦う兵士だ。生きたいなら喚いてでも覚えておけ。常に五対一の戦いで伍を意識しろ」
行軍の道中で関羽が訓示をして居る。とは言うが、袁紹や諸侯の軍勢が矢面に立ってくれているのでうちは損害も少ない。
ああでも、殺し、殺され、奪い、奪われる覚悟は準備していた方が無難か。

洛陽戦役は対曹操戦争時、最大の山場と言えた。曹操は重点防御的戦略方針を取っていた。これは此方にとっても敵を一度に叩く好機であり、決戦は望むところだった。
戦場には敵か味方しか居ない。そのはずだが、目の前で両軍の指揮官が口争いをしていた。
「華琳さん、大人しく降伏するなら私の側仕えにして差し上げますわよ」
高笑いする袁紹に対して曹操は鼻で笑い飛ばした。
「麗羽、貴女って相変わらずの馬鹿ね。貴女が私に降るならともかく、私が貴女に降るなんてあり得ないわ」
曹操は強気だ。威風堂々とした佇まいで王たる風格、覇気が滲み出ている。
「泣いて頭を下げる事に成りますわよ、チンチクリン」
「それは此方の台詞よ、お・ば・さ・ん」

このまま弓で曹操を射殺したら楽に終わるんじゃないかと本気で思う。だけど武人としての矜持はフェアに戦う事らしい。君主なら味方の損失を抑えるべきだが、そこは暗黙の約束らしい。

二人は戦の前段階として挨拶を終えた。

「出来れば華琳さんは捕らえて下さい」

やはり幼なじみとして情は捨てきれんのだろう。俺の世界の歴史から考えても二人は戦う天命だった。曹操を生きたまま捕らえる事は袁紹の要望だが、殺られたら殺り返す。荊州の民を殺害した復讐を遂げさせて貰う。これが俺の流儀だ。

曹操を捕らえたらエロゲーみたいに元家臣とか平民の慰み者にしてやるとか楽しそうだ。見た目は良いから宦官に献上しても良いが、なんかあいつ、相手を殺してでも脱出して再起を計りそうだな。下手に求心力ある奴は生かすと面倒だ。やっぱり殺そう。

連合軍の意思決定は総大将である袁紹の機嫌次第だが、一応、諸侯の連絡機関として中央軍事委員会が設置されていた。勿論、トップは袁紹だ。

「此度の戦は皇帝陛下を逆臣曹操から助け出す事が第一。火攻めも投石も出来ん」

韓馥（かんふく）の言葉に集まった諸侯の表情が陰る。

「先ずは曹操を逃がさぬ様に周囲を囲んでから再度、軍議を開いてはどうでしょう」

俺の言葉に賛同を得た。そりゃそうだ。洛陽の周囲を見れば、曹操は地形地物を利用して出城と言うか砦と言うか、陣地を築城していた。丸裸の城では心許ないから当然と言えば当然だ。

連合軍は洛陽解放作戦にあたって東西南北の四方より前進する。この為、４個兵団に再編成された。

「戦とは常に頭で考えて終わらせる物だ。現場の臨機応変等、頭で予測を立てられなかった者の言い訳に過ぎない。机上で終わらせてこそ将軍と呼ばれるのだ」

なんて言いながら俺は攻撃を先伸ばした。敵は糞ビッチだが烏合の衆では無い。

下手に攻めれば此方が手痛いしっぺ返しを食らうし、時間は此方の味方だ。
確かに２０万以上の将兵に与える日々の給食も馬鹿に成らないが、それ以上に洛陽の曹操軍に負担を強いる事が出来た。兵糧攻めだ。
連合軍によると悪いのは曹操で、倒せば明るい未来が待ってるらしい。世の中、大衆迎合してれば良いから、簡単で楽だ。大局の流れに逆らわないって事だ。

戦の落とし所は大将が降伏か討ち取られた時だけだ。
荀彧がこっち向いて欲しいと視線を放って来た。風でフードコートが猫耳の様に揺れている。
「どうした？」
「火攻めが駄目なら坑道を掘ってはどうでしょうか。我が君にはそれを成せるだけの力があります」
上等だ。うちの兵が損なわれないのが特に良い。だが最上では無い。
「それなら穴掘る次いでに水も流してやろう」
黄河の支流、洛河が洛陽の真横を流れている。それに水攻めは一度にやってみたかった。
「韓遂？馬騰の所から作業に兵を出させろ。あいつらの食い扶持分は働けと言っておけ」
「御意」
細部の調整と検討を指示してると曹操軍から投降者があった。名を郭嘉（かくか）と良い、曹操を支える軍師の一人であった。
「話せ」
郭嘉は姿勢を正すと語りだした。
「私は友人の風（ふう）、程昱（ていいく）と華琳様の天下を支える為に仕官致しました。出仕してから漢と言う腐りかけた大樹を打ち倒し、新たな王朝と制度を創ると言う夢を聞かされそれに賛同しました。自らの仕える君主の器に疑問など抱きはしませんでした。しかし、あの蝗害が全てを変えました。いかに民を守ると言っても限界がありました。先ずは華

琳様の支配地を確保する為にも兵を飢えさせる訳にはいきませんでした。そこで曹洪様が民の口減らしと不満分子の一掃の両立を提案されたのです。こうすれば家臣の引き締めにも成りますから、感情論抜きで名案だと思えたのです。ですが村の一つ、二つを消した所で焼け石に水でしかありません。だから現場では独断で動き始めました。違和感に気付いた時には遅く、軍全体で虐殺と略奪を平然と行う様に成っていました」

正直、蝗害でとち狂って虐殺して様がどうでも良い。

「その辺、端折って良いぞ。何で今更、投降して来たんだ？」

「何故、今更投降して来たのかですか。私は政に携わり民の暮らしを良くする事に誇りを持っていました。ですが今の華琳様の下では、悪化する事はあっても改善される可能性はありません。それこそ、この戦で奇跡でも起こして連合軍に勝ちでもしなければ無理でしょう」

「まぁそうだな」

今の戦力差で勝とうなんて無理ゲーだ。

「私はこれ以上、民を苦しめる姿を見たくありませんでした。あの方の覇道を支えると誓いました。ですが、諫言も受け止められなくなったあの方に私はもう必要とされません。風は、処刑させられたのです。華琳様に反対し軍規を乱したと言われ。もはやあの方は私が忠誠を捧げた華琳様ではありません。御自分の都合に悪い者は排除する暴君です」

酷い言われ様だ。袁紹との口喧嘩を見た時は狂った感じはしなかったが？

真名を許された主を簡単に見限るだろうか？　答えは否だ。俺の手元にある情報では、郭嘉は曹操の熱烈な信奉者だとある。それは宗教に近い。

（偽装した投降だな）

程昱が処刑されたと言う話も聞いていない。曹操軍で郭嘉の地位は高い。普通なら、その証言は重要視される。

「分かった。戦が終わるまで俺の幕下で働け。しばらくは監視付きだが我慢しろ」

「いえ、当然の配慮かと」
郭嘉を下がらせた後、荀彧を呼んだ。
「あいつに洛陽解放の策を考えさせろ。だが最後はお前が検討しろ」
「宜しいのですか。あの者の投降が偽りの可能性もありますが」
「その為の聞き取りだ」
郭嘉から曹操軍の状況の聞き取りを行わせた。此方の情報は組合とシンパからの情報で比較的、正確な情報が入っているから、答え合わせも出来る。大きな違いがあれば嘘か間違いかを確認出来る。
俺が指示をしてから答えが返ってくるまで時間はかからなかった。頭の良いやつは仕事も早い。
郭嘉からの提案は、敵前に大量の兵糧を運び込み、宴を連日行う事で物量差を見せかけて内応や投降を誘うと策だった。
秀吉の小田原攻めみたいなやり方だ。
悪くはない。これが普通に提案された策ならば。
特に手間もかからず出来る策だから、坑道を掘らせながら郭嘉の策を進める事にした。
「宴会をしろ」
俺はそう命じた。ただし飢えた敵が陣地に襲撃して来て物資を奪われる可能性もあった。だからベニダケ、ハエトリタケ、アミガサタケ、テングタケと言った毒キノコを鍋にして、運び込む兵糧も劇毒物を混ぜさせた。
「兵には食わせるなよ」と注意もしておいた。
これで敵が兵糧目当てで奇襲をして来たら、郭嘉の投降が嘘っぱちな事が確定する。ああ、でも目を引くから偶然の一致と言う可能性もあるか。その辺りも全部、家臣に丸投げしよう。

個人として俺が曹操を評価していても、それと戦で手を抜くかは別だ。勝つ為には手段を選んでは成らない。
一度負ければ破綻する軍事作戦は計画立案段階で失敗してる。危険予測、事故と災害防止で安全管理に気を付けて負けない戦で敵を疲弊させる。これは下手な英雄願望で夢見るより、分相応の生き方だ。

一方で荊州の民の復讐も忘れない。
復讐が何も生まないと言うのは大嘘だ。復讐を成し遂げる事は、家族や仲間を失った民や兵を慰撫する事に成る。復讐は心の平穏、生産性の向上、君主への忠誠心など様々なメリットを生む。敵の首を討てばそれで報奨を与え、経済が回る。全て需要と供給が成り立っている。
何でそんな事を今更、ぐだぐだ考えているのか。
沸騰しそうな頭を落ち着ける為だ。
「落ち着けるかあああああ！」
俺の腕の中で荀彧は死にかけていた。
敵の襲撃で餌として置いておいた兵糧は奪われた。ここまでは計画通りだった。
薄暮に紛れて奇襲して来た敵、その将は夏侯淵。予想外の大物だ。
味方の伏兵が敵奇襲部隊を捕捉し囲み込んだ。俺は投降勧告をしたが、敵は頑強に抵抗した。その戦いで夏侯淵は、せめて俺を討とうとしたのだ。
狙った矢は俺を貫く事なく、咄嗟に盾と成った荀彧の体にめり込んで居た。
倒れて来た荀彧を抱く形に成った俺は服も血で染まって行く。荀彧の口元に耳を寄せた。
「劉琦様……お怪我は……」
うん、明らかに致命傷だな。これどうするんだ。医師を後方の患者集合点から呼んでいる。
「俺は大丈夫だ。お前こそ、死にそうじゃないか」
俺の軽口に笑い返そうとするが、喋るのも辛そうだ。
「申し訳……ありません。もっと……お役に、立ちたかったの……ですが、もう……無理そう、です……」
諦めんの早すぎだろ。気合いが足りねえ。生きる根性の無い奴は負けるんだ。
「いや、お前は役に立ったぞ」
返事は無いが、口は浅い呼吸をしているのでまだ生きている。

「お前が元気になったら、上手い物でも食いに行こうか。桂花」
真名を呼んでやると微かに口元に笑みを浮かべた。荀彧の傷口を圧迫止血する。
「なぁ郭嘉、これもお前の計算の内か？」
俺の背後で突っ立って居る郭嘉に声をかけた。
「私は関わっておりません。私の献策に穴があり御味方を傷付けた事は間違いありませんが、私にその意図は無かった。その事は御理解頂けると……」
こいつ、俺のおっぱい候補生を死なせかけながら、自覚がないし、失敗の責任を負う素振りさえ見せない。いや、そもそも失敗を装った内通者かもしれん。
「ああ、お前は何もやってない」
医師が駆け付けて来たので荀彧の体を託し、俺は郭嘉に振り向く。
「だったらお前は用無しだ」
俺の指示で親衛隊が郭嘉を拘束する。手ぬるいのは無しだ。尋問をやらせようと決めた。
「漢にもはや民を導く力が無い。それを建て直せるのは……」
「うるせえ」
もう御託は聞き飽きた。続きを言う前にぶん殴って気絶させてやった。
人前で部下を殴る行為は名誉を傷付ける事で、評判を落とし、名士の協力を得られなく成る。しかしここは戦場だ。幾らでも理由が付けられる。個人の生き方を決めるのは権力者であり、この場では俺だ。
「痛め付けても構わんが、内通者かどうかの確証を得てからだ。それまでは慎重に調べろ」と命じておいた。
この間も俺の優秀な家臣は敵を叩いていた。黄忠は渋っていたが、毒矢もガンガン使わせた。
包囲の袋は閉じられた。兵糧の運び出しは黙認したと言うか、持って帰ってくれないと準備が無駄に成る。俺の奢りだ。遠慮せずにたっぷりと堪能して貰いたい。

洛陽の民や兵は、普段の食生活で稗(ひえ)や粟(あわ)、黍(きび)を粥(かゆ)や雑炊で食べていた。蝗害の後は野菜鍋を食べるだけでも贅沢だ。街には料理店も建ち並び中産階級以上を相手に繁盛していたらしいが、大多数の低所得な民には無縁な食生活だ。日々の食料を調達するだけでも苦労する。

そこに我が軍から奪取した兵糧が運び込まれる。民にも分け与えるかは知らないが、酷い状況に成る事だろう。皇帝や曹操の口に入る前には毒味されるだろうが、戦う兵には振る舞われるはずだ。敵の継戦能力は更に低下するだろう。

戦闘の処理が行われる中、関羽に捕らえられて夏侯淵が引き出されて来た。

水色の色素が薄い髪をした女で、こいつは戦犯夏侯惇の妹だ。

(姉の方は黒髪だが、妾腹の生まれか?)

姉の不始末は妹に尻拭いして貰う。

「劉琦、貴様もひとかどの将なら正々堂々と戦え。家臣の背に隠れる卑怯者!」

開口一番それか。謝罪は無いらしい。

「何寝言ほざいてる。お前、戦を舐めてるのか? 俺達は生存競争をしてるんだ。遊びじゃねえ」

俺の家臣は俺の持ち物だ。生殺与奪の権利は俺にある。そして身近な者を傷付けられた怒りは大きい。感情のままに今すぐぶち殺したくなる。

「士元(しげん)、こう言う奴の扱いはどうするべきだと思う?」

深呼吸して心を押さえつけ、俺は背後に控える魔女の帽子を被った子供、鳳統(ほうとう)に声をかけた。見た目はガキだが、水鏡女学院から推薦され出仕して来た軍師見習いで大人顔負けの知識で中々使える。鳳統と同期で入って来た諸葛亮の方は名前を知っていたが、こいつは掘り出し物だと目をかけてやっていた。

「えっと……あの、まずは圧倒的絶望感と恐怖を与えるべきだと思いますよ。兵隊さんにこの者を貸し与えて見てはどうでしょうか?」

戦場で闘って居た兵に与える。慰安婦か? 夏侯淵と関羽の顔が歪んでいた。面白い。

「ははははっ、士元。中々、戦を分かってるじゃないか」
「あわわ、帽子が壊れてしまいましゅ」
鳳統の頭を撫でると俺はそうする様に関羽に指示を出した。

3―2

夏侯淵は凌辱される事を覚悟しただろう。俺は下品な事はしない。紳士だからな。
それでもあいつの心は恐怖心が勝り綻びが出来た。曹操への忠誠心でどうこう出来る問題では無い。後は崩すのも簡単だ。どちらが勝者か意識させた後は斬首にした。
「華琳様、姉者、私は……」
「言わせねえよ」
最後の台詞をぶった切って首を落とさせたが、滑稽な死に顔をしていた。嫌がらせも俺の自己満足に近い。
翌朝、洛陽から見える場所に夏侯淵の首を晒した。これは曹操軍への挑発だ。
土葬の常識から外れ死者の尊厳を貶める行為だが、先に荊州で虐殺をしたのは向こうだ。此方も容赦はしない。
「貴様ら、よくも秋蘭を!」
夏侯惇の隊が首を取り戻そうと向かって来る。しかし味方陣地前縁にもたどり着けない。
火力集中点の一つに猪の隊が入った。
「放て」
黄忠の号令で味方弓兵から矢が数千本、効力射で放たれた。まともに矢の雨を浴びた先頭集団は崩れる。しかし夏侯惇は怯まない。悲鳴をあげる部下を気にせず突き進んで来る。あれは馬鹿か?
「関将軍に伝令、敵の側面を突くように伝えて下さい」
俺の膝の上で鳳統が指示を出す。猪の相手を練習として指揮を任せていた。命令は簡単明瞭に分かりやすく伝える。
ぬるま湯を武人は誇りから拒む。でも死んだら終わりだ。特に無意味な突撃は戦果拡張に繋がらない。ワーテルローのミシェル・ネイ

にだって戦略的動機はあった。
夏侯惇と言えば曹操の片腕で武官の筆頭、犬なら主の意に沿って動くべきだ。
俺がそう思っていると洛陽から伝令の騎馬が夏侯惇に向かって駆けて行く様子が見えた。撤退命令だろうか。俺は夏侯惇に視線を向けた。憤怒の表情で此方を睨んでいた。
「……もう少し挑発するか」
あの視線に俺は決めた。鳳統の頭を揺さぶった。
「何か考えろ。あいつも討ち取りたいしな」
小柄な鳳統を膝の上に乗せていても欲情はしない。
女の価値はおっぱいの大きさで決まる。ちっぱいの需要もあるだろうが、成人女性に相手されない奴だけだ。だから現状、抱き枕か愛玩用動物みたいな物だ。
「あわわ、止めて下さい！」
悲鳴をあげる鳳統と弄る俺のやり取りを、呆れた表情で周囲から見られたが構うもんか。俺より軍略に秀でた才があるなら、引き出して活用するのが上司である俺の役割だ。
「非才の身ですが全力を尽くしますって言ったのはお前だろ」
「そうですけど……」
君主は最後まで足掻いて生き残らなければ民を守れない。誇りを持つ者は君主に向いてない。自分の生き方でがんじがらめに成って身動きが取れなくなるからだ。軍師はそんな主の意思決定に助言をする役割だ。任務に基づき、その実施要領について計画する。それが策だ。
俺は意思を表した。後は鳳統が考える時だ。最後に一押ししておいた。
「お前なら出来る」
「あわわ」
ちょっと甘い言葉を囁くと顔を真っ赤に染める鳳統だが、やる時はやる。
鳳統は素早く任務分析、見積、調整等を検討した上で端的かつ的確

に今出来る策を組み立てた。
具体化した計画は、兵士達に行わせる罵声と言う単純な方法で、あの猪の意識を此方に向けさせたのだ。簡単明瞭な策は効果的だった。
「お、部下を振り切って向かって来るな」
憎しみは良い方向に向かえば未来を切り開く活力と成る。あの猪の場合は視野狭窄に成っているが。
仕上げだ。指揮官が指揮・統制を放棄した瞬間、猪の隊は烏合の衆と化した。関羽隊は相互支援を適切にして機を見ては蹂躙し貪り食って行く。草刈りしてるみたいだ。
夏侯惇は矢を切り落とすか巧みに避けていた。部下の方はそこまで化け物染みては居なかった。
矢を受けて倒れた馬は起き上がろうとしていた。しかし、その上を他の馬蹄が踏み潰して通り過ぎて行く。残るは肉塊だけ。将を射るには馬からと言うが、その通りだった。
「とりあえず、うちの連中に比べてあいつら修行足りねえな」
関羽の隊は夏侯淵の迎撃に参加した部隊だ。
一回戦闘に参加した部隊は休養で休みを与えるのがうちの決まりであるが、今回は妹に続いて姉との連戦に成ってしまった。その分、時間外手当ては割り増しする積もりだ。金、地位、名誉でしか忠勤に応えられないのが残念だ。
関羽が猪と斬り結んでいる。こうなると決着が着くまで終わらんな。
「文若の様子を見に行くか」
俺は負傷した荀彧の様子を見に行く事にした。
「えっ、宜しいのですか？」
鳳統は俺の言葉に驚いている。これは信頼の形だ。仕事を投げた訳では無いぞ。
「勝手にやらせておけ。関羽と黄忠なら上手くやるさ」
あの猪は立場的に曹操を裏切る事はしない。例え世界が敵に回っても最後までその剣で曹操の為に敵を切り伏せてしまう。しかもあいつは戦況を覆すだけの武がある。捕まえても処刑しか選択肢が無

いか。
この後、荀彧を見舞っていると討ち取る事に失敗したと結果が報告されて来た。曹操の親衛隊が出て来て猪を回収して行ったと言う。
「ま、気にすんなって。俺も遊び過ぎた。昨日から連戦で腹へっただろう？　飯にしよう」
俺は申し訳そうな顔をした関羽達に労いの言葉をかけて一緒に昼食をとった。うこぎ汁がうめえ。

平和の為なら如何なる手段も正当化される。勝てば良いのだ。
堰を切った濁流が坑道を伝って洛陽に流れ込む。地盤が水流の勢いで浸食され、そして城壁が崩れるまで時間はかからなかった。
坑道は洛陽の城壁の真下に掘られていた。流石に皇帝の居る宮殿や市街地を破壊する訳にはいかんからな。これでも被害の範囲は限定する様に配慮した策だ。
城壁の機能は失われ瓦礫の山が出来ている。敵の防衛に文字通り穴を開けた。
「ふっ、見事だ。良くやったな、曼成」
口元がにやけてくる。李典も自分のからくりによる成果で満足そうだ。
「んふふ」
李典は螺旋槍の応用による岩盤掘削機を開発し坑道作戦を成功させた。この時代にドリルって、技術チートかよ。
「袁紹に伝令を送れ」
洛陽一番乗りは袁紹に譲った。
液状化で泥濘と化した外周に艀を浮かせ、連合軍は殺到する。これに対して守備側も果敢に抵抗していた。
矢に射たれ泥に沈んで行く兵の骸。あれも足場には成る。
兵卒は命令されるまま動く。戦って死ぬ事は契約に含まれる代償だからだ。だから将は給料分、働いて来いと言える。
ぐうの音も出ないぐらい敵を叩いて手柄は十分なので、最も危険な市街地の掃討作戦は諸侯に任せてうちは高みの見物だ。皇帝の御所

や主要な建物の制圧だけでも数日はかかるだろう。
（頑張って抵抗してくれよ）
曹操軍の抵抗が続けばその分だけ諸侯の軍も損害を受ける。周辺の国力低下は荊州の安全保障に繋がるので良い事だ。
この戦が終わった後は伝染病が流行るだろう。都の復興も協力しなくてはいけないのがダルい。俺の指示で引き起こした水害だが、伝染病まで責任は持たん。
「徳謀、死体集めて燃やしとけ。目障りだからな。後、洛陽の民に食わせる炊き出しの準備も忘れるな」
感染経路の遮断、感染源の撲滅、個体の抵抗力の強化って衛生救護の教範に書いてあった。そう言えば性病も伝染病だが、抗生物質なんてこの世界には無いし、兵にも注意しておこう。
「うふふ、優しいですね」
程普はそう言うと指示に従って下がった。
見える所で、やることをやっておけば世間に対してうちの評価は悪くならない。人の目がある時に掃除してこそ近所付き合いも上手く行くのだ。
「子布、引き続き情報の入手に努めると共に、警戒を厳にし、後は適当にやっておけ」
外哨、斥候の配置等必要な警戒の処置を忘れてはいけない。油断してぼろ負けしたって話は歴史上、幾らでもあるからな。張繡に負けた曹操とか。
「うむ、承った」
張昭の返事に鳳統は眉をひそめていた。
程普も張昭も、孫家から出仕してる身で、正式に俺の家臣として仕官してる訳では無いから俺は気にしないが、俺の家臣の中にはそれを不快に思う者も居る。
下手に暴発する馬鹿は居ないが、何れは正式に臣従させねば示しが付かない。
反乱は漢帝国の広域重要指定事件であり、賊将は指定被疑者特別指名手配として名指しを受けた者も多い。顔と名前は全国に出回って

おり、時間と共に記憶が風化するのは間違い無いが、現時点ではそのまま登用出来ない。人的資源を遊ばせて置く無駄に、残念だと思う。
（やっぱり袁紹が問題だな）
朝廷は形骸と化している。だから文句を言われる事は無いだろう。
問題は袁家だ。曹操を無事に討伐出来たとして、この後は袁紹と取り巻きが漢の舵取りをする事に成るだろう。
そうなると、もう一波乱起きそうだ。

洛陽では夜通しで掃討が続けられている。連合軍の目的が殲滅である以上、敵も頑強に抵抗する。どちらの側にも理由があり、まったく正しい選択だ。
普段、城での夜はおっぱいに囲まれて寝る。しかしここは戦場なので、天幕と言う限られた空間しかない。
俺は陳珪（ちんけい）を呼び寄せた。
陳珪は娘の陳登（ちんとう）、他に徐晃（じょうこう）や家臣を引き連れて、俺の保護が欲しいと投降して来ていた。
曹操の一門や古参の家臣でも無ければ助命する。好んで官吏に成った者達だ。能力も申し分無いだろう。
しかし陳珪には胡散臭い物を感じた。心の卑しい人間は利用出来るが、誇りのある奴は厄介だ。
（あれは良いおっぱいか？　娘が居ても垂れないおっぱい、生理食塩水が詰まっている訳でもない、夢いっぱいのおっぱい。素晴らしきかなおっぱい……）
ぷるんぷるんのおっぱいは俺の思考を妨害する。卑怯な策だ。
曹操と袁紹の件が片付いたら後はのんびり出来る。おっぱいも楽しめる。漢もいずれ滅ぶが俺の生きてる間は延命出来るだろう。後は知らん。
「劉琦様、御召しにより参上致しました」
艶やかな笑みを浮かべて陳珪は天幕に入って来た。胸元を強調し大きく開いた服装は、淫靡な雰囲気を漂わせている。
「降ったとは言え、敵に仕えていた者と一人で逢うとは剛胆な方です

わね」
監視と護衛は外に待機させている。話をする為でナニをする為では無い。
「用心しても、駄目な時は駄目だ。そんな気苦労をしてもしかたない」
苦笑を浮かべながら陳珪は訊いてきた。
「それで私を呼び寄せたのは、夜伽をせよ、とでも仰るのでしょうか？」
「ああ、違う。おっぱいは間に合ってる。それより聞きたい事だ」
おっぱいと言う単語に反応して、まばたきするまつげが長いな。
「曹操はいつ動くんだ？」
「と言いますと？」
惚けてやがる。曹操の魅力に引かれて集まった人材だ。簡単に転向する根性の連中とは思えない。
「この世で長生き出来るのは臆病で利己的な者だ。だけど曹操は違うよな。全身全霊をあげて責務をまっとうする。官吏としての献身と自己犠牲は大した物だ。自らの正義を他人に押し付ける根性もある。あいつこそ王と呼べるだろう。そんな曹操がこのまま負けるか？それは無いな。再起を図るなら今頃、洛陽を捨てている。だったら乾坤一擲の大勝負を仕掛けて来るだろう。俺はそう確信している」
おっぱいを楽しむ空気は消えて、陳珪の紅紫色の瞳が揺らいでいた。
「おい」
俺の言葉に音も無く周泰（しゅうたい）が現れた。陳珪は目を開いて驚いている。
周泰は孫家所縁（ゆかり）の武官で、俺の身辺警護と連絡に当てられている。
「違う、まだ早い」
「え、あ……はい！」
俺の手振りで周泰は慌てて姿を消した。あいつ、段取りを間違えやがって。猫グッズは没収だ。
溜め息を吐く俺の続く言葉を陳珪は黙って待っている。咳払いをして空気を切り替えた。

「曹孟徳の身柄を渡せ。そうすれば俺が生きてる限りは、お前らの将来も保証してやる」
「どうして私が嘘をついてると？」
「おれのおっぱい好きは調べれば分かる事だ。あまりにも露骨過ぎる。この段階で曹操は諦めていないって分かるだろう」
簡単に降伏はしない。兵を無駄死にもさせない。機会をうかがって最後まで足掻くのが曹操だろう。
「なるほど。そうすると私が劉琦様に寝返って協力すると信用なさるのですか？」
「まぁな。それに俺を裏切ったら、お前の娘も係累もいたぶってから皆殺しにしてやる。犯されて生きたまま解体される様子とか見物だろうよ。史記の黥布列伝や漢書の食貨志も楽しそうな事が書いてあったな」
俺の恫喝に陳珪は不快感と不安の色を浮かべていた。故事にも通じており、意味が分かったのだろう。
史記の黥布列伝や漢書の食貨志には中華民族の食文化が記載されている。その中には食人もある。そう考えたら食われるよりはましだ。
秦の降兵二十余万人を坑殺した黥布なんかは人に出来ない事が出来るヒーローだな。そこに痺れる、憧れる。
「真面目な話、俺は荊州さえ守れたらそれでも良い。お前らが恭順するなら受け入れるだけの余裕はあるからな。協力すれば見返りはくれてやる。だから大人しくして、怪しい動きはしない事だ」
俺の笑い声が天幕の中に響く。

3―3

戦争とはとどのつまり、五銖銭を何枚まで支出出来るかの財政力が決め手と成る。金さえあれば人も消耗品も幾らでも調達出来るからだ。一騎当千の猛将を揃える事が出来れば１００人は１０万人の働き手となる。
まぁ、実際に１０万と１００人が戦えば、火力指数、戦力点数と、防

御側の修正で地形、準備日数と言った戦力比の算定を含まなければ、正の平方根（１０万の２乗―１００の２乗）でほぼ無傷の９９，９９９．５生き残る。あくまでも数学上の数字だが、数の力は個人の武さえ凌ぐと言える。だから数を揃えれば良い。そして世の中は金だ。

しかしこの世界で錬度の高い曹操軍は、数字の理論を越えて連合軍相手に勇戦していた。準備日数に応じて防御陣地の強度は変化する。曹操の備えが十分だったと言う事だ。

闇が覆う天文薄明の時間、洛陽の中心部で大規模な爆発が確認された。そして都の四方で火の手が上がり、赤々と染まる空に黒煙が立ち上っていた。

「始めやがったな。何を使って爆破したんだ。まさか火薬か？」

中国大陸には天然資源が多数眠っている。ガス田もその一つだ。それに気付いて利用したなら凄すぎる。

洛陽の消火で連合軍はてんてこ舞いとなっていた。しかしこれは序曲に過ぎなかった。

洛陽の郊外で偽装し隠蔽されていた敵が袁紹本陣を襲撃、連合軍の兵糧庫である俺の陣地も襲撃された。

「ふーん。陳珪、お前の言った通りだな」

陳珪の情報で曹操軍の奇襲は知っていた。だが連合軍には消耗して貰いたいので知らせはしなかった。

味方の全般前哨は抜かれ、戦闘前哨も抜かれ、戦闘陣地の前縁に忽然と奇襲部隊が現れた。ここまで見付けられなかったとは、敵ながらまったく見事な隠蔽だ。

敵の先頭集団が掲げる牙旗が闇夜に目立つ。

「来たな」

うちに向かって来たのは曹操直卒の親衛隊。袁紹より俺を評価してくれたらしい。光学機材も何も無いのに夜間行軍で攻めて来るのは凄いと思う。

それに、此方の予備隊による逆襲を拘束する為に行った複数の目標への同時攻撃も素晴らしい。袁紹の阿呆に予備隊投入の時期を判断出来るとは思えん。洛陽の火消しに駆り出されているだろうから、慌

てて呼び戻しているのだろうか。
「劉琦様、ここは私達に任せてお下がり下さい」
黄忠は俺の身を案じてそう言ってくれたが、それは断る。
「何を言ってるんだ。お前らの晴れ舞台じゃないか。特等席で見せて貰うぞ」
最高のショーが始まるんだ。見逃せない。
俺には降伏を勧告すると言う選択もあった。曹操を降し鷹揚な所を見せる。上手くすれば曹操に心酔する家臣を此方に引きずり込めるかもしれない。
しかし、それはナンセンスだ。俺は脅威を放置はしない。殺れる時に始末すべきだ。
防御における黄忠の役割は、敵の進出に応じて所望の時期と場所に、部下を指揮し矢の雨を集中発揮して、敵を撃破する事だ。
突撃破砕射撃は、敵騎兵と随伴する徒歩部隊の突撃を破砕する為に、戦闘陣地の前方で始める宴だが、既に敵味方が入り乱れて曹操軍は浸透しつつある。
袁紹からは景気の良い情報で「曹操軍的士気低下落」「曹操退出漢歴史舞台」とか伝わって来ていたが、負けてるにしては敵の士気と錬度が高い。主君と共に戦う最後の守り、親衛隊であるからだ。
と言う事で、近接戦闘部隊に対する密接な矢による支援を行おうにも、こうも敵味方が入り乱れては、黄忠と言うか、弓兵は部隊としての活躍が出来ない。技量が求められる個々の戦闘に成ってしまう。
ここで頼みにするのは関羽だ。
陣地防御を行う場合、関羽は戦闘地域守備隊、予備隊又は警戒部隊として使用される。そして必要に応じて逆襲を行う。
逆襲をやるのは、今でしょう！
「愛紗、俺は知己のある曹操を阿呆な袁紹や有象無象に討たせるのは忍びない」
「お任せ下さい。曹操殿の御首級(みしるし)、この関雲長が上げて見せましょう」
関羽は義に厚い。焚き付ければ、俺の意を深読みして勝手に盛り上がってくれた。

「頼んだぞ」
個人の武で関羽は秀でている。これで曹操も終わりだ。
鳳統の立案した防御計画に従って俺は陣地正面で曹操軍を拘束した。さらには関羽を投入している。
その間に隣接する友軍は、俺の位置からは見えないが敵の側翼を通過すべく動いていた。後方の遮断を指向したのだ。
友軍の指揮官は馬騰（ばとう）の名代でやって来た馬超（ばちょう）で、地味な見た目の奴だが騎兵と言う機動力を持ってるから、ぴったりの役だ。是非とも、皆で協力して成功させたい。
目指す所は世間一般で言う所の包囲で、曹操を討ち取る事だ。
指示は出した。後は報告を待つだけだ。黄忠を呼ぶと膝枕をさせて俺は寝る事にした。何だかんだと言ってもまだ夜だしな。睡眠は貴重だ。

感覚的に３０分ぐらいは寝ただろうか。黄忠に起こされた。
まだ空は薄暗い。
「どうした、紫苑（しおん）」
二人だけの時は真名を呼ぶようにしている。しかし甘い空気は無く、外から剣戟の戦場騒音が聴こえて来た。
「敵か」
寝起きの気だるさは掻き消え、新鮮なもやしを食べたみたいにしゃきっとした。
「はい、劉琦様」
曹操の家臣はよくやっている。敢闘精神は大した物だ。
天幕の外に出ると味方第一線は突破されていた。関羽は夏侯惇に食い止められており、まだ曹操の首を取れてない。
返り血か、あるいは本人の物か。曹操は血まみれで戦っていた。
黄忠が矢を射るが大鎌で弾き飛ばされる。
曹操の視線が俺を捉えた。その瞬間、アドレナリンが分泌されているのか、何だか背筋がゾクゾクした。
どちらからと言う訳でもなく、お互い自然と笑みが浮かんだ。

「よくここまで来たな、曹孟徳殿。Come on.
Let's Party.」
俺の声が聴こえたとは思えないが、奴には俺の意志が伝わったのだろう。曹操は獰猛な笑みを浮かべて雑兵を葬りながら此方に向かって来る。脇を固めるチビッ子二人も鬼神の如く暴れていた。家臣の武を信じるのは良い事だが、子供まで戦わせるのは俺の好みでは無い。
子供は好きだ。待つのが長ければ長いほど、成長した時が楽しみだ。
曹操も俺を待たせて楽しませてくれる。
「流琉、季衣、下がっていなさい」
この段階でこいつが影武者と言う事は無いだろう。これだけの観客と舞台で偽者であれば、勝っても負けても世間が許さないからな。
曹操は大将同士の一騎討ちをお望みの様だ。チビッ子と親衛隊が下がったので、俺も黄忠を下がらせて曹操が息を整えるのを待った。
「全部、貴方の仕業だったのね」
地位と金を手に入れても落ちぶれるのは早い。曹操がその証明だ。
「何の事かな？　私は何も知らない」
嘘は言ってない。過大評価されてるな。
「もう騙されないわ」
気が強い曹操が這いつくばった所が見たい。きっとギャップ萌えするだろう。
「何なの。そんな風に見て」
おっと、じろじろ見すぎた。
「強引に迫られたら断れないから、私、困るわ」
「ははは」
お互い笑い声を上げながらも空気がどんどん張り詰めて行く。
曹操は前傾姿勢でダッシュして来る。鎌が俺の足下を刈り取ろうと迫るがサイドステップして避けた。
が――そこには南蛮から手に入れた我が軍の増加食、バナナの皮が落ちていた。

（はっ、何それ!?）
滑る俺は、転んで剣を手放してしまった。周囲の者は王の決闘と見なして手出しをしない。今すぐ助けろよと思ったが、声援を貰うだけだ。
曹操は俺の剣を蹴り飛ばした。そして斬撃が襲いかかって来る中、俺は無様に這いつくばって避けた。
「見苦しいわよ。悪足掻きは止めなさい」
「諦めが悪くて申し訳無い。諦めなければ何度でも戦えるからな」
軽口を返しながらも俺の体は曹操の攻撃を避ける。
（武器、武器は無いか）
配膳を行う天幕の傍らに調理器具が並んでいた。
（あれだ！）
俺は女に暴力を振るうのは嫌いだ。だが今は仕方無い。
俺の人生を終わらせない。嘘だと思いたくない。生存本能が俺に得物を握り締めさせた。
「ちょいな！」
フルスイングですりこぎ棒を曹操の側頭部に喰らわした。頭蓋骨が陥没して鼻や口から血を流しながら、曹操は何が起きたか分からない顔をしている。
曹操が落とした鎌を俺は手にした。無茶苦茶重いぞ、これ。小娘の細腕でよくも振り回せた物だと感心する。
「Ｈａｓｔａ　ｌａ　ｖｉｓｔａ，　Ｂａｂｙ」
曹操の家臣が絶叫を上げる中で俺は鎌を振り下ろした。
「華琳様！　嘘だ、こんなの嘘だ！　お前ら許さない！」
チビッ子達が向かって来る。一騎討ちを汚す積もりかと俺の家臣はチビッ子を拘束した。
二人は曹操の首チョンパされた死体を前に泣き崩れた。
「華琳様、どうして……嫌……嫌よ！　あああああああ――っ！」
うるせえ、黙れ。喚くな。今すぐ殺すぞ、と内心で思いながらも外聞があるので言葉は選ぶ。
「曹操は君主として責任を果たした。お前ら子供は家に帰れ。これは

大人が始めた戦だ。お前らが付き合う必要は無い」
可愛い子は飽きないが、ガキは対象外だ。俺のおっぱいに加えるまでも無い。だから解放する。他の親衛隊は殺すけどな。
「来ないで！」
黄忠が手を差し伸ばすと水色の髪のガキが叫んだ。そして俺を睨み付ける。
「私は許さない！　貴方を恨みます。私、絶対に許しません！」
恨みは消えないか。面倒臭い。
「口では何とでも言えるが、もう諦めろ。戦は終わりだ。今までの事は忘れろ」
覇道を望んだ結果、曹操は自滅した。漢にとって不必要な人間だったと言う事だ。
曹操が漢を継承したとしても、同性愛者では後継者は生まれず、乱を呼び起こした事だろう。
「お前らはまだ、平穏な暮らしに戻れる」
俺は今の生活を守りたいだけで、諸悪の根源は乱世を望む者だ。

4・劉琦様ばんざい

4―1

どんな功労者であろうと、善人でも朝敵となった者は討伐される。そして勝てば官軍だ。

愚かな野心を抱いていた曹操を破った連合軍は恩賞として官位や領土を下賜された後、解散して所領へと帰還した。袁紹は皇帝の守役として漢の丞相（じょうしょう）、公に任じられた。

「丞相への就任、おめでとうございます。もっとも、華麗な本初殿の前では官位も引き立て役でしかありませが。御家中の方々も我が事の様に誇らしい事でしょう」

コネは大切だ。俺は祝いの挨拶で袁紹の元に訪れた。

「此方こそ荊州からは多大な御尽力を頂いて感謝していますわ」

愁傷な返事を返してくれるが、立場から言って州牧の息子と丞相では天と地の開きがある。俺は適当に褒めて袁紹を持ち上げてやった。

「いえ、本初殿の笑顔が見れるならこの程度の労など厭いません」

連合軍の後方支援でうちは色々と支払った物も多い。

例えば復興事業もそうだ。都の風水は曹操軍の策で滅茶苦茶に破壊されているそうだが、風水は気にした事が無い。現実問題として焼け出された民の暮らしが残っていた。

洛陽の復興に諸侯は人手と資金を供出させられた。金に余裕のある荊州（うちゅう）は、金銭消費賃借契約書を作成して諸侯に金を貸した。十万億土（あおく）の彼方（せ）に行ってからでは金も使えないからな。後々、倍返しで返して貰うさ。

「劉琦様は何人の相手にそう言ったのかしら。男の方ってそう言う事を誰にでもおっしゃるのでしょう？」

軽く眉を寄せた袁紹だが、前屈みに成ると強調されるおっぱいの谷間が俺の視線を惹き付ける。

「これは心外ですな。貴女だけですよ。本初殿は実に楽しいお方だ。そして興味深い」

特に性的な意味で。

「そうかしら？」
「自分が何者かであるかは身分や血筋で決まる。貴女は袁家を継ぐ者として、正しく、そして精一杯やってる様に私には見えますよ。おっと偉そうな事を言いましたが、これからは丞相閣下とお呼びすべきでしたね」
　軽口を叩く俺に対面して座る袁紹は、形の良い顎に指を添えて一瞬、考えると口を開いた。
「劉琦様、私の真名は麗羽ですわ」
「……はい？」
　とりあえず手元の杯に口を着けて場を繋ぐ。俺が飲み干すと、控えていた侍女が杯に酒を注ぐ。
（あー、カルーアミルク飲みたい。コーヒー牛乳でも良いや）
　俺は袁紹に視線を戻す。金糸の様な髪は美しく、翡翠色をした瞳も俺の視線を捉えて離さない。
　その姿は孫家の女達程に扇情的では無いが、十分魅力を感じた。
「麗羽殿、落ち着いたら荊州に遊びに来て下さい。歓迎しますよ」
「それなら、私の家に御招待するのが先ですわ」
　袁紹は俺の肘に手をかけて来た。
「そうですよ、姫もこう言ってますし」
「ちょっと文ちゃん、失礼だよ！」
　袁紹の側近である文醜は、俺が真名を許されたのを見て羽目を外してやがる。
「ははは、麗羽殿は良い家臣をお持ちだ」
　顔良も大変だな。
　袁紹との歓談を済ませて暫くすると、袁紹は本拠地に引き揚げて行った。
　代わりに審配（しんぱい）を指揮官とする袁紹軍１０万が洛陽に残り、司隷の治安維持に当たる事と成った。
　洛陽は荒廃しており、復興事業を始めると言っても時間がかかるからだ。
　治安は悪くない。晒し者にした曹操の死体は、食い物に混ぜた毒で

死んだ民の家族に散々、蹴られたり殴られた痛めつけられた。不満は多少、晴らせたのか民は落ち着いていた。

「劉琦様、またお逢いしましょう」

高笑いを残して去って行く袁紹を見送ると、俺も荊州に戻った。

そう言えば曹操の首を見たら唇にヘルペスが出来ていた。どうやら淋病やクラジミア等の性病にもかかっていたらしい。遅かれ早かれ性病で死んでいただろう。

（この後、世はどう動くのか？）

勢力的に見れば淮水から北の華北、冀州、青州、⊠州、豫州、司隷を支配する袁紹の一人勝ちと言える。

袁紹の回りでは田豊や沮授と言った知恵者が居て政を支えている。余程の失策でもしない限り、天下は袁家の物だ。

うちはうちで、従軍した将兵に手当てを出したり色々と忙しかった。俺が荊州刺史を親父から引き継いだり、それに伴い荊州の人事を若手の面子に交代させたりだ。

ある程度、周辺情勢の目処が着いたら面倒な政は弟に押し付けて、俺は勇退しておっぱいと楽しく余生を送る積もりだった――。

華美な暮らしをして来た袁紹は辺境に興味を持たない。并州の統治は名の知らん奴がやってるし、涼州の馬騰は蛮族と蔑み、幽州の公孫賛は辛うじて友人付き合いしていた。それ以外の有象無象は名家の自分に相応しく無いとかで相手にして無かった。

あんまりつまらない連中とは付き合うのは良くない。それを無意識の内に識別してる所が袁紹の悪運の強さか。

うちは袁紹とそれなりの付き合いはあるが、あいつみたいに領土的野心は無かった。しかし家臣はそんな俺の施政に焦燥感を感じていたらしい。このままでは袁紹に呑み込まれると。

「益州牧劉焉殿は恵文王や始皇帝を敬愛されているそうで、何れは皇帝に成る事も考えられている様です」

「漢を滅ぼした太祖劉邦の子孫にしては色々と迂闊だな」

内輪で言う分は許されても、外に漏れる事は失点でしかない。

「ええ、その大望を抱く故でしょうか、劉焉殿は交州に手を伸ばしつつあります。袁家に挟まれる我らは、揚州を手に入れ足場を固めるべきかと」
俺の政を孫権や周瑜、陸遜がよく補佐してくれた。荊州では人目を気にしなくて良いからだ。
「うん？　あ、そう」
君主は愛されなくても良い。現実に潰されない政を行えれば良いからだ。
無能な敵と頼れる味方、理想的な状況だ。だが袁紹の優位性は大きい。袁紹の野心が我慢の限界を迎えればうちも攻められる。そうなればどちらも消耗するだけだ。
一か八かの賭けに出れば、一度の失敗で全てを失う事もある。だから家臣は揚州の確保を進言して来た。
「お前達が荊州の為に考えた策だ。だったら反対はしない。揚州を取ろう。だけど劉繇の政は悪く無い。名目が要るな。何か考えたのか？」
揚州の九江郡、廬江郡、豫章郡には戦で発生した流民が流れ着いて難民キャンプを形成していた。荊州の治安を脅かすと言う事で、組合を通じて雇用を作り援助を行っていた。
「劉繇様は家臣や民に愛されております。いささかどころか、信義に悖る行為ですが……」
仁徳のある者から領土を奪う。その行為はどう言い繕っても侵略だ。孫権は表情を曇らせた。
「お前らは俺が信頼して取り立てた者で、荊州の家族だ。遠慮はいらん。ここには身内しか居ない。言いたい事があるならはっきり言え」
促すと、孫権に代わって周瑜が話した。
「流民を利用しようかと考えております」
曹操を討伐し袁家によって漢は再興され流民は減りつつある。周瑜が言うには、残りカスにも役立って貰う計画だ。劉繇は暗殺で排除する。その後、捕らえた賊に流民のキャンプを襲撃させ、揚州の民を保護と言う名目で派兵する。俺の名声で治める自作自演だ。

「そんな事させません！　そんな物、認められる訳無いじゃないですか！」
劉備が唯一反論して来た。あ、こいつは身内とは違う。
「止めて、劉琦様！　変な事、考えないで下さい」
「聞きたくない。空気読めよ。脳ミソ腐らしてんのか？　もういい、これ以上、何も言うな」
全員から白い目で見られた劉備は賛同者も居ず、泣きながら評定の場から走り去って行った。
可愛そうな劉備。君主には向いてないし、導かれる民が可愛そうだ。一生飼い殺しにしてやる。
「どうしようもない事だ。民を傷付ける事だがやってやる」
方針は決まった。後は誰が行くかだ。具体的な案を煮詰めさせる傍らで、俺は鳳統に尋ねた。
「皆が取れ取れって言うから揚州を攻めるけど、何人ぐらい要るかな？」
鳳統は答える。
「あわわ、わ、私の考えでは、２万人は必要だと思います」
見舞いがてらに荀彧の所に行った次いでに同じ質問を行うと、その答えはもっと少なかった。
「６０００人も居れば十分でしょう。我が軍略と劉琦様の御威光があれば、怪しげな天の御遣いなど尻尾を巻いて逃げ出すに決まってます！」
揚州に天の御遣いが降臨したと言う噂が近頃、流れていた。今までは漠然とした話だったが、今度は場所まで明示されている。噂が本当で、意図的に匿っていたなら漢に対する謀叛だ。討伐の大義名分にも成る。
天の御遣いなんて怪しい者を認める事はあり得ない。天は一つ、漢室を支える事こそ民と諸侯の務め。
現実主義な荀彧が諱（いみな）と言える天の御遣（それ）いを口にするのは、比較に成らない程までも俺を敬愛して忠を尽くしてくれると言う事だ。その発言は重い。

「お、おぅ。お前のやる気は買うが先ずは安静にして傷を治せ」
忠誠心は分かった。だが想いの重い女も扱いに困る。
「はい……」
意気消沈した荀彧の被り物が、たれた耳みたいで面白いと思った。
「劉琦様？」
黙った俺を見て、不安そうな顔をする荀彧に悪戯心を刺激された。
「何、桂花の唇が柔らかそうだと思ってな」
真名を呼ばれて荀彧の冷静さが崩れた。
「たたた、試されますか!?」
面白い返しだが、そこでどもるのは台無しだ。
結局、揚州攻めでは余裕を持った行動を行う為に鳳統の策を採用し2万の兵を動員した。鳳統を司馬に任命したが、本来なら荀彧に任せたい所だ。

州牧が殺害されるほどの治安悪化と言う事で、隣国である荊州（うちら）は治安回復を目的に越境、主力はこれまでに十二の街を落としていた。そして俺は山の中に居た。
眼下では、揚州軍の輜重兵が隘路を通過している。敵は稜線に斥候も出さず、警戒しない間抜けだった。
周泰の指が指し示す方向に視線を向ける。学生服みたいなのを着たガキが行軍序列の中程に居た
「白く輝く衣を纏ったあの者が天の御遣いだそうです」
揚州軍の御輿（みこし）に担ぎ上げられているそうで、目立つ服装は殺してくれと言ってる様な物だ。
「ふーん、ただのガキにしか見えんな。それで連中は、天の御遣いを旗印にしてるから降って来ないのか」
「でも天の御遣いは異性に大層、御持てに成るそうですよ。配下の同性に不満を抱かせないのはさすがですよね」
「……リア充は死ね」
今回は揚州の民を納得させる為に俺も出るしか無かった。劉繇（りゅうよう）の支持者が主亡き後も抵抗を続けている。不思議と言うか、面倒な連中

だ。
「仕方無い。天の御遣いは天に返して、目を覚まさせてやれ」
決して嫉妬では無い。俺にはおっぱいが居るからな。天の御遣いに負けてなどいない。
自分が絶対に正しいと信じて戦う事は強さと成り、迷いは弱さと成る。やるなら自らの正義を徹底的に信じるべきだ。侵略を荊州の為と美化すれば良い。気持ちは楽に戦える。
真の強者とは心身共に鍛えられた者を言う。平和の礎として敵を葬ろう。
目立つ標的を外すはずも無く、黄忠が必殺の矢を放った。
額に矢をめり込ませて天の御遣いは落馬した。瞬殺だ。
黄忠の攻撃を合図に隘路の稜線に伏せていたうちの兵が攻撃を開始した。頭上から降り注ぐ矢は敵をズタズタにした。文字通り射的の的だ。
１９世紀位までは、東西を問わず戦争は火器が普及しても方陣や戦列による戦術が基本であった。１０００年以上も昔の古代中国であれば尚更だ。陣形を組まねば戦えず、かと言って陣形を組む余裕すら無かった。屍がそこらに転がり、血で足元はぬかるむ血流満谷である。
弓や弩による戦闘要領には遠距離早期射撃と近距離不意急襲射撃がある。今回は近で火網を構成していた。近距離になるに従って濃厚となる。錯雑した丘陵の地形効果が我に味方をしていた。
うちの戦略は敵野戦軍を日干した後に雌雄を決すると言う方針だった。今回の指導要領は輜重兵を撃破した後に、事後の戦果拡張を行うとある。
戦いは掃討に移行して来た。気分は良い。
「相手が間抜けで良かったな」
山間部の移動は最短距離を通過すると考えられた。だから此方は道に重点を指向した攻撃で、敵を各個撃破出来た。
「ああ、それと捕虜はいらん。全員斬首だ」
「御意」

恭しく頭を下げた黄忠の胸元に自然と視線が向いた。若作りが上手いのか相も変わらず美しい。おっぱいに手を伸ばしたいが今は我慢する。黄忠の手を握るだけにした。

何れ人は死ぬが、生まれ変わって愛しい者達と再会出来ると言う。俺は現世だけで手一杯だ。だからこそ今を楽しむ。

天の御遣いを討たれた揚州軍だが、統率を失ってはいない。優秀な軍師が居たらしく、そいつの指揮で元からの兵に家族や土着の人々、流民を加えて集団を形成した。

「我々が迅速に揚州を制圧できなければ、袁家や益州が動きます」

俺の軍師兼護衛役として従軍している呂蒙の言葉だが、分かりきった事の再確認に過ぎない。

「だろうな。相手がもう少し阿呆で弱かったら良かったのだが、結構、粘るな」

あの後、主力と合流し転戦した俺は寿春を攻めていた。

ここは始皇帝の時代、楚が治めていた地だ。

寿春は楚、趙、魏、韓、燕、衛が連合して秦を攻めたがぼろ負けして、遷都した楚の都と成った。その後、何年かしてから王翦と蒙武が楚の王、負芻を捕らえて楚を滅ぼすと秦の支配下に入った。他にも廉頗の亡くなった場所でもある。

まぁ、史跡研修は勝った後にでもしよう。軍師連中なら喜んでガイドをしてくれるだろう。

「楚も秦も滅んだ。盛者必衰の理か……」

人には想いがある。想いは人を強くする。心の貧しい胆力の乏しい者は英傑には成れん。

呂布が一騎駆けをしていた。いや、部下が追従出来ていないだけか。

死体を積み重ねた先に勝利と栄光がある。

呂布の食費は半端無い。食事は現品給与であるが、一食が米１０斗、肉５０斤と報告されている。食い過ぎで限度を超えており、民の税で賄われている事を教えて、呂布の給与から超過分を徴収した。

「こいつら、マジで強ぇ！」
だろう。敵の悲鳴も裏を返せば味方の強さに対する称賛の声と同じだ。
「貴様ら、こんな真似してただで済むと思ってるのか！」
蝶のように舞い、蜂のように刺す敵が居た。
何処かで見た記憶のある水色の髪をした女だが、槍を振り回しながら文句を言っている。
思い出せんが、生きてる者も呂布によって葬られ、すぐに死んだ仲間の後を追う事に成る。俺が殺すと決めた。ここで死ぬ事が奴らの定められた運命だ。
俺が共に生きたいと想うのは荊州の民と家臣だけだ。黄忠の娘、璃々（りり）も血の繋がりは無くても、掌中の珠と慈しんで可愛がってやっている。
俺が逝く時は戦場では無く愛人（おつぼい）に囲まれて逝きたい。

4―2

戦争策略とは戦術と戦略を纏めた言葉である。荊州で過ごす俺の生活を守る一番確率が高い行動は何か、安定行動を取るべく生存戦略を考えていた。それには歴史の表舞台で目立たず、影に潜み謀略を巡らせるだけの根性が必要だ。
だが俺は親父の息子として生まれた。別に漢帝国を牛耳る気は更々無いが、ＭＯＢキャラの様に目立たないと言うのも限界がある。
今後、揚州の制圧を終えた後だが、漢の情勢を動かせる勢力は数える程しか残っていない。袁紹は領土の広さの割には、飢饉の影響で大規模な動員で遠征を行う事は出来ない。曹操の討伐ではうちが援助したから動けただけだ。
現状、侵略的傾向を見せているのは益州を地盤とする劉焉だ。あいつは次の皇帝を狙ってるらしいので要警戒と言える。
だからこそ揚州攻めで多大な時間を浪費する事は避けねばならん。
「敵の軍師は諸葛亮孔明だと？」
敵の残して行った指令書や書簡から問題の相手が判明した。

「はい。水鏡女学院で私と同門の者でしゅ！」
勢い込んで報告する鳳統だが、最後で噛みやがった。涙目が嗜虐心をくすぐる。
鳳統と諸葛亮は真名を交換した間柄で親友であった。だけど艶本のカップリングで争い、袂を別ったそうだ。
「あぁ、そう言えば退職届けが出ていた様な……」
一時期、諸葛亮は鳳統と共に、うちへ仕官しに来ていた。それなりに仕えるやつだから引き立ててやろうと思っていたが、曹操との戦が終わった後に辞職していた。田舎にでも帰ったのかと思っていたが、天の御遣いに仕えてたのか。
「そうです。朱里ちゃんは、天下を治めてくれる方を主君に仰ぎたいと言ってました」
俺は将来、怠惰で気楽な生活に憧れている。そんな俺に天下を治める気が無い事は皆知っている。俺に対する失望で荊州から諸葛亮を離れさせたのだろう。
（主は死んだ。後は何だ。意地か、復讐か？）
個人の趣味はどうでも良いが、諸葛亮が厄介な敵だと言う事は、三史の全てを読んだ訳でも無い浅学菲才（せんがくひさい）な俺でも、歴史上の偉人として名前を覚えている。ほぼゲームや小説の記憶だけどな。
「ふーん、そんなに優秀な奴なら速やかに排除するべきだが、暗殺ばかりやってたら州牧ぶっ殺したのもばれるか」
揚州の兵や民に偽装した特殊部隊に指揮所を襲撃させて諸葛亮を殺すとか考えてみたが、敵の中枢部の所在が分からん。隠蔽が上手い。
「朱里ちゃんは決戦を避けて、劉琦様が行われた様に小部隊による襲撃を行って来るでしょう。ここは逆手に取って、兵を集結させて決戦を強いてみてはいかがでしょうか」
「諸葛亮が誘いに乗らず、項燕（こうえん）を破った王翦の様に守りに徹して動かなければどうする？」
戦の主導性とは、敵に我が意を強要し戦勢を支配する事である。
過去にも秦の李信（りしん）が敗れた後、新たに南伐の指揮を任された王翦は

始皇帝に与えられた任務を確実に達成出来る事を主眼とし、守りを固めて我に最も望ましい戦場を演出した戦訓がある。
諸葛亮が同様の策を取らないとは言えない。
「もし朱里ちゃんが此方の誘いに乗らず我が軍を放置すれば、守る意志は無しと見てとられ揚州の民の支持を失うは必然です」
呂蒙に視線を向けると、鳳統に賛成なのか頷いた。
軍師連中が同意見なら俺に反対する理由は無い。上手くやっておけと指示を出した。

寿春を落としても敵は降らなかった。この時代、敵の首都を陥落させても戦は終わらない。揚州残党との決戦を挑むべく長江の南に兵を進めた。
第一梯団は洞口（どうこう）、蕪湖（ぶこ）を渡河し、急襲した。さすがにバーレブ・ラインに比べたらトーチカは築かれていない。それに敵の応援も来なかった。
橋頭堡が確保されたので俺も長江を渡った。敵の水軍は見当たらない。
「敵は出て来ませんでしたね」
黄忠が周囲を警戒しながら話しかけて来た。
「このまま残党も解散してくれたなら楽で良いけど、そうじゃねえな」
この後の統治では、何れ発展するであろう南京、上海方面の開発を誰に任せるか候補を考えた。傀儡を置く間接統治は可能だが面倒だ。それなりの才覚もあって友好的な人物が好ましい。
今回の遠征で劉備には後方警備と暫定的な軍政の指揮を命じてあった。あいつには捕虜の虐殺も出来んしな。
仁の人と呼ばれる劉備の特徴を活かした占領政策を期待したからだ。
飴と鞭で、最初に徹底的な力の差を見せ付ける。それが苛烈な程、ＤＶの相手と別れられない関係の様に靡（なび）き依存する。
敵に荷担しなかった者達は、うちに敵対して死んだ者と比較して、自分達の選択は間違いなかったと確信する。そして劉備の優しい対

応でころりと転がるだろう。
（南京はこの時代だと建業（けんぎょう）か。建業と言えば、やっぱり孫家かな？）
三國志で呉は孫家の支配地だ。だったら孫権に預けて見るのも一興かと思った。
（でも袁紹に滅ぼされたはずの孫家が出てきたら不味いか。呂蒙を太守にしても良いな）
戦が終わるまで暫くは保留だ。
袁紹と言えば、誕生日が近いと言う事で、揚州の特産品である茶葉と酒を送っておいた。口に合うと良いが。
「それで、如何なさいますか？」
黄忠の尻を軽く撫でながら俺は答えた。
「敵が決戦に応じないなら、残る三郡も呑み込むまでだ」
俺はそう宣言したが、会稽（かいけい）郡と丹陽郡、呉郡。橋頭堡を拡大して内陸部に前進すると、この三郡の周囲には強固な要塞線が構築されていた。
「ただあるだけで軍勢の進軍を阻害する障害物とは、敵ながら見事な構築ですな。龍の歯と言った所でしょうか」
呂蒙の言葉に、俺の軍師は流石だと思った。
「うん、それだな」
実はこの要塞線構築には、元請けで組合も参入している。ゼネコンがトート機関をやってる様な物で、向こうのインフラ設備も情報はだだ漏れだった。
天の御遣いは雑学程度の知識を有していたらしい。その漠然とした知識を前の州牧と優秀な官僚は、具体的施政に反映させて実現した。お陰で建築関連の融資でうちは稼がせて貰った。
「ま、障害物と言っても時間稼ぎにしかならん。ぶっ壊して進めば問題なかろう」
俺達を要塞線で拘束し、その間に敵が迂回して襲撃して来るとかの選択肢もあるが、行動の自由を失いつつある現状で難しい。あるとしたら間隙を突いて来る位だ。
（問題は諸葛亮がきっちり釣れるかどうかだな）

敵の主力を撃破しなければ逆襲を受ける。それ故に効率良く肉塊が大量生産される決戦による野戦軍の撃滅が望ましい。
野戦築城の技術と発想はうちだけの専売特許では無い。努力など才能のある者の閃きの前では塵にも等しい。進軍する俺達の前進経路はある程度限られている。全てを網羅する必要も無かった。諸葛亮は落とし穴や障害物を使って、俺らを誘導しようとしていた。
「この落とし穴は酷いな。竹槍に糞まで塗りたくってやがる」
俺が見た落とし穴だけでも、毒蛇を入れた物や糞尿が溜まった物まで様々な種類が用意されていた。
「あわわ……」
障害物を排除しながら前進すると、宣城（せんじょう）の近くで偵察から報告が入った。斥候班長によると前衛の前に、小規模な敵部隊が展開していると言う。指揮官は聞いた事も無い様なＭＯＢキャラだ。
「敵の警戒部隊か」
宣城は李白の五言律詩で有名で、江南の経済と政治の中心地でもあった。
此方と決戦する、しないはともかくとして、敵が流動的な抵抗を構想してる事だけは間違いない。
「あれは遅滞陣地守備部隊ではないでしょうか」
呂蒙が言って来た。細かい解説や気配りが出来るのはこいつの美点だ。
呂蒙の言葉に従って観察をする。
遅滞陣地守備部隊は数線の陣地を準備して、俺らを遅滞する事を目的に行動する。問題は敵主力がその間、どう動くかだ。
「待ち構える先が罠でも、お前らなら食い破ってくれるのだろう？」
「勿論です」
呂蒙の言葉を合図にしたかの様に周りの者は頭を垂（こうべた）れる。
君主に必要なのは見たい物、聞きたい物だけを選ぶ前向きな姿勢だ。家臣は主の理想を実現する為に邁進する。だから俺はやる気を煽ってやれば良い。
「敵を叩き潰して荊州兵の武威を知らしめてやれ」

貴賤で命の値段は変わって当然だ。俺の様な上に立つ者の命は兵卒の命と比較に成らない。だから俺の為に忠を尽くして彼女達は頭や武を使う。

「撃て！」

黄忠の号令で数千の矢が敵陣に放たれた。対弓兵戦で先に敵の弓兵を潰すのは戦の常識である。陣地攻撃において弓兵は、戦闘の終始を通じ、敵騎兵・弓兵・弩兵等の制圧、うちの陣地占領の援護を調整実施するのが役割だ。

激しく攻撃が行われる中で、敵の陣地に向けて呂布が率いる騎兵が突撃した。その側翼を固める関羽は、呂布の広げた穴を更に広げ様としていた。

騎兵は歩兵と密接な連携の下に、特色を最大限発揮して戦闘を遂行する。と言うが、一騎当千の将でも囲まれたら討たれるから、一騎駆けは控えている。要するに有機的に結合した戦闘部隊として行動していた。

戦闘の推移を俺は後ろから眺めていた。

「敵陣地の縦深は浅いな」

バーミリオン星域会戦の帝国軍に比べたらペラペラだった。まあ、あれは宇宙で縦深防御やろうと言う時点で変だったな。

「そうですね。敵が此方を漸減（ぜんげん）するにも、恋さんや愛紗さんが突破して後ろから崩されますね」

「はわわ、あの、敵の地形は敵にとって最も有利な条件で選ばれてるはずですよね。朱里ちゃんがそれを見逃すとは思えないのですが……」

そう言ってるとイベントフラグを立てたのか、伏兵が後方から襲撃して来た。

「これが諸葛亮の奥の手か？」

名軍師とは、攻める時期と方法を弁えているらしいが、何かぽっとしない。

戦場で戦う事を生業とする武官や策を立てる軍師は、どこかで精神の均衡を崩している。

でなければ賊や捕虜を千や万単位で生き埋めにしたり、斬首にした

りは出来ない。
「あわわ、単純過ぎるよ朱里ちゃん」
陣地にうちの攻撃を引き付けて、後方より伏兵により逆襲する。それも中途半端な兵力では効果も薄い。
鳳統が眉をしかめて、呂蒙は考え込んだ。俺から見ても、脆い敵に薄っぺらな奇襲で胡散臭過ぎる。
（いかに名軍師と言えど、これは酷い。これが鳳統に並ぶ才を持つ諸葛亮の策か？　狙いは何だ。最小限度の損害で最大の効果……）
後衛を指揮する魏延（ぎえん）が敵を食い止めていた。
後衛が迎撃に当たっていると、側面から火攻めを受けた。黒煙が立ち上ぼり生臭い香りがする。
「魚油ですね」
魚油の入った樽と火矢による単純な組み合わせだが、効果はあった。
「水だ、水を持って来い！」
陣地攻撃の最中だった俺達は、宿営地で天幕を拡げて居た訳でも無い。だが可燃物はそこらにある。慌てる校尉達だが、携行するのは飲料用で炊事の水も限られていた。
「落ち着け。地面を掘れ。土をかけろ」
俺は窒息消火で土をかけろと指示を出しておいた。
単純な奇襲を装（よそお）いつつ、罠に誘い込む。常套手段だが、この火攻めも決め手には欠けていた。
「皖城（かんじょう）が奪還された？」
敵の奇襲を撃退して宣城を攻めていると、石亭（せきてい）に進出していた陸遜（りくそん）から長江の水路を使って火急の知らせが入った。
諸葛亮急攻皖城、と色めき立ったが、落ち着いて話を聞く。
「劉備は投降して来た揚州兵を独断で受け入れたそうで、その後、城内からの蜂起で陥落したそうです」
俺は殺せと命じた。だけど劉備は処断出来なかった。
（何をしてるんだ、あの糞女は。足を引っ張るしか脳が無いのか）

言葉だけの人道主義は存在を許せるが、行動が伴う場合は迷惑も増加する。
劉備自身に償って貰わねば軍規が維持出来ない。首と胴体がおさらばするのは劉備だ。
「劉備の罪は明白です。劉琦様の信頼を裏切り、これ以上は流石に看過出来ません！」
関羽を筆頭に俺のおっぱい達は劉備の処断を求めた。
軍師連中も前々から劉備の排除を進言していた。西漢の時代、諸侯王である宗主の七家が反乱を起こす七国の乱があった。劉姓がどうのと言うより、同族であっても骨肉の争いをすると言う事だから油断はできない。俺の知る三國志では劉備が益州を奪い取っていたから、軍師連中の心配を杞憂とは言えなかった。
だけど俺は、あのおっぱいを惜しいと思い決断が出来なかった。
「劉琦様、劉備は存在事態が危険です。御命令下さい、劉備を討てと」
決心するべき時が来た。
「春秋時代、晋（しん）の魏絳（ぎこう）は、君主である悼公（とうこう）の弟、楊干（ようかん）が法を乱した時、その従僕を処断した。軍規とは人として守るべき最低限の法であり、法を守る者が居なくなれば国は乱れる。こんな結果になって残念だ」
いかにも俺は苦渋の選択だと言う表情を浮かべて劉備の処断を決定した。
「陸遜から、他に何かあるか？」
「石亭には荊州から応援を送り込み対応するので、御心配はいりません。お任せくださいとの事です」
「ふん、頼りになるやつだな」
後方は陸遜に任せた。劉備を信頼した俺が馬鹿だった。体の相性は悪く無かったから、チャンスを与え様などと考えたのが大間違いだ。政の前では結果が全てで、穴さえあれば良いと言う問題では無いな。
宣城から更に南下してると、劉備が連行されて来た。
「劉琦様、ごめんなさい！」
跪（ひざまず）いた劉備が頭を下げ泣き崩れる。

「私の行いは、劉琦様の意に沿わない物です。私の感情だけで敵を見逃した軍法に抵触する部分がありました。敵が再び武器を携えて向かって来る事を認識せずに、味方にも被害を与えて本当に申し訳御座いませんでした。でも、皆は私の指示に従っただけです。許してあげてください。お願いします！」

額を地面に擦り付けて部下の助命を行う劉備だったが、俺に何の感銘も与えなかった。

「なぜ命令違反をしてしまったのか。それはお前自身の認識の甘さ、将としての未熟さだ。安易な偽善で判断を誤り、敵は武器を再び手に取って向かって来た」

城内を制圧されたのは初めから敵の策だったからだ。見抜けなかったのは仕方無いとしても、その前に処断しておけばこの様な事態を招く事も無かった。

休む時はしっかりと休む様に、殺せと命じられた時はしっかりと殺すのが仕事だ。規範意識の欠如は明らかだ。

「給金貰ってるだろう。遊びじゃねえんだぞ。お前が下手打って自滅するのは勝手だが、俺らを巻き込みやがって……。下郎が。もうお前、いらねえから死ねよ」

俺の合図で関羽が劉備の首を跳ねた。

4―3

戦場は流動する。しかしそれに惑わされて戦略目的が達成出来ないなら意味が無い。

そう言う意味でも任務分析は基礎中の基礎である。任務分析を適切に行う事で行動指針は決定される。

任務の完遂と目的の達成である。

「我が軍の達成すべき目的は揚州の制圧であり、抵抗勢力の一掃は目標である。具体的な目標を達成する為には諸葛亮の無力化が望ましい。ただし、必ず達成すべき目標では無い。敵の所在や目標が不明なら、諸葛亮の撃破は困難であると言えるだろう」

敵は後方攪乱や奇襲で我を攻撃する公算が大と判断される。指導

要領としては江南において敵を撃破し、事後戦果を拡張し呉郡の敵を覆滅すると言う事で、当初の目的を忘れず俺達は呉に進んだ。地盤である呉を失えば、いかに諸葛亮と言えども戦い続ける事は出来ないからだ。

その間、劉備の処刑を知った張飛が部下を連れて逐電。鈴々山賊団を名乗って九江郡の合肥(がっぴ)城を奪取した。

「城一つ取っても周囲はうちが固めてるのに、何を考えているんだ」

俺の言葉に呂蒙が模範的回答を述べた。

「合肥の失陥で兵站も伸びるのでは無いでしょうか？」

それに鳳統が反論する。

「いえ、江南の私達を寸断するには橋梁を破壊したり渡河点を確保した方が手硬いし楽ですよ。合肥を落としても精々、此方の戦力を誘致して後続戦力を遅滞させる程度の効果しかありません」

俺も場当たり過ぎて、孔明の罠だとは思わない。影に潜み謀略を巡らせる者が居るとは思えなかった。揚州残党の生存戦略にしては中途半端で、精々が嫌がらせて程度の効果しか無い。実体は張飛の武に注目して利用した小悪党による煽動ぐらいだろう。

俺は股肱(ここう)の臣である関羽に張飛討伐を命じた。

「張飛は幼い。それ故に周りの者に唆(そそのか)されたやもしれん。可能なら捕らえて来い。望むなら平凡な民として過ごさせてやろう。ただし周りの大人は殺せ。諌(いさ)める事もしない、ただの賊だ」

塵を処理する事に心は痛まないが、大人に利用された子供相手に無益な殺生をする事は俺達の好む所では無い。大人と違い子供は学習すれば更正させる事も出来る。

(劉備は駄目だったな……)

子供のまま大人に成るのは馬鹿と変わり無い。大人には責任も付随する。子供を導くのも大人の務めだ。

「お任せ下さい。綺麗に片付けて参ります」

関羽は兵を纏めると北に向かって行った。

こうも予定外の事ばかり起きると疲れる。心が休まる癒しが必要だと思う。

口の中であっさりと食べやすい小籠包を摘まみながら考える。最近、ストレスで食ってばかりだ。
とりあえず呉を平定したら大閘蟹（しゃんはいがに）を食べたい。目ぼしい美女も居ないし、やっぱり食うしか楽しみが無い。
何だか腹が減って来た。
（うーん……よし、行くか）
警戒を配置して斥候を周囲に出して休止をしてる間、庶民の服を着て一人で馬を走らせて街に入る。
護衛には周泰が付いてるから厳密には一人とは言えないが、解放感を満喫出来る。自然と笑いが出るな。
荊州から離れると風土や街並みも変わる。揚州には揚州の顔がある。
街の中では人通りがあり、馬も徐行して進んでいると幼子が前を歩いていた。
（親はどうした？）
注意して追い抜いたら鈍い音と衝撃を感じた。
まさか、と振り返ると子供が倒れており、周囲の者がちらほらと集まって来る。
咄嗟に、逃げ出す事も考えた。しかし人目がある。
（どうする俺？）
瞬間、煙幕が張られた。周泰の咄嗟の判断だ。
とんでもない事だが、俺は馬を走らせて街から逃げ出した。
（俺は悪くねえ。俺は悪くねえ。子供を管理しない親が悪いんだ！）
いかん。歴史を動かせる俺が下郎ごときの些細な事に心を奪われていた。ちょっと寄り道したのが間違いだった。
何だか疲れたが、また仕切り直しだ。
悠久の大義の為だ。それに相手は、まだ俺の民では無い。さくっと忘れる事にした。
揚州残党が天の御遣いを信じてるのかは知らないが、速やかに呉郡を平定して荊州に帰ろうと思った。軸はぶれない。
良いアシストをしてくれた周泰には後で褒美をやろう。

土地を失う諸葛亮は地元の名士や豪族の支持を失っていた。諸葛亮の撤退が擬態であっても、俺達は揚州の面を稼いでいたからだ。
負け戦を演じて敵を懐に率いれて潰すやり方はロシア人だけの家芸では無い。逃げる事に関しては中国の軍事史も中共軍の行った二万五千里長征、主導権を失った国民党の台湾への撤退以前にも色々と記録を残している。
三國志では北伐を繰り返し国力を衰退させた諸葛亮だが、守るべき蜀と言う重石がまだ今の彼女には無い。それならば泰緬孤軍の様に粘るかもしれない。
諸葛亮の位置を探るべく、今は斥候をもっと出す位しか出来なかった。
「鈴々は二度と裏切らない。約束するのだ」
俺の前に愁傷な態度で張飛が膝を屈していた。接収した館で、関羽に連行されて来た張飛と面通しをしていた。
「お前を信じよう。これからは愛紗を義姉として敬い従え」
俺は張飛の頭を撫でて桃饅頭を与えてやった。
「わかったのだ」
話を終えた俺は水でも飲もうと食堂に向かった。
「酷い行いですね」
鳳統と呂蒙が雑誌を覗いて顔をしかめていた。
「どうした？」
「馬がやって来て子供の首が折られたそうです」
心臓が鷲掴みにされた様に痛みを覚えた。
地域の情報誌で、俺が先日の事故で殺した子供の事を小さく取り扱っていたのだ。
「俺からの見舞いだ。その者の家族に望む物を与えてやれ」
「承知致しました。その様に手配致します」
二人は俺に敬意を表したが、これは犯した罪を表に出せない俺の謝罪の気持ちだ。
だが被害者の家族は犯人が俺だとは知らないので感謝する事に

成った。
貴人と平民は直接言葉を交わす事が少ない。機嫌を損ねれば一族皆殺しもあり得る時代だ。
内心の後ろめたさから施しをした俺の行為は、為政者からの温情と受け取られ、揚州での支持は鰻登りに上がった。
この間にも、汚い野心家の諸葛亮は天の御遣いの名を利用し腐っている。
支持者を失い補給が途絶え、兵を食わせる為に揚州の民から略奪を始めていたのだ。だから俺達が諸葛亮を排除し民を救うと喧伝した。
そしてうちに協力する者も多く、諸葛亮の所在が知らされた。
「会稽(かいけい)郡東部臨海の章安で諸葛亮の本陣を発見しました」
家臣を通して民の情報が届けられ照査した結果、斥候が本人を確認。万金に値する情報であった。
「揚州の民の漢に対する忠誠、しかと拝見したぞ。民の暮らしは、これからより良くして行こう。安堵致せ」
漢に忠を尽くす味方には十分な恩賞を与える。それが俺のやり方だ。揚州の民は俺に味方している。
反乱鎮圧(COIN)作戦と同様で民心を抑えた方が勝つ。
賊の討伐に於ける作戦では大量の兵力で包囲するのが楽だ。地元民兵による義勇兵が包囲の間隙を埋めてくれ後方警戒や輸送業務をこなしてくれた。兵馬の数に訴えるのは時と場合による。
俺は義勇兵と言っても、俺の民となる働き手を死なせる事が忍びない。口袋陣戦法を実施しながら、同時に金をやり敵を寝返らせて諸葛亮を襲わせた。
人の手配は甘寧に任せた。甘寧は寡黙で忠実な人物だが、若い頃は徒党を組んで乱暴狼藉を行っていた黒歴史があり、その頃の伝があった。だから無頼の輩を上手く扱う事が出来た。
「手段は問わないと言いたいが、暗殺を疑われる様な傷を残すな。毒も使うな」
人は寝る時、飯を食う時、排泄をしてる時、風呂に入ってる時は警戒が解けている。その中で、飯に毒を混ぜる方法は多用し過ぎると世

間の受けが悪い。だからそれだけ注文した。
結果は直ぐに出た。
「諸葛亮は溺死したとの事です」
仕事の報告が届いた。窒息と言う方法で事故に見せかけたと言う。
ブラボー、満足する結果だった。
この世の中は誘惑に満ちている。悪行に手を染めないように阿呆で間抜けな民を導いてやる者が必要だ。
不確定要素のチートキャラ、諸葛亮が排除された今、正道を進む俺達が負ける要素は無かった。
「奸賊に相応しい最後だ。地獄で鬼共を相手に遊んで貰うと良い」
動揺する敵に対して容赦はしない。味方には攻撃を命じた。
「我らは数多の賊軍を打ち破って来た精強たる荊州兵。敵は塵屑だ。一気呵成に押し潰し勝利を手に入れろ」
この場合は感情のままに戦わせる方が良い戦果を上げる。兵は将と違い、頭で考えずに感じるままに戦えば良い。勝ってる時はそれが力と成る。負けてる時は尚更、頭を使う必要が無い。そして数が増えるに連れて兵卒の激情が戦場を動かす。
「殺せ殺せ殺せ」
首魁を失った残党は簡単に撃滅され、1万程を斬首した。章安保衛戦は大屠殺事件として語られるが、揚州全体では6万も殺しては居ない。敵は漢に逆らう賊徒としてだけで、無差別に殺した訳ではない。
害虫を排除したし、これから揚州を建て直す事が出来るだろう。

5．劉琦様なぜなぜ戦争

5―1

「姫、今回の見合いの相手、何処が気に入ら無かったんですか。家柄だって悪くなかったと思いますけど」
「猪々子さん、それは相性ですわ」
　丞相として漢帝国で絶大な権勢を誇る袁紹ではあったが、全てが上手く行っていた訳では無い。
　鏡を見て袁紹は儚げに溜め息を吐いた。
「面倒ですわ……」
　袁紹は結婚適齢期の薹が立ってきている。それ故に家を継ぐ者を残す事は切迫した問題であった。
　一方で、家柄、容姿、財力の揃った彼女目当ての者も少なくは無かった。望めば相手には不十しない。
　しかし、これだと言う相手が居なかった。
「見合いなんて堅苦しいし疲れますよね」
「ええ。それに、私に釣り合わない方達ばかりで嫌になりますわ」
　そうぼやく袁紹の元に顔良がやって来た。
「あら、斗詩さん。どうかして」
　益州の劉焉から面談の申し入れがあった。
「私に何の用かしら」
　顔良は袁紹を心配した。
「麗羽様、気を付けて下さいね。相手は皇族なのですから」
「分かってますわ」
　劉焉は益州に合わせて交州の西半分を支配しており、現在、宗主の長老と言える存在だった。
　いかに官位は袁紹の方が上でも血筋には敵わない。劉焉が呼ぶ以上、応じるしか無かった。
　会談の場所は洛陽に代わって暫定的な都とされた長安。袁紹一行が到着した時は日が暮れており、深い闇に瘴気が漂っていた。
　劉焉は権力者である事を自覚していた。そして自らの望みは我慢

せずに全てを叶える。他者を利用してでも。
そして求めたのは妻としての袁紹である。
劉焉は正室の費氏を亡くしており、袁紹との縁組は自勢力を拡大し漢を安定させる事だった。
しかし袁紹は劉焉の求婚を受け入れなかった。
「御断りします。私は貴方の后には成りません」
劉焉は動じず、これまで胸に秘めていた大望を打ち明けた。
「余は何れ皇帝となる男だ。全ての敵を打ち払い漢を統一する」
劉焉は皇帝の権威が低下した事で世は乱れたと認識している。強い皇帝による統治は理想だが、現状では諸侯の力が強い。乱に乗じて諸侯の力を削ぐ事を実行していた。
「喜びも苦しみも共に分かち合うのが君臣と言う物で、漢をより良くする事が宗家の務めだ。そちも余に身も心も捧げられるは栄誉ぞ」
皇帝に成ると言う意味を袁紹は考えた。敵を打ち払うとは武を用いると言う意味だ。
そこまで考えて袁紹は問う。
「まさか貴方は、再び漢を乱そうと言うのですか」
曹操討伐後、曲なりにも漢は平穏と安寧を迎えつつある。しかし劉焉の言葉は皇帝の権威を否定する物だった。
「余は次の皇帝、海も山も人も漢の物は全ての皇帝の所有物。お前も余の物に成れ」
袁紹は突然、胸がざわめき自分の気持ちに気付いた。
そして胸が高鳴り、これまでに無かった熱い炎が心に沸き立った。
「切なく、苦しい気持ちに気付きました。富や名声、財も家柄も何も無くても私は愛する人と共に生きたいと思っています。ありのままの私自身を愛して下さる方です。だから私はあの方に振り向いて頂けるなら何でもしますわ」
ここが劉焉と会談の場である事を忘れ、愛する者を思い浮かべて袁紹は穏やかな笑みを浮かべていた。劉焉の好む淫猥とは程遠い、清らかなら表情だ。
袁紹の豹変に劉焉は訝しげな表情を浮かべた。相手は誰か問い質

すよりも、宗主である自分が相手にされないと言う事に理解も出来なかった。
「劉焉様、御断りする理由が他にもありました。大切な事に気付かせてくれてありがとうございます。此度はこれで失礼致します」
生きる目標を見付けて喜びを全身から表す袁紹は優雅に一礼をした。
「う、うむ」
確か自分は王朝の衰退による消滅を阻止する話をしていたはずだと劉焉は自問自答した。
会話が噛み合わない気持ち悪さを抱えたまま劉焉は袁紹を見送ってしまった。

俺は思慮が浅く迂闊な所が多い。運良く綱渡りが成功していただけだ。
その事に気付かされた。
「袁紹から宣戦布告？　誕生日の贈り物の返礼にしては、面白くない冗談だな」
周瑜が珍しく声を荒げた。
「それが問題なのです！」
呂蒙と陸遜に揚州の事後を託して荊州に戻った俺は、おっぱい達と戯れて骨休みを取るかなんて気楽に考えていた。しかし俺が帰る半日前に、袁紹から使者が訪れていた。
「最初は使者を歓待し劉琦様の帰りを待って頂こうと考えておりました。ですが、使者の態度は高圧的でした」
使者の言葉によると、俺が送った贈り物に毒物が混ぜられていた。それで二枚看板の文醜が重体の危篤状態に成ったそうだ。
「俺は知らん。必要なら暗殺だって躊躇しないが、まだ袁紹を潰す理由が無い」
「はい、承知しております。ですが交渉の余地は無く、向こうは聞く耳を持っておりませんでした」
しかし最悪だ。なんか訳の分からん濡れ衣で、漢の丞相を暗殺しよ

うとした謀叛人と判断されてしまった。
他人の思惑で踊らされるのは、気持ちが悪かった。吐き気を催す程にむかつく。
自業自得は俺がやった事に対して起きる事柄だから、俺は悪くねえ。
袁紹に言いたいのは、俺のこれまでを見ずに送り主と言うだけで犯人と決めつけるのか。国の政を司る立場なら罪状を明らかにすべきだ。俺を呼び出して問い質す事も出来ただろう。
あいつは何の為に生きて、何処に家臣や民を導きたいのだろうと思う。
「使者を出す前に中央軍事委員会が動いたのでしょう。組合からの報告も届いております。諸侯に討伐の触れが出され、益州の劉焉殿も呼応して動いており、連合軍が荊州の国境に集結しつつあります」
漢帝国の軍事を統括する中央軍事委員会主席は袁紹が務めている。袁紹の決断は漢が動くと言う事に直結している。
「おいおい」
何処の誰だか分からん奴の思惑に乗って踊らされるのは気にくわない。だけど覚悟を決める。攻めて来るなら戦ってやる。
降りかかる火の粉は打ち払うが、袁紹は面倒な相手だ。漢を相手にする事に成る。
全ての軍事行動には政治的な理由が存在する。
「総政治部主任の顔良殿は文醜殿の友人。友の復讐に燃えており、積極的な督戦を行っており敵の士気は高いと思われます」
政治工作と政戦工作を行う政治委員が諸侯の軍に派遣され、指導を行っているらしい。
俺は最終的に生き残る事が目的だ。いざとなれば荊州を棄てれば良い。過去の栄光すがり付いて逃げるタイミングを逃すのはただの馬鹿だ。損切りを行えば新しいチャンスはやって来る。
「連合軍は荊州と揚州から根こそぎ財を奪い尽くすでしょう。今度は我々が食われる番です！」
袁紹と劉焉の中間位置するうちは、至高存在に成りたがりな劉焉に

とって邪魔な存在だ。うちを攻め滅ぼせる機会があるなら絶対に諦めないだろう。
降伏は無意味だ。抵抗するか逃げるか。
この時代は対話より、戦う事でしか相互理解は得られない。弱いのが悪い。
「ふーん、まぁ、青くなるのは分かるが落ち着けよ。敵の侵攻はまだ始まっては居ないし、世の中には実現出来る事と出来ない事がある。先ずは出来る事から処理して行こう」
凶報ではあるが震撼する程でも無かった。
「別に連合軍相手に勝たなくても良い。負けないだけで十分だ。敵に厭戦気分を与えて撤退させれば、それだけで荊州を守る目的が達成出来る。やる事はいつもと変わらない。目の前の敵が何であれ撃退するぞ。俺は荊州と共にある！」
全員の目の色が変わった。既に賽子(さい)投げられた事を認識して、意識が切り替わったのだ。
俺は全般の指導方針を明示した。それに従って家臣達は活発な議論を始めた。

「劉琦様は袁紹殿の真名を預かっておられます。ここはその信頼を利用してはどうでしょうか」
周瑜は俺に提案する。
「俺の手紙を読まない程に怒っているか、謝罪して来るのを待ってるか。袁紹の考えは読めんが、やるだけの事はやっておくか」
「お願いします」
俺は筆まめな方では無いが、迎撃の時間稼ぎとして袁紹に文を送った。今回の件は誤解です。俺は貴女に害意はありませんよ、と言う内容だ。
総大将である袁紹の号令無くして諸侯が独断で動く事は無いだろう。独力でうちに喧嘩売って勝てる勢力は袁紹か劉焉しか居ない。後の有象無象では逆に潰されるだけだ。だから敵は連合を組んでいる。

うちはその間に、軍師達の立案した計画に従って諸将は兵を率いて散って行った。そうなると後は結果が出るまで俺は暇だ。閨で熱い行為を楽しんだ。

「真桜(まおう)、火薬の製作はどれだけ進んでるんだ？」

真名を呼ばれた女、李典(りてん)は快感の余韻で微かに身動(みじろ)ぎする。

寝所で荒い息を吐く俺達はハッスルした後だ。賢者タイムで頭も冴えている。

「まだあかん。書かれてる様に仕込みに時間がかかるわ。だから天然素材を探させて作ってるけど、量は足りへんで」

李典には鹵獲した天の知識が書かれた書簡を調べさせていた。

天の御遣いは火薬や肥料等の知識を有して普及させようとしていた。ただのガキなのにＷｉｋｉｐｅｄｉａなみの知識を持ってたらしい。俺も学生の頃は肥料爆弾を作ろうとした事があったけど、北郷の知識には負ける。

正々堂々と戦っていたら俺らは引き立て役だった。さくっとぶっ殺して良かった。

「仕方無いな。ある分だけで使える物を作ってくれ」

そう言うと俺は軽くくちづけをした。

「うん、分かった」

仕事の無茶振りだが、李典はくすりと笑って了承した。

硝石と硫黄と木炭による黒色火薬は、ＨＮＩＷと比べて訳の分からん化(ば)け学(がく)な工程は不要だからお手軽と言えた。要人暗殺の爆弾テロが出来る量を準備できれば、奥の手に使えるだろう。

天の御遣い様に感謝だな。

熱を帯び汗ばんだ李典の肌は艶(なまめ)かしい。彼女の瞳に視線を合わせた。

「あ、もう一回するん？」

唇を薄く開いて舌を見せ、欲情を感じさせる目で李典は俺を見返す。孕(はら)めば俺の子だ。責任を持って面倒は見る。

「お前さえ良ければな」

弛んだ精神には贅肉が付く。李典のおっぱいに顔を埋めながら、今

回の戦を機会に慎重に生きていこうと考えた。
とりあえずは李典を悦(よろこ)ばせるとしよう。これも忠勤する家臣への褒美だ。

うちは東西を敵に挟まれている。連合軍は同じ様に見えてもそれぞれ戦う理由は違う。そこが付け目だろう。
七年戦争のフレデリック大王は四面楚歌に近い状況だった。俺は当時のプロシアと比べればまだ楽な方で、敵との兵力差も少ない。敵を捕捉し壊滅的打撃を与えるチャンスもある。
「連合軍は兵力こそ多いですが長期戦は無理でしょう。飢饉や蝗害の後で、荊州からの食料輸入に頼っていた位です。兵站見積の結論では、長期戦になれば消費量から考えて敵の兵糧が持たないはずです」
鳳統は現状をそのように分析していた。
「だったら短期決戦を狙って来るな。此方としても兵力分散の愚を侵すよりは短期決戦で敵を撃破したい。やってやろうぜ」
多分、かなりの数を敵も味方も死なせる事に成るが、と付け加えた。鳳統は死傷者の数も想定に入れた上で頷く。
「平和の為の礎ですね」
俺は鳳統の頭を撫でながら答える。
「そんな大した心構えじゃない。俺の生きてる内は戦や他者の意思によって死にたくはない。俺は望むままに生きたい。死ぬなら老齢で人生を楽しんでからだ。そう言う事さ」
「劉琦様はそのままで良いと思います。そんな劉琦様が好きで私達は頑張りますから」
貴方の御側でずっと仕えさせて下さい、と言ってぎゅっと抱きついて来た鳳統にとりあえず、ありがとうと言っておいた。
現状、問題として二つの戦線を抱える形ではあるが、彼我の望ましい戦場でタンネンベルクの様に速やかに敵を撃破して西へ転戦させれば何とか成るだろうと俺は楽観視していた。
長江北岸に沿って白帝より前進して来た劉焉の益州兵は、俺の弟、劉琮(りゅうそう)の守る巫に向かってる。

今までやって来た賊討伐で、うちは劉焉と連携した軍事作戦を実施した経験が無い。だから向こうがどんな手で攻めて来るか分からない。

益州では俺らが曹操と戦ってる間に南蛮を平定して、南蛮人を家畜として食肉加工してると言う報告が入っていた。食料自給率の思い切った改善を劉焉はやった訳だ。同じ二足歩行生物なのに感心する。

その他にも色々と聞いている。劉焉は益州に赴任した時に地元の豪族、名士を呼び寄せた宴を開いたそうだ。でもそれは不穏分子を一掃する為の罠で、酒が入り良い感じで微酔いした所で途中で劉焉が離席し、屋敷を燃やし全員を殺したそうだ。

既存の常識に囚われない奴だから手の内が読めない。

とりあえずは関羽と張飛を付けてるから負ける事は無いと思う。糜竺（びじく）、糜芳（びほう）が脇を固めており、巫の防衛は十分だろう。

此方で袁紹の軍勢をある程度潰したら救援に向かう余裕が出来る。それまでは時間稼ぎをしてくれたら十分だ。

荊州北東でも動きがあった。劉焉よりも早く、袁紹軍は南陽郡、江夏郡に怒濤の如く侵攻を開始した。

鳥獣が一斉に逃げ出して来る。

「晩飯のおかずに良いな」

そう言う俺の目の前では、地平の彼方に居ても敵軍の戟が陽光を浴びて煌めいていた。

数の少ない国境守備兵は退かせ合流させていた。無駄に消耗させるのが阿呆らしいからだ。斥候には敵と接触を保持する様に命じている。

俺は呂布や関羽の武だけで勝てると思ってはいない。今回は正攻法の戦いだ。

砂塵を巻き上げて敵が前進して来る。敵は北方で育てられた騎兵を積極的に運用していた。

「やあああああ」

喚声をあげながら騎兵が威風堂々と突っ込んで来る。「あれは逢紀（ほうき）さんですね」と鳳統は解説をしてくれた。例え女でも将は将だ。

突進を図る敵に対して味方は錯雑地形を利用して展開している。盾を構えた味方歩兵は方陣を組んで騎兵の衝撃を吸収する。
俺の家臣には、俺の為に命を捨てられる者しかいらん。荊州以外の者が傷付く事に心を痛めるような考えも邪魔なだけだ。だから敵には遠慮をしない。
「袁家の弱兵に血の雨を降らせてやれ」
歩兵が戦列を組んで第一線の敵を食い止めている間に、後方の弓兵が援護射撃を開始した。弓兵にとってはルーチンワークだ。空中戦力が運用されない時代だから、空の脅威も無く楽な戦いだ。
騎兵が全力を引き出せるのは平地の戦いであり、我に有利な地形で第一波は阻止された。
だが袁紹には有能な側近が居る。戦闘状況を見て、迅速に第二波、第三波と到着する部隊を戦闘加入させ圧迫をして来る。
ぷんぷんと血の臭いが俺の場所まで漂って来る。これが真夏だと腐敗の進みも早いから不快指数も上がる所だが、まだ耐えられた。
荊州の民が怖れるのは袁紹か、劉焉か。そうでは無い。今の生活を失う事だ。
漢への忠誠心、愛国心があろうと、負ければ奪われ殺される。
それが分かっているからこそ郷土愛で荊州の民は戦う。
第一梯団は壊乱させて難無く撃退した。しかし袁紹軍の逢紀は「損害に構わず進め！」と檄を飛ばしていた。捕虜からの証言によると、本来、士気を鼓舞して督戦すべき政治将校が「士卒を消耗させるだけで危険だ」と闇雲な攻撃に反対意見を述べていたらしい。
袁紹軍は健闘したが、うちの兵は敵が再度の攻撃準備をしてる間に側翼を迂回して退路遮断を行うべく反攻を開始した。豫州侵攻だ。
戦争は決闘の儀式とは違う。勝ち負けが全てであり、手段は問わない。核兵器の発射ボタンがその場にあれば遠慮なく押しただろう。最後に此方が一人でも多く残れば良い。越境作戦もその一環だ。
攻撃を先導したのは甘寧の率いる尖兵で、抵抗らしい抵抗を受けずに汝南郡深くに進出した。俺は本陣で伝令から報告を受けながら黄忠の尻を撫でては叱られていた。

「包囲が形成されれば敵野戦軍主力に甚大な損害を与え、覆滅出来るでしょうね。あっ……ん……」
懲りずに尻を撫でると身をよじらせ、黄忠の青みを帯びた瞳が潤んで来ていた。その様子に俺は内心でニヤニヤしながら真面目な表情を作った。
「地形に頼って障害、隠掩蔽施設、偽陣地等の準備も忘れるなよ」
「あぁ……や、ん、はい……」
びくんと震える黄忠の息を吹きかけながら耳元に囁いた。噛みつきたく成る耳だが、そこは自重した。
「どうした、返事ははっきりしろ？」
「あ、劉琦……様……」
我ながらいけない癖だと思う。ついからかってしまう。すがる様な目が嗜虐心を擽るが、先ずは目の前の戦を片付ける事が最優先だ。俺が手を離すと黄忠は首をかしげた。
「続きは後でな」
抱き寄せて軽くくちづけをした。
「は……ぅ……」
息を乱し切なげな表情で黄忠は瞳を揺らせていた。
人身掌握術で、攻めた後は優しく接する。焦らしもその一つだ。
（出来れば国境付近で片をつけたいな）
殺される前に殺す。戦いの主導権を握ったら、決戦の意思を敵に強いる事が出来る。その為に敵の予期しない時期・場所に戦闘力を集中する。基礎中の基礎だ。
「劉琦様、予定通り予備陣地に戦線を縮小し引き続き防御を実施致します」
前に出ていた鳳統が戻って来て報告する。
「良いぞ。友軍相撃には注意しろ」
「はい」
鳳統から陣地転換の指示を将に伝えるべく伝令が出された。

5―2

その日、荊州に攻め込んだ袁紹軍先鋒は後手からの一撃と言う反攻を受けた。
袁紹の支配地域で、俺のシンパが民を煽動して蜂起させた。それと要人の襲撃、誘拐、脅迫も行った。袁紹は後方警備や治安維持に兵を割く事を強いられており、戦場で首級で戦功をあげなくても十分に役立ってくれている。
「家族や関係者を狙った方が、本人を狙うより効果が大きい様です」
陳珪（ちんけい）が報告して来た。
「ふーん。バラバラにして家に贈り付けるとかも試してみろよ」
陳珪は大人しい物で、最初の頃の余裕は消えており俺の前では借りて来た猫の様だ。
「承知しました」
越境した甘寧や徐晃達の支隊による遮断の効果も現れている。70余りの街や村を落とし、包囲が完成した。援軍の無いまま袁紹軍先鋒は孤立したのだ。
殲滅に移行した戦場で、俺は本陣を前進させた。
タフで頑丈な男を気取る積もりは無い。危険に身を曝す以前に、平和過ぎて飽きて来た。これも家臣が頑張ってくれているからだ。
もう後は任せて大丈夫だ。俺は鳳統とまったりと戦場での催し物を見ていた。
今回、うちの兵に略奪、凌辱、殺戮を許している。やられたら倍返しだからな。でもある程度、高位の者は捕らえるか、無理なら殺せと命じていた。人の価値は貴賤で決まる。これは戦場でも変わらない。
「袁紹の姿は無かったんだよな」
袁紹の性格に難はあるが、顔立ちは整っており肉付きの良い体もしている。周囲の注目を集めるには十分な容姿だ。しかし見当たらなかった。
「はい。漢の丞相とも成れば、戦は配下の将軍に任せ、片付いた後に後続を率いてゆっくりと来る予定だったのでは無いでしょうか」
鳳統のどこかおどおどとした態度も戦場では治っている。
ま、良いか。

どうやらここには居ないらしい。袁紹を捕らえてすっぽんぽんの裸に剥くのはお預けだ。
「成る程な」
老若男女を問わず武器を持ち向かって来るのは敵だ。投降して来る者も後で始末してやる。
「うちに喧嘩売って勝てる訳ねえだろう。身の程を弁えろ。ヴぁーか」
爆笑する俺の前で敵は殺されて行く。弱ければ死ぬのは当然だ。
地面は血で濡れていた。こう言う時こそ注意して歩くべきだ。
「ふぅ」
死臭が漂う。うわ、肉を踏んだ。ぷるぷるして人の脂が足下を滑らせる。
戦争の勝利は最高の宣伝材料と成る。だから死体の数は多い程、効果が高い。
「この死体、劉焉の所に送ってやったら感謝するかな」
食人を推奨する益州を考えたら効果はありそうだと思ったので、そのまま口にした。
「ええと……どうなんでしょう?」
俺の言葉に鳳統は目を泳がせる。
受けは良くなかったので、埋める方向で行く事にした。穴は生き残った敵に掘らせて、その後に掘った奴等を纏めて殺して一緒に埋める。地球に優しく生ゴミは処分だ。
「劉琦様、敵将馬休(ばきゅう)と馬鉄(ばてつ)が投降しました」
そこに周泰が報告する。
「あ、そう。そいつらは別枠だ。手荒に扱うなよ」
連合軍に参加した諸侯は漢の忠臣として丞相である袁紹に従っている。馬騰は病を煩っているらしく、一族の者を代わりに送り出していた。
二人は華奢な体の割には武の腕っぷしも悪く無かった。
(だけど勝ったの俺さ)
馬一族の姉妹を一組、馬騰と交渉する切り札として手に入れた訳

だ。
何か気を効かせた女官に湯浴みさせられた二人が俺の天幕に連れて来られた。
「馬休と馬鉄だな。俺の事は気軽に劉琦様と呼んでくれて良いぞ」
馬休は潔(いさぎよ)く膝を屈した。
「荊州兵の錬度、将の指揮、軍師の策、凄すぎです！　今回は負けましたから大人しくしますよ」
一方、馬鉄は面倒臭かった。
「蒼(そう)に無理やりあんな事やそんな事をしちゃうんでしょ！　この鬼畜！」
投降して来た割に態度がでかい。馬休がその隣でおろおろしていた。
「馬休」
俺に声をかけられてビクッと反応した馬休に告げる。
「妹の面倒は見てやれ。それとお前らは美しいが、馬騰との交渉材料だから殺したり体を穢(けが)す予定は無い。安心しろ」
女は心が清らかなら体が穢れていても受け入れられると言うが、やっぱり他人に穢された物は受け入れ難い。それを考えると綺麗なまま返してやる意味は大きい。
美しいと言われたのが嬉しいのか一瞬、笑顔を浮かべたが、真面目な顔を作り頷いた。

此度の戦で戦功をあげた将士に白金５０両を与えた。有功不賞は不満が溜まるからな。すぐに褒めないと意味が無い。
「漢升、行こうか」
やる事はやったので、黄忠を天幕に連れ込んでハッスルしようとした。急用以外で取り次ぐなと告げて人払いをした。
黄忠を抱き寄せて手を握った。黄忠の手は弓を扱う事で硬くなっているが嫌いでは無い。これは俺の為に敵を倒す手だからな。
「ん……」
先ずは軽くくちづけを交わす。雰囲気は大切だからな。

唇が離れると黄忠の熱い吐息を感じた。そのまま内腿に手を伸ばし撫であげる。
「あ……んん……っ！」
敏感な部分は焦らすように避けて刺激を与えると反応が面白い。
内心、ニヤニヤしながら俺は酒と食い物で鋭気を養い、さあ、これからだと言う時に邪魔が入った。
揚州を任せていた呂蒙からの伝令で、荊州の応援に向かおうとしたら、交州から流民が流れて来たそうだ。
「さくっと殺せば良いじゃないか？」
豊かな生活を求めて来るのは良いが、流民と言う禿鷹は社会の膿だ。いつも殺して追い返している。
規則通りに対処すれば良いし、そんな事で俺を煩わすなと思った。
「流民は劉焉軍に追い立てられているとの事です」
「ふーん」
劉焉は無駄な事をしない。揚州の友軍を拘束する積もりか。
黄忠に視線を向けると困った様に微笑む。
（またお預けだな）
無知こそ最強の選択肢だ。無知であれば責任も負わず悩む事も無かった。俺ってそれなりに学と才能があるから頼られるし、呂蒙への指示を考える事にした。
この戦に勝ったら益州は誰かまともそうな奴を傀儡にして統治させよう。俺は領土はこれ以上、いらないから。劉焉に愚民は開発事業で使い潰してやる。
（揚州に応援は要らないだろう。必要だとしたら、対劉焉の主戦線である巫の方だな。でも使える兵を巫に投入したら、向こうで拘束されてしまう）
劉焉への対策を考えていて、相手に主導権を取られるのは癪にさわった。ムカつくからぶっ飛ばしてやる事にした。その瞬間、荊州の防衛で越境作戦と言う枷が外れた。
俺は漢を敵に回した。俺の家臣は、土匪集団として見られるにはそこらの賊と錬度も違う。

運命とは皮肉な物だ。興味と関心が均衡を崩す。今を生きる事に貪欲だからこそ、無関心、他人事の意識が荊州と言う箱庭の世界を守る事に繋がる。

まぁ荊州は地政学上で言うハートランドだし、仕方無いな。

「待たせたな。出番だ」

俺は陳宮を呼び寄せた。こいつは呂布に心酔し呂布に忠を尽くす軍師だ。

「呂布を使え。成都を落として来い」

俺の言葉に陳宮は目を見開いた。呂布の武を天下に知らしめる事は陳宮の望む所だ。

呂布は稼働性の高い将で八面六臂の活躍を期待出来る。軍師としては腕のふるい所だろう。

陳宮は頬が紅潮していた。

幼い容姿に似つかわしくない好戦的で獰猛な笑みを浮かべた。

呂布をアサインした後は適当に配分しても、陳宮はやり遂げるだろう。知識は人を豊かにする。軍師の本質は戦いが好きで、気分が良くても悪くても知識を活かせる。その頭脳（サポート）は俺にとって必要不可欠だ。

「北ですか、それとも南ですか」

ゴールは成都だが、漢水より漢中に進むルートと、長江から⊠（そうか）?に進むルートのどちらを選ぶかと言う事だ。

「漢中には馬騰の兵が出て来ている。南鄭（なんてい）に詰めているが、馬休と馬鉄を使えば降せるだろう」

うんうんと陳宮は頷いた。

呂布の慣用戦法は、友軍の援護下にまず呂布が切っ先と成って打撃を加える。どの戦場でも、この一撃を食い止められないから敵対した者は崩れて行く。

「御意。天蕩山（てんとうざん）から米倉山（べいそうざん）の線を抜けば、前衛は戦果を拡充し要点である陽平関（ようへいかん）と開城を確保して後は南に下るだけ。劉焉の息の根を止め益州を平らげれますな」

「その辺りは上手くやれ」

さして興味は無いが、家臣や民が夢を見るのは許している。

陳宮は頬を染めて呂布の下へ駆け出した。やる気十分だな。

この時代に生きる者は、奉仕する事が名誉と言う奴隷根性が染み付いていた。それは俺としても利用出来るから良しとしよう。

しかし政権交代の時期はやって来る。漢帝国と言う古い秩序によって作られた世界は自壊しつつあった。だが、この戦況は好転するだろう。何故なら荊州は不滅であるからだ。たとえ劉焉や袁紹が勝つように見えても、最後に生き残る勝者は荊州(うち)だ。

揚州は呂蒙が守り、巫は関羽が守っている。漢中から成都を打通する仕事は呂布に任せた。俺は袁紹に専念出来る。荊州にとって真に必要なのは安寧であり、無能な皇帝や才能しか愛さない君主では無い。荊州の民を脅かす豚共はこの機会に屠殺するしかない。

千年帝国は無理でも、全てを淘汰した先に百年の平和を約束出来る。

袁紹の地盤である冀州で民を煽動して暴れさせながら、渤海までの長距離機動作戦を計画した。家臣連中は俺が天下を取る気に成ったのかと色めき立ったが勘違いも甚だしい。

家の境界に雑草が生えすぎてるので引っこ抜くだけだ。掃除が終われば荊州に引っ込む。

「錯雑した丘陵、屹立した山では地形の特性から小規模な部隊しか配置されていないでしょう。問題は開闊した平地です」

警戒部隊は当然、存在するだろうが簡単に排除出来る。

「大規模な敵と遭遇する可能性が高まるな」

鳳統は頷き答える。

「はい。擾乱状態で敵を拘束したとは言え、まだかなりの兵が残っている物と考えられます。我の攻撃、前進を偽装、欺瞞致しますがどこまで欺けるかは難しいと思います」

荊州以外で沢山死ぬが、得れる物の方が大きい。成功すれば袁紹の息の根を完全に止める事に成るだろう。

「魏郡までは遠いな。だが必ず⊠(ぎょう)を落とし、袁紹を捕らえろ」

鳳統は恭しく礼をすると、俺の指示を実現べく動き出した。

うちの対外防諜機関である安全部第四局を任せている程普(ていふ)から報告が入って来た。安全部は荊州の治安維持を司る部署で治安部隊も統括していたが、職務の性質上、敵対勢力に密偵(スパイ)を送り込んだりしてる内に、情報の収集・分析能力が向上していた。

呂布は五万の兵を率いて進軍したが、進む先の定軍山に、連合軍の馬超が五千の兵を率いて伏せていたのだ。

組合とシンパの情報は頼りになるが密偵も良い仕事をしている。

「馬超は面白いですよ。馬には虎の皮で覆い偽装すると言う念の入れ様ですね。敵の策は、成都から厳顔(げんがん)の率いる援軍が迂回して呂布軍の左側面を突き、馬超の伏兵が退路を遮断する物で、策を立てたのは元曹操の軍師の一人でした程昱(ていいく)と言う者ですわ」

曹操の軍師だとすると、奴のお眼鏡にかなった者だ。相当に頭が切れるはずだ。

「陳宮には伝えたか」

おっぱいは何物にも勝る宝だが、程普の胸では無く顔に視線を固定して確認を取る。

陳宮を甘やかしてる訳ではない。前線の部隊と情報の共有化は、荊州防衛の目的達成に不可欠だからだ。

「勿論です。可愛いねねちゃんは頼りになりますし、後は任せて大丈夫ですよ」

そして陳宮は期待に応えてくれた。凡人ではなく天下無双の呂布が居るのだ。一人の武は練られた策を容易に噛み千切ってしまう。いつの時代も情報を制する事は大切だな。

定軍山を急襲した呂布は馬超を天蕩山に追い払った。策を見破られ、再攻勢を企図する馬超の下へ陳宮からの使者が訪れた。捕虜の解放と停戦の打診であった。

同じ馬一族の馬休と馬鉄を捕らえても辱しめを与えず、交渉の材料とした事は正解だった。この恩情を受けて馬超は兵を引いた。

俺は敵対する者にも機会と慈悲を与えている。これも相手次第だ。誇るが良い。俺から慈悲を勝ち得たのだから。

孫権が黄蓋、周瑜、陸遜らと兵を率いて此方に合流した。袁紹も劉焉も潰すと決めた以上は遠慮をしない。
「孫仲謀、俺は此度の戦で袁家は滅ぼす。お前には期待している。お前達の暮らしを奪った袁家に借りを返してやれ」
天幕の中には俺と孫権の二人しか居ない。到着の報告に来た孫権の服をゆっくり脱がしながら、俺は柔らかなおっぱいを楽しむ。
「戦の前に楽しい事しようぜ。良いよな？」
唇を重ねると孫権は顔を赤らめ潤んだ瞳で俺を見返し誘惑するので行為を続ける。
「ん……、あ……！」
孫権の太腿を撫でていると、鳳統が報告に入って来た。
「劉琦様、予定されていた全ての準備が完了致しました」
「おうよ」
孫権はパッと俺の背中に隠れて、たくしあげた服を直していた。
（早いな）
家臣には話しても意味が通じないだろう。俺にとってこの世はゲームと同じだ。
統治者の責任さえなければ、支配地域が広がるシミュレーションゲームと同じで面白い。
こんなに戦争が楽しいとはな。憎悪は無いが、奪い、殺し合う理由には十分だ。
俺は鳳統、孫権を伴って天幕を出た。配下の主だった諸将、軍師が集まっている。
「戦国の時代、趙の将軍、廉頗（れんぱ）は楽乗（がくじょう）を撃破して己こそ将軍に相応しいと証明したが、趙を捨て魏に亡命した。孝成（こうせい）王に忠を尽くした廉頗にとって、悼襄（とうじょう）王は忠に値しなかったと言う事だろう。お前らはどうだ。荊州の者であると、証明出来るか？　他所に負けない活気で、自分の夢が実現出来るのは荊州だけだ。気を抜くな。余所者の侵略を決して許すな！　我らが荊州を守るのだ！　荊州の安全・安心を脅かした袁紹を討て。漢帝国万歳、荊州に栄光あれ！」
俺に鼓舞された荊州の兵は司隷を経由して冀（き）州に向かう。全ての

道がローマに続く様に、漢では洛陽に向けて道が整備されていた。街道を通り、冀州に向かう。
「袁紹軍は黄河を渡り白馬(はくば)に集結、烏巣(うそう)を指向して前進中です」
「あ、そう」
偵察に出した斥候班から随時、報告が入る。袁紹の動きは筒抜けだった。
情報は扱う側次第と言うが俺の家臣は役立てている。豊かなおっぱいが盛り上がり自己主張する周瑜が進言して来た。
「敵が向こうから来てくれると言うなら、それも良いでしょう。官渡で袁紹軍を迎え撃ちましょう」
大人の魅力か。ナイスおっぱい。周瑜は周瑜で、孫権とは違った魅力だ。
んな事を考えているからか、孫権から冷たい視線を感じた。あ、周瑜のおっぱいを見すぎたか。
「あー。うん、良きに計らえ」
俺は名将では無い。アイデアも浮かばないし、餅は餅屋と言うから、官渡会戦を構想した更改作戦計画第一案の作成をこいつらに任せた。
「私は孫家の軍師で、荊州では新参者に部類される。だが荊州での暮らしを守りたいと言う気持ちは皆と同じだ」
周瑜は俺に一礼すると、自らの思いや構想を口にした。いつもの素っ気無さとは違う熱の入れようだ。
「袁紹軍は、劉焉軍による西部方面の攻勢のいかんにかかわらず、反攻を予定している。官渡会戦の正否は、我が荊州防衛に大きな影響を与える。聖戦完遂の為に、敵の反攻に対して敵戦力を極力撃破し以てその企図を破摧衰亡(はさいすいぼう)を期す物であると心して欲しい」
俺を周瑜が信じているのかは知らないが、荊州を守りたいと言うのは本当だった。ああ、人の思いと言うのは口にしないと、やっぱり分からないな。
周瑜は意気軒昂な他の軍師等を巻き込んで、遭遇的会戦生起をも予想した万全の作戦計画として更改し始めた。

俺の背中に孫権が胸を押しつけて来た。性的な意味ではない。
彼女の鼓動と体温が俺に安心感を与える。彼女から愛されている事は分かっていた。
（家族を奪ったのに、ここまで懐かれるとは意外だ）
このひたむきな愛情は救いだった。
（そうだな。孫権の信じる周瑜を、俺は能力的に信じている）
人生は短い。武名や智謀に拘るのも些細な事だ。まあ、頭の賢い連中は俺の分も頑張ってくれ。

5―3
やっぱり戦は有能な将と軍師で行う物で、兵は駒に徹しないと出来ない。
対袁紹の作戦計画として、我が軍は速やかに官渡での作戦準備を整えて、来攻する敵野戦軍主力を撃破し、荊州以北の要域を確保する方針である。
「敵前衛は主力の為に、要点である原武（げんぶ）、陽武（ようぶ）を占領すると考えられます。これを阻止するよりは、敵に確保させて官渡まで来て貰おうと思います」
指導要領として敵の輸送、移動を妨害し、敵の企図に備えつつ、会戦準備を促進した。
その第一段階として、橋梁を破壊し敵の移動経路を限定する為に、黄蓋と周瑜が支隊を指揮して出発して行った。
「流動的に防御し、機を見て打撃するのはいつも通りだな」
戦闘の原則なんて大して変わり無い。軍隊の展開及び軍需の集積を迅速的に、あとは確りとやって貰う事だ。
それよりも、大きな戦を前に気が昂る。
やっぱり種としての生存本能が子孫を残せと言ってるのだろうか？
官渡に布陣した俺は、鳳統を後ろから抱き締めて小振りなおっぱいを揉んでいた。小さなおっぱいは心の余裕すら無くしてしまう。だから俺は戦を前に緊張から解そうと揉んでやっていたのだ。

「んっ！」
ビクッと震え小さく声を洩らす鳳統の太股の内側に手を伸ばしてみた。
「ほほう」
柔らかな布地は下着だ。指先に湿り気を感じた俺はニヤリと笑う。おっぱいは小さくても色々と楽しめそうだ。
「ん――――っ」
鳳統の声に孫権が振り返った。
「どうかしたの？」
赤らんだ顔を大きな帽子で隠した鳳統を訝しげに見て孫権が訊いて来た。
「軍師は頭を使う。戦を前に考え過ぎで疲れたみたいだな」
「無理をさせたら駄目よ」
そう言うと孫権は前を向く前に、形の良い眉を歪めて、本当は全部お見通しだ！　と言いたげに睨んで俺にプレッシャーをかけて来た。
「ああ、そうだな」と言い訳せずに肯定だけしておいた。
鳳統が俺に顔を近付けて囁く。
「り、劉琦様は、私を御所望でしょうか？」
恥ずかしそうだが、どこか期待した表情を見せる鳳統。
しかし荀彧に比べても幼い体では気持ちいい遊びが出来るとは思えなかった。
鳳統の瞳を見ると、ごめん、やっぱり無しでとは言えなかった。
「邪魔が入ると嫌だろ？　先に戦を終わらせよう」
鳳統はこくんと頷いて笑うが、孫権を気にして真面目な顔に戻った。純粋な好意を向けられて居たたまれなく成る。内心で悪戯も時と場所を考えらるべきだと反省した。
俺が駄弁っていた翌日、袁紹軍は原武、陽武を確保すると共に、船を調達して官渡に一挙に突進し得る布石を得た。此方のやる事は変わっていない。官渡を絶対国防圏みたいな感じで極力確保して反撃する構想だ。味方の士気は旺盛であった。
死ぬ時は道連れが多い程良い。仲間が居れば寂しくは無いだろう。

「敵の斥候が警戒線に接触しました。魏延隊が応戦中です」
「深追いはしないように伝えて下さい」
ここで芋を引くぐらいなら初めから戦争をしていない。敵を地獄に叩き込むべく、鳳統の指示を受けて伝令が走る。
勝つまで、殺人や陰謀と無縁の平穏な生活は遠い。命を狙われる以上、今は後戻りも出来ない。
袁紹と劉焉どちらも倒さねば幸せな生活を奪われる。始末しない限り荊州に平穏は来ない。面倒くせえ。
しばらくすると斥候を撃破したと報告が入った。小さな勝利だが、味方の士気を上げるには効果的だ。
暇潰しで、前線に出て視察をしてみると、随分と元気が良い声が聴こえてきた。
「くひ……ひひひひっ。お前の仲間も惨めったらしく死んだぞ。散々、暴れた罰が下ったんだ」
視線を向けると兵卒が輪になっており、中心で汚いケツを振ってる姿が見えた。
子作りは家だけでやるもんじゃないらしく、兵が捕虜の女で遊んでいる。
「ぎゃぁぁぁぁっ！　んひーっ！」
押さえ付けられて、叫んでいる。
(あれって違う穴か？　俺の趣味とは違うけど、ま……まぁ、痛みこそ生きてる証だ)
戦で仲間を失ったらどんな方法で復讐するか。女なら自尊心を砕く。男はその為の道具を持っている。野獣の様な原始的本能と狂暴性だ。
好みの女の子だったら助けたが、そこらの醜女や愚民を助けはしない。関わり合いになるのは御免だ。
「やめて、痛い痛い痛い！」
「クソッ！　クソオオオッ！　ミンナミンナシネ！」
仲間も取り押さえられており絶叫していた。

「喚くな。楽しませてくれよ」
そう言いながら男は女の顔を舌で舐めていた。うーわ、汚ねえな。
命を燃やして戦った結果、敗者を生殺与奪する権利は勝者にある。戦場のルールだ。
「お前ら、ほどほどにしておけよ」
俺に気づいた兵は慌てて礼をする。下半身で考えながらも、仕える主君への対応は弁えている。
勝利の宴は派手にやった様だ。四肢の欠損した死体に混ざって、虫の息な負傷者が周囲に取り残されていた。
一人に近寄ってみた。
「殺して……殺して……」
皮を剥がれ内臓をえぐり取られている。情報を引き出す為の尋問か憂さ晴らしかは知らん。
人の生命力の凄さと、そいつへの憐れみを感じた。
「劉琦様？」
剣を抜いた俺に護衛の者が声をかけてくる。俺は負傷兵に止めを刺してやった。
人は何れ死ぬ。
始皇帝は不老不死の妙薬を求めたらしいが、俺に言わせれば阿呆じゃないかと思う。
今を生きて楽しんで死ぬのが人だ。若返りなら良いが、末期癌とか難病の延命も苦痛を引き延ばすだけだ。死ぬ事で楽になれる事もある。『今この時』を先延ばししようと思うから、無駄に苦しむんだよ。
だから俺の時には楽に死にたい。他者に対しても同様の対応だ。
必要な時は目をえぐり取ったり鼻や耳を削いだり、ありとあらゆる責め苦を与えて、幾らでも残虐な行いもするが、基本的には敵も同じで殺してやる。それが為政者としての配慮だ。

6．劉琦様ウソとホントのはらのうち

6―1

烏巣を仮の本陣とした袁紹は現状報告と行動計画の確認が行われていた。広い国で隠れようと思えば何処にでも隠れられるが、劉琦は対決の姿勢を選んだ。ならば叩き潰し屈服させるしか無かった。

攻城兵器の準備、集積も進んでいる。兵は将を信じ、将は主君を信じ戦いに往く。

「前衛は予定通りに要点を確保、官渡に斥候を送りましたが、敵の頑強な抵抗により破れました」

田豊（でんほう）は袁家の筆頭軍師として袁紹の王道を支えている。袁紹は田豊を信頼し、互いに真名を預け合っていた。

「仕方無いですわ。荊州兵はただの賊徒と違い、官軍として戦慣れをしてますもの」

主が華麗な戦と政に拘るなら、裏の汚れ事を背負うのも臣下の務めと田豊は精力的に役目に励んだ。

「官渡の城を攻め落とし劉琦を討ち取る事は麗羽様もご待望の事と思います。しかし城攻めは不要、押さえの兵を残して荊州を平らげてしまえば、いかに野心溢れる劉焉と言えども袁家の威を知る事と成りましょう」

田豊が敬愛するのは主君袁紹のみ。

荊州との戦が終われば袁家の天下が目前に迫っていた。それを阻む強敵として漢に残る勢力は益州の劉焉だけと成る。

「真直（まぁち）さん、劉琦様を敬称無しでお呼びする事は許しません」

田豊の真名を呼び叱責する袁紹であったが、田豊から見て、連合軍の同盟者である劉焉よりも敵である劉琦を敬う主君が理解出来なかった。

「は、はい」

「それにあの方を正々堂々と撃ち破ってこそ勝ったと言えます」

袁紹にとってそれは守らねばならない矜持だった。だが劉琦が袁紹の言葉を聞けば、矜持など腹の足しには成らず、犬にでも喰わせて

しまえと言う所だった。
翌日、黄河の支流が形成する湿地帯を抜けて袁紹軍は官渡城を囲んだが、準備万端の荊州兵を相手にかなりの死傷者を出していた。
田豊としては不満だった。後退して来た者は軍令によって懲罰部隊に組み込み、最前線に逆戻りさせた。昼夜を問わず攻め続けさせる力業だった。
田豊は今後を考えて袁家譜代の家臣は極力温存し、連合軍の淳于瓊（じゅんうけい）や懲罰部隊を攻撃に使った。
「まったく、麗羽様の華麗な戦に水を差すとは愚かな連中ですね。それはそうとして……」
田豊は後退する味方を見て表情に怒りを浮かべた。
「沮授（そじゅ）さんも使えない塵屑だったと言う訳ですか」
帰還した沮授は、初戦の敗戦で士気を下げたと罪を問われ衆人環視の中で叱責された。
「敗戦の原因究明は簡単です。指揮官の戦意不足です。――それに私は貴方が信用出来ません。貴方は今回の戦にも反対していました。荊州に知己が多いそうですが、本当は負ける約束でもしてたんじゃないですか？」
沮授は田豊の嫌みに反論した。
「今の時代、親族係累、友人が敵味方に別れて戦う事は珍しく無い。だが貴殿は、かつての友であったと言うだけでも、本初様へ二心ありとして罪を裁くのだろう。貴殿の気にくわなければ処罰対象じゃないのか？　そうして、誰も彼もが処罰対象にするのだろう」
田豊は口角を釣り上げた。中央規律検査委員会を統べる彼女は粛清を行う権限があった。
「言いたい事はそれだけですか？　遂に馬脚を現しましたね。我が軍の戦意を低下させる積もりでしょうが、そうは行きません。貴方を本初様への反逆の罪で処刑します」
田豊へ一極集中した権限。袁紹軍の致命傷と言える問題だった。
張⊠（ちょうこう）は沮授を同輩として尊敬していた。「気を付けろ。お前達も殺されるぞ」と叫びながら首を跳ねられた。

沮授の薫陶を受けた者達は、田豊に処断される様を見て反旗を翻す事を決意した。不正蓄財、規律違反等幾らでも罪は用意出来る。これは権力闘争だった。
「お前達の前に居るのは敵だ。裏切るのは我々ではない。裏切ったのは彼女達だ！」
張⊠（ちょうこう）の兵が本陣を制圧するまで時間はかからなかった。拘束された田豊は行きなりの暴挙に頭が働かなかった。
「ちょ、ちょっと何考えてるのですか！　まさか、貴方まで敵に通じてたとでも言うのですか！」
田豊は最後の瞬間まで張⊠が剣を向けて来た理由が分からなかった。
「裏切る？　違いますよ、剣を向けさせたのは貴女です。本初様に忠を尽くすのは家臣として当然。ですが、その為に沮授殿を貶めた貴女を許せない。死ねイ！　この糞牝犬！」
張⊠（ちょうこう）は本気だ。怨嗟を込めた瞳を見て、田豊は自分の死期を悟った。

貧乏人は脳へ栄養が足りて無いから馬鹿な言動をする。俺は兵にたっぷり食わせてやる。だから良い働きを見せてくれる。
江東の二喬（にきょう）と呼ばれる美女が袁紹の下で勤めていると言う情報を得ていた。孫家討伐の後で拾われたらしい。
見目麗しい者は生かしたまま捕らえろと命じていた俺は、捕虜のリストから二人の名前を見て呼び出した。
「放して！」
俺も聖人君子では無い。良い女が居れば抱きたいと思う。
兵に連行されて来た姉妹の容姿を見る。
「ふーん」
怯える二人を眺める。確かに可愛い容姿をしているが、年齢的にはまだ幼いと言った所だ。俺は小児性愛者（ペドフィリア）と違うが、たまにはお茶漬けも食べたくなる。
酒の酌をさせながら大喬（だいきょう）の手を握るとビクッと体を震わせた。む

ふふ。
「それで——」
　耳朶をくすぐる様に話しかけると拒絶された。話を広げ様と思っていたのに食いついて来ないな。
「嫌っ」
　おっと、逃げようとして大喬が倒れた。
「お姉ちゃんっ！」
　小喬が叫んで、助け起こそうとしたその時、俺の目にあり得ない物が見えた。
「凄く……大きいです——って、な、何だお前は！」
　怒鳴り声をあげるたのも仕方がないと思う。だって、大喬の股間の間には顔に似合わず極太なビッグマグナムがそびえ立っていた。俺はノンケだからそっちの趣味は無い。
（キモいキモいキモいキモいキモいキモいキモいキモいキモいキモいキモいキモいキモいイモムシゴーロゴローキモいキモいキモいキモいキモいキモいキモいキモいキモいキモい）
　俺は性差別者かもしれない。肌の色は気にしないが、同性愛者や女装の男の娘と言った非生産的な者は排除する。彼らは神の創造物とは違う。だから自然界に存在出来ない。
　劣等種が種を残さないのは自然の摂理だろう。隠してる分は良いが、害悪を撒き散らして広めようとするなら危険因子だ。
同じ様に、浮浪者も流民もヒッピーも難民も生きるに値しないから排除する。荊州は我らが安息の地、余所者は不要だ。最終的解決手段を選択した俺は悪くねえ。
　俺の思考は嫌悪感と憎悪で一杯になった。不要どころか有害な塵は排除するしか無い。
「劉琦様、如何されましたか！」
　俺の声を聴いて護衛の兵が天幕に駆け込んで来た。
「こいつは穢れている！　俺を騙して取り入ろうとした敵の間者だ。生まれた事を後悔させてやってから首を跳ねろ」
　俺は生理的に気持ち悪い大喬の始末をさせた。

豚の様に悲鳴をあげて姉の亡骸に取りすがる妹は取り押さえられた。その様子を見ながら考えた。
（おお、そうだ。こいつは兵の慰み者として使い道があるな。よし、生かしてやろう）
俺の慈悲深さが兵の忠誠を高めるのは間違いない。
それにしても、大喬は遺伝的にも劣等人種だったのだろう。殺さない理由は存在しない。だから死んで当然だ。死体が運び出され天幕が清掃される間、俺は気分転換に孫権の天幕でイチャイチャするかと足を向けた。
着てる物を完全に脱がせるより、着崩してる方がエロさを感じる。すっぽんぽんは情緒が無い。そう言った需要で発展した会社だって世の中にはある。でも愛の無い犯罪はいかん。
ちゅっちゅっしてると、火急の知らせがやって来た。邪魔をされて、むくれた孫権を宥め俺は話を聞いた。
「冀（き）州革命評議会より報告です」
革命なんたらと言う組織は袁家の支配地に潜伏させていた俺のシンパだ。今回の戦にも袁紹軍の一員としてシンパ達が冀（き）州を離れて参加している。
国を守るのは郷土愛や家族愛、色々と理由がある。俺はゆっくりした場所（Place）を守るべく民に夢を与え、連中の生きる活力となった。それは敵勢力にも広まりシンパを増やした。
歴史上、人を動かす事が上手い者は、漢を築いた劉邦（りゅうほう）、この前ぶっ殺した曹操、王元姫の旦那である司馬昭、宋の趙匡胤（ちょうきょういん）とか太祖って呼ばれる連中が色々と居るけど皆傑物だ。そいつらは民を導き国家を築き上げた。
一方で、今回の戦で度重なる袁紹軍の敗北は、敵に厭戦気分を与え、袁家内部で袁紹の影響力を低下させた。袁家を守らない家長は不要な存在だと。そこで俺のシンパが役に立った。
「袁紹軍で内紛が発生しました。同志の張⊠（ちょうこう）将軍が袁紹殿の身柄を確保致したとの事です」
君主は家臣を信用しても信頼してはならない。頼ればその者に傾

倒して、目を曇らせるからだ。
「ふふん、根性無しで頭空っぽの馬鹿野郎どもは、どたまに一撃で決まりだな」
俺のシンパが扇動し、軍事政変(クーデター)を起こして首脳の首を刈り取った。動員された兵力は3，000人程だが、本陣で一網打尽だった。司令塔である本陣を制圧した後は、速やかに要所の制圧と粛清が行われたと言う。
他の主だった将や軍師は『自由に殺してください』とプラカードを首からぶら下げて、戦死者の家族の中に放り出されたそうだ。凄絶なリンチを受けたらしい。
これで袁家は骨抜きだ。残った袁紹の支配地は無法地域と成る。精々、袁家内部の権力争いに勤(いそ)しんで貰おう。
頑張って袁紹軍を破る計画を立てていた周瑜は涙目だろうが、戦場以外で勝負がつくと言う経験には成っただろう。
俺は袁紹の顔を見る事にした。
厳重な監視に囲まれた天幕の中、寝台に横たわるのは袁紹だ。袁紹の拘束はしていない。
「おお、大変でしたね、本初殿」
敗北によって虜囚となったが袁紹は、袁家の軛(くびき)から解き放たれ、精神的ブレイクスルーを得る事が出来た。これこそが袁紹にとっても財産と言えるだろう。
「劉琦様、貴方には私の真名を預けましたわ」
俺は部下を外に下がらせて二人っきりに成った。
「俺はまだ貴女の真名を呼んでも良いのですか？」
起き上がった袁紹の傍らに俺は腰かける。害される恐れは無かった。勝者の余裕だ。
「故(ゆえ)あって敵味方と別れても、真名を預けた事に後悔はありません」
頬を染める袁紹が可愛く見えた。俺が顔を近付けると、袁紹は自然と受け入れた。
「んっ……」
くちづけをした。閉じられた瞳の睫毛が震えている。

「ふぁ……あ……」
唇を離すと名残惜しそうな声を漏らした。これって抱いてもOKって事かな？
袁紹を優しく抱き寄せた。
「はぁ……。劉琦様は、私を必要としてくれますの？」
目をとろんと潤ませて体を預けて来たので遠慮無くまさぐった。
（愛情に飢えているのか、ちょっと優しくされたら股を開くか）
目には目を、歯には歯を、おっぱいには愛情を注いで育む物だ。言うなれば俺は魂の救済を行うのだ。
「あぁ……」
背筋を震わせて恥じらいながら吐息を漏らす袁紹。
敵に囚われ、股を開こうとしている袁紹は世間的に考えてビッチだろうが、俺は構わないと思う。0（ゼロ）から俺の色に染めて行けば良いからだ。
「麗羽、これから貴女は俺のおっぱい（女）だ」
「おっぱい？」
俺のおっぱいには人格者を求める。嫉妬してモラハラやパワハラをするような人格障害はいらない。性的愛玩物として俺の癒しにならない者に価値は無いからだ。
おっぱいのおっぱいに手を伸ばし、ご相伴に預かる事にした。
ちょっと触っただけなのに感度良すぎだ。麗羽の半開きになった口から吐息混じりの喘ぎ声が漏れ続けている。
「あっ、あっ……んんっ……はぁ……」
胸から腹部にかけて波打つ様に揺れていた。扇情的だね。
俺の為に死ねないのなら、それは俺のおっぱいとは言えない。これからじっくり、ねっとりと教え込んで行こう。
「うひひひ」
「……劉琦様？」
おっと、下品な声を出してしまった。雰囲気は大切だよな。
「お前の睫毛は長く美しいぞ」
とりあえず誉めて口づけをしておいた。

「あっ……」
まぁ、とにかく、官渡の戦いは袁紹軍の自壊で終了した。袁家の排除は手間が省けた。シンパを作っておいたのは正解だった。
袁紹とイチャイチャした翌朝、鳳統と孫権と黄忠からジト目で見られた。
まだ戦は終わってないと言い訳をしたが、こいつらと約束していた事をすっかり忘れていた。俺が良い女を口説き落として楽しくやっていると、悔しがる者も居た。
だけどそう言うからには、さっさと告白したか、釣り合う男に成る努力をしたんだよな。
でも結果は俺に取られている。嫉妬や羨望の視線は心地良い。勝利の味だ。
快楽に耽る前に戦を楽しもう。誰を殺し誰を生かすかは俺次第だ。先ずはゆっくりと恐怖を教えてやる。その為にも降った袁紹には協力して貰おう。
俺の治める荊州(うち)より、劉焉の治める益州の方が難攻不落の要塞と成り得る地形で、西との交易で軍事的超大国へと成長する下地があった。
劉焉が覇権を握るためには、漢の要衝(チョークポイント)である荊州を支配せねばならない。だから再建途上の洛陽がある司隷よりもうちに攻めて来たんだ。
官渡の戦いの後、袁紹に従っていた弱小勢力は国許へ帰り時勢の行く末を見届けようとした。日和(ひよ)りやがった訳だ。俺は軍を反転させ巫に向かった。袁家の旧領は、切り取り自由と張⊠(ちょうこう)に伝えたが、何か俺の為に頑張ってくれるらしい。と言っても、俺は河北の土地なんていらない。好きにやってくれ。
北の敵を撃退し残るは西の劉焉だ。弟達が助けを待っているし、さくっと終わらせたい。
「皇帝陛下は宗主である劉焉を遣い走りには出来ない。劉焉も屑だが藩屏として皇帝陛下を支える義務があるから手出しを出来ない。俺

としては、本当は幼子より劉焉が皇帝に成った方がましとは思う。強い皇帝なら漢は建て直せる。劉焉は自己中心的で選民思想な豚だが、賢い豚だ。実力が伴っており汚い仕事が得意だ。あいつは生まれる家を誤ったんだ」

不敬な言葉に反応する様な者はここに居ない。居るのは俺に忠誠を誓った者か荊州を守りたい者だ。

「だけど残念ながら、劉焉の覇道と我らが荊州は並び立ちはしない。だから選択は決まっている。俺は劉焉の首が見たいんだ」

そう言うと、家臣は頑張ってくれる。もしかしたら呂布が先に成都を落としてるかもしれない。

ま、宗主であってもぶっ殺す事を誰も疑問に思わなかった。本当に、日頃の人徳が物を言うわな。

「荊州を侵した益州兵は全員、あの世送りです」

鳳統も張り切っていた。避難の間に合わなかった一部の民が食われたらしいからな。

「そうだな、へこましてやれ。野犬は追い払っても戻ってくるから殺すのが正しい。駄犬は畜生らしく地べたを這いずるのが相応しいと教えてやれ」

そう言えば組合の関係者が笑顔で戦勝祝いの品を贈って来たが、袁家が勝つ事に賭けていた商家が軒並み潰れたそうだ。

「将来を悲観して自殺した者も多いとか」

商売仇が倒れて嬉しそうに語っていた。商人であっても敗者の末路は同じ。投資は自己責任であり、余裕資産以上の失敗は投機だ。

商人にとって金を失う事は命を失う事に等しい。命を落としても金は落とすな。死後の世界まで金は持っていけないが、それが彼らの信念だ。

「無様だな。負け犬が現実逃避してるだけだ」

金は天下の回り物と言うぐらいだ。俺は惜し気も無く組合に投資を続けた。市場に対する寄与は組合の方が大きいので、更に影響力を高めるだろう。

「ははは、左様で御座いますな」

こんな風に他者を踏みにじる俺達だが、審判の日がいつかやって来るのだろうか？　でも荊州の民は終末まで楽しく躍り続けるだけだ。

6―2

歴史は一つの気流の中で動いている。

益州と荊州の境にある巫（ふ）。そこは劉焉の軍勢に十重二十重（とえはたえ）と取り囲まれていた。国境と言う事もあって長期の籠城に耐えうる蓄えと備えがあった。

守将である関羽は、長い黒髪を風になびかせて城壁から眼下の敵兵を見下ろしている。

長江の存在で劉焉の軍は兵力差を活かせていない。嫌がらせの様に巫の周辺にある田畑を刈り取り、集落から略奪し焼き払った。

――戦国に秦の張若が攻め込んだ経路と同じか。

関羽は凡庸な将では無い。だからこれは自分達を誘い出す罠だと理解していた。

「愛紗（あいしゃ）、鈴々（りんりん）の出番はまだなのか？　外に出て暴れたいのだ」

関羽は字を雲長と言うが、親しい者は真名の愛紗と呼ぶ。

話しかけて来たのは、張飛翼徳、劉備玄徳を処断した後、関羽の妹分として仕える様に成っていた。

「落ち着け、鈴々。我らがここで守りを固めれば敵は先に進めない。それが目的なのだから」

子供が無知でも罪では無い。学べば出来るし、成長しないのはやらない者だけだ。

だから張飛は許された。しかし馬鹿は罪で許されない。兵の命を預かる将ならば、馬鹿は罪だ。

劉琦は女好きだが君主であり、処断を躊躇わない。だから関羽は妹分を処断せずに済む様に導いていた。

関羽は劉琦との会話を思い出す。

「関雲長よ、此度の戦はその方に巫の守りを命じる。劉焉の兵を食い止め、時を稼げ」

劉琦は袁紹との決戦を行おうとしていた。そこに劉焉の横槍が入

れば戦の流れを揺るがしかねないからだ。
「承知いたしました」
関羽は劉琦におっぱいと呼ばれ、寵愛を受ける者の一人だ。
後漢書の列傳に次の様な文が残される。劉琦、心卑しく女色に耽り、その弟、劉琮が荊州の守相を継ぐ。
後世の評価がどうであろうとも、この時代を生きる関羽とって劉琦は愛する主(おとこ)だ。その男が求める事なら応えたい。
関羽は寛爾(かんじ)として笑った。それは劉琦に殉ずる心の現れだった。
一方の敵将も意気軒昂と士気だけは高かった。
「亡き主君と妹の仇、劉琦を討ち、関羽……今度こそ貴様と決着を着けるぞ！」
それは混戦の中で討ち漏らした夏侯惇だった。片目を失っているが闘志は衰えていない。
石頭の武骨者は益州で隠遁生活を送る内に、古典を読み故事に習い、芸を嗜んだ。
失敗から学習をしない人間はいない。夏侯惇は家族を失って将として成長していた。
「劉琦様の名を貴様ごとき下郎が軽々しく口にするな！　負け犬は負け犬らしく、地べたを這いずって吠えてろ」
関羽は仇等と言う被害者面が気にいらなかった。天下に重きをなす劉琦は、荊州に暮らす全ての者にとって希望だった。
激昂して言い返す関羽だが、家臣は仕える主人の影響を受けるらしい。関羽の口上を聞いた張飛は、劉琦と比較して似ていると感じたが口にはしなかった。
夏侯惇が率いる兵は劉焉に与えられた士卒の他に、曹操軍残党も雑ざっていた。
敵は再起を図る前に潰してしまう。それが正しい選択だ。敗残兵は徹底的に狩り殺しておくべきだったと関羽は唇を噛み締めた。
――此度は一兵余す事無く皆殺しにする。
対峙が長引く中で、劉琦が官渡で袁紹軍を破ったと言う報告が入ると関羽は好機と見て精兵を率いて反撃に出た。関羽が斬り込むと遂

に劉焉軍は囲みを解いたのである。

朝廷から使者が来て俺を楚王に任命して行った。巫に到着する前だから、やる前から劉焉が負けると思っていたらしい。今後の政を俺がどの様にするのか朝廷は知りたがっていたが、俺の器量では天下を統べる事は出来ない。そもそもやる気が無い。

「ふん、丞相や宗主を倒して王か。朝廷も狂ってやがる」

漢の終わりは兆しどころか前から軋み声をあげていた。今更、王の肩書きはいらん。

時代の終わりは前から来ていたんだ。

「周の時代、楚は中原から離れた荊蛮(けいばん)や百濮(ひゃくぼく)の地でした。高祖が漢王として冊封されたのは、正に辺境だった訳です。これも天命でしょう。王に成られたのですから、御身を大切にして下さい」

確かに戦はまだ終わっていない。巫から敵を撃退したと言っても、かなりの敵が荊州に残っている。

「俺に鎧甲は要らんぞ。今に劉焉軍は破れる。お前らが勝利してくれると信じてるからな。だけど俺が死んだら火葬にしろ。土葬にはするなよ。後、殉死はいらん」

女出入りの激しい俺だが、死んでまで付いて来いとは言わない。

巫では「全ては劉琦様の為に!」と声高々に叫び、関羽が頑張ってくれているそうで、放って置けば益州まで攻め込みそうな勢いだ。

劉焉軍では多くの士卒が死傷するか、脱落していた。関羽は投降して来た敵は皆殺しにしてるらしい。戦を良く分かってるじゃないか。後で誉めてやろう。

俺が到着した時、無様に背中を見せて逃げる敵軍を勢い着いた我が精兵が追いかけていた。力こそ正義だ。

力無き者が粋がっても勝てはしない。

敵の殿軍は夏侯惇が指揮していた。窮鼠猫を噛むって言葉もあるしな、生かして捕らえよう等とは思わない。

「夏侯惇は名うての将だ、褚師子肥(ちょししひ)と侮るな。あいつは殺せよ」

褚師子肥は景公の治める宋が、曹との戦で破れた時に殿軍を指揮し

ていた者だ。俺の指示は間違いなく伝えられた。
流れ矢が馬を殺し夏侯惇は倒れた。その間に追い付いた味方の騎兵が夏侯惇を取り囲んだ。
夏侯惇は我が兵を斬り倒し、死力を尽くして抵抗した。だが多勢に無勢、手傷を負っており足元も覚束ない。
「おのれ、私は華琳様と秋蘭の仇を討ちたいだけなのに、天は今回も劉琦に味方をするのか！」
絶叫していたが、知らんわ。そんな事と俺は思った。引き際を知らず、荊州を乱す者は死ね。
「死んだ操公と妹に尽くすのか。敵ながら何と見事だ」
内心の嫌悪感とは違う、一見公平な評価を口にした。この演技は俺の徳の高さと慈悲深さを効果的に演出する。
「討ち取るのも惜しいが、戦場での死が望みならば降るまい。それも武人としての矜持を守る為だ。遠慮は無用、全力で向かえ。それこそ武の道に生きた者への手向けだ！」
この後、敵の策源地である益州に兵を進める事に成るが、呂布は今頃、どの辺りに進んでるのだろうか？

劉焉は欲を出して将を損ない兵を減らした。その代償は益州が逆侵攻を受けると言う物だった。
呂布は五週間で７０余の街を落とし、劉焉は劉琦を『宗主に刃を向ける事は道を外れた大逆であり謀叛人だ』と罵った。最早、勝つしか劉焉に残された道は無く、負けた時が益州の最期だからだ。
劉焉は程昱（ていいく）の献策を入れて、焦土作戦を行った。荊州兵の進撃経路にある街から住民と家畜を疎開させて田畑は刈り取り、井戸には毒を入れて、家屋は破壊して燃やし、荊州兵が利用出来ない様にした。
「益州の民は宗主であると言うだけで劉焉に付き従っております。いかがなされる？」
楊儀（ようぎ）の問いに陳宮（ちんきゅう）は不敵な笑みを漏らした。
「成都周辺と城下に籠る敵の兵力は８万。対する我が方は占領地の平定に兵を割いており、手元の兵は５，０００、それと劉焉の行いに憤っ

て加わった義勇兵が1，５００。確かに数の上では寡兵と言えますが、敵の多くは武器を与えられただけの民草であり、戦意は低い。烏合の衆と呼べましょう。劉琦様が楚王と言う天命を皇帝陛下より授かって、勢いは我らにある。すなわち我に天祐神助があります。それに我らには天下無双の豪傑である恋殿がいらっしゃるのですぞ」

劉焉軍が数で勝りながら呂布軍を包囲殲滅出来ないのは弱兵であるからだ。呂布軍にぶつかれば衝撃力で敷いた陣を抜かれ、数の優位が覆される。

包囲殲滅陣はそれなりの錬度を持った士卒で無ければ実行出来ない。農具を武器に変えた所で、百姓が呂布軍に敵う筈もなかった。だから初戦の迎撃に失敗した後の劉焉軍は、呂布軍に義勇兵が参加する前の時点で、１６倍の兵力差がありながらも成都に籠り硬く守りを固めていた。

この様な状況を鑑みて、陳宮は自軍の勝利を確信していた。その勝利を確実にする為に策を練る。その上で情報収集を怠らなかった。

荊州では捕虜を原則的に処断する。我の妨げとなり、行動の自由が奪われるからだ。

「程仲徳は食事を確り取っているのですか？　まさか仙人見たいに霞を食べているとか」

ハウツーは簡単、陳宮は処理の手順として尋問を行った。

「いやー、そう言うのは聞いた事が無いですね。日に三四升です」

冗談を交えて問うが、返って来る内容はふざけた物で陳宮は眉をひそめる。

「まさか、恋殿でも無かろうに」

捕虜の口から程昱の情報を聞き出す事は難しかったが、程昱を天下の奇才と評価している。

対曹操戦では自分を死んだ事にさせて、郭嘉に投降を装わせており、策を成し遂げておれば衛（えい）の石（せきさく）?に匹敵する評価を得ていた。だから油断のならない人物だと陳宮は程昱を見ていた。

今回も程昱は策の一つとして、呂布の家族を質に取っていた。卑怯、卑劣と呼ばれる事を躊躇わない行動力があった。

荊州兵が成都攻めを始めれば毎日、日暮れと共に呂布の家族である動物達を一匹、羹(あつもの)として調理させ、呂布の下に届けさせた。呂布はその羹を汁さえ残さず飲み干した。

その報告を聞いた程昱は嘆息した。

「むぅ、怒ってがむしゃらに攻めてくるかと思ったのですが、上手く行かない物ですね」

呂布の戦意を低下させる。あるいは自制心を失わせる目的であったが、此度の策は上手くは行かなかった。しかし次の手を打っており、程昱の余裕は崩れていなかった。

「勝敗は時の運と言いますが、理性と感情は別物です。華琳(かりん)様や皆を殺した貴方達が楽に死ねると思わないで下さい。私達を敵に回した事を後悔して死んで下さいね」

独り呟く程昱だった。

6―3

「皇帝陛下万歳！　大漢帝国万歳！」

道行く先々で益州の民は歓声を上げていた。サクラではない。自発的行為だ。

巫から白帝に進んだ俺は地元の貧乏人どもに銭２０万を恵んでやった。うちに絡んで来ない様にする宣撫工作だ。これが噂になって広まったらしい。

欺瞞と虚栄に満ちた世界だ。世間の風評は一過性の物だが、手配りを怠れば足を引っ張られる。その為に金をばらまいた。

「劉焉を倒しても世に平和が訪れるとは限らない。それでも乱世よりはましだってこいつら思ってるんだろうな」

俺はいつも通り鳳統を膝の上で抱き締めながら頭の上に顎を乗せていた。

「劉焉の覇道を破るのは劉琦様の他に誰が成し遂げられるでしょうか。これからも天下の為に、愚かな我らを御導き下さい」

鳳統もそうだが、俺の家臣は俺に天下を取らせたいらしい。

「んー、俺としては荊州以外はどうでも良いな。潜在的な脅威となる

勢力を幾つか残せば、敵が居る事で国は纏まるだろう？　統一なんて無駄なんだよ」
俺の素直な言葉に鳳統は、「今は残念ですが諦めません」と言いやがった。いや、そこは諦めろよ。こいつ、こんなに図太かったか？
元海賊の管承に任せる水軍で、長江から一気に益州内陸部に兵を進ませ呂布軍と合流する準備を進めていたら、荊州から報告が届いた。
親父が死んだ。
政から退いて俺に全てを任せて楽隠居をしていたのにだ。
「蔡瑁が謀叛、劉表様が討たれました！」
思わず立ち上がりかけたが、膝の上の鳳統の重みで俺は心を落ち着けた。君主はいつも外面だけは冷静で居るべきなのだから。
「賊軍は南郡を掌握、荊州北部の制圧に動いております」
「何それ、マジで意味が分からん。蔡瑁だけって事も無いだろう。同調した別動隊が居るはずだ」
君主とは難しい立場だ。政とは関係の無い、胸襟を開く仲が良い友人関係を作れない。使える屑か豚と認識する為の付き合いから始まってしまうからだ。それでも親父は蔡瑁を信頼していた。
「目的は何だ。目的は。蔡瑁の妻は、親父の後妻だぞ。何を考えてやがるんだ……」
下手に動けず待機命令を出していると、追加の情報が届けられた。
「賊将張允が黄祖将軍を殺害、江夏郡を制圧。北を守っていた文聘将軍も手勢を率いて賊軍に寝返り、南陽郡を制圧したとの事です。命に従わぬ士卒は殺されており、民草にも動揺が広まっております」
報告が耳を素通りする。そして思い出した。
親父が俺に地位を譲った時、蔡瑁は反対していた。あいつは俺より弟の劉琮こそ相応しいと言っていた。
だから俺は言ってやったんだ。俺の政に不満があるなら、俺の首を取って自分で変えろと蔡瑁を挑発した事があった。顔色を変えるあいつが面白かった。
「アハハ、あの糞野郎、本当にやってくれたな。糞虫が、安息の時なん

て与えねえ。腹から臓物を引き出してからくびり殺してやる。くひひ、窒息するのが早いか、失血で死ぬのが早いか見ものだ」
俺の言葉に、鳳統は振り返って心配する。
「劉琦様、御無理はなさらないで下さい」
急いては事を仕損じる。焦らず蔡瑁を葬る時を待つ。そう言えば、弟はどう動くのだろう？　あいつが蔡瑁に着くなら俺も考えないといけない。蔡瑁をぶっ殺したら俺のおっぱい達を連れて、この国から出ていくのも選択肢としてありだと思う。
「ああ、分かってる。俺は益州に取り残されてしまったのか？」
親が死んだら血族は弟だけだ。荊州なんてただの土地でしかないから、欲しければ弟にくれてやる。
「いえ、蔡瑁が兵を例え用意出来たとしても、外征に主力を動かしていた我らとは数に開きがあります。反転し蔡瑁を討つは容易いでしょう。問題は、劉焉軍が追撃して来た場合です。勝敗の一大神機は正にこの一戦にあると言えるでしょう。我ら家臣は一丸となりて劉琦様の御為全力を傾注し身を捧げます！」
敵に絶望を与えてくれるならば、こいつらの忠誠も役立つ。血塗られた道も皆で渡れば怖くない。
「あ、うん。しっかりやってくれ」
「はい。頑張ります！」
益州伐の最中に起きた蔡瑁の反乱は荊州の国力を低下させる。だが劉焉との戦いも止まる事は出来ない。
力のある俺が決断し、家臣が実行する。これが荊州のある姿だ。蔡瑁の糞虫がどうこうして良い訳が無い。やっぱり糞虫と俺とでは物の考え方が違うのだろう。
夜明けが近付く彼は誰時、荊州に戻る道には篝火が炊かれていた。
しかし我が軍は西に向かい怒濤の勢いで進んでいる。周囲の敵に荊州に戻ると見せかける為だ。
（俺もまだまだ甘かったな……）
謀叛の予測が出来なかった。親父の家臣だったやつが裏切るなん

て考えてなかったからだ。
史記で韓信が狡兔死良狗烹、高鳥盡良弓蔵、敵国破謀臣亡と言っていたが、蔡瑁も戦が終われば自分が喰われると考えていたのだろうか？　あいつの場合、親父に仕えていただけで俺の直臣では無い。だから危機感を持ったのか。
（そこらの凡愚ならまだしも、俺は君主だぞ。呆けてどうする、　ぬるま湯に浸かってたのは俺も同じか。こうなったら徹底的にやってやる。一心不乱の戦争だ）
人はその立場に成って初めて知る事が多い。身内を殺された復讐も同じだ。全ての元凶は劉焉だ。良い叫び声と骨の砕ける音を聴かせて欲しいと思う。
「これは復讐では無い。これは暴力に対抗する為に必要な処置で、天罰なのだ。目的は敵の降伏ではなく和平だ。あえて言おう、連中はカスであると！　有象無象のカスが幾ら集まろうと、お前ら荊州兵は強い。精兵だ。カスの頭でも叩き潰せば考えも直すだろう。カミのご加護があらんことを」
俺の演説は簡潔に締めくくった。
先鋒は関羽でその脇を張飛が固めている。
「百姓風情であっても手加減はせぬ！　我が主を敵に回した事、後悔しても遅いぞ！」
関羽は青龍刀を振るった。斬撃は確実に敵を捉えて葬る。
「やられた分、やり返すのだっ！　うりゃうりゃうりゃ！」
張飛も蛇矛で敵の首をポンポンとチョンパしていた。見事な戦技だ。
さすが平民相手だと敵が雑魚過ぎてワロタ。敵の防衛線を抜いて我が兵は成都に向かった。呂布との合流も時間の問題だろう。
「ちょろいもんだぜ」
将の活躍に喚声を上げて勝利へと前進する俺達の足下には、百姓の死体が転がっている。ケツから突き出たあれはネギか。ヤベ、肛門がぐちゃぐちゃだ。鳳統は平然と戦場を見ている。軍師の思考に切り替わると、感性が麻痺するのだろうか。

「死ね死ね」
威勢良く我が兵は戦っている。やっぱり、戦争はこうで無くちゃいかん。スカッと勝ってこそ楽しく戦えるのだ。
敵の士卒の多くは志を持たん百姓だ。本業は農業であり武官とは違う。付け焼き刃で勝てると思うなよ。
「さあ、立てよ。立つんだ。心配するな殺す気はない」
投降して来た兵を整列させた。しょせんは農民で意思も弱い。
「落ち着け、落ち着け」
そう言いながらも武器を捨てた後は皆殺しにした。
武器を向けてくるのが強制徴用の民草でも俺の民では無い。敵は容赦なく殲滅した。お陰で坑殺男女数十萬とか言われてる。生き埋めでは無く、死体を埋めただけだが、数字はあながち間違いでは無い。
政の不振を兵や民の命で購う。まぁ、仕方無いわな。
権力主義で全体主義の国家は成功すれば長生きをする。中共やソ連、北朝鮮もなんやかんや言って半世紀以上、隆盛である。俺が生きてる間、荊州が保持出来れば最高だ。
権力者ってのは働いたら負けだと思う。身の丈に合わせて野心を抱かなければ済む話だ。全て家臣や親族に投げて、引き込もって生活出来る者が勝ち組だ。
判断力不足で周囲を巻き込んで破滅するよりは、誰にとっても最良の選択だと言えるだろう。
兵が敵を潰しながら進軍する。足音は地響きの様に音を鳴り響かせていた。それを見て俺と家臣は笑っている。きっと楽しい未来が待っているからだ。
殺した分だけ脅威は減って俺達が幸せに成れる。質量保存の法則と言うより、等価交換だな。

ひたすら西へ西へと進んだ。
成都に近付くと、堅守死戦とばかりに敵は頑強に抵抗した。家族や友の為かは知らんが、まあ死人の過去に興味はない。そして呂布軍と合流した。

「地獄へようこそ、ですぞ。我が王よ」
陳宮の言葉に俺は乗って答える。
「ふん、ならお前は牙を剥いた死神か？」
地獄は涼しいようだ。海抜何メートルか知らないが気温減率から考えたら当然か。
『荊州から悪霊に誑かされた賊徒の軍団がやって来る。だが天は我らを見棄てない。劉州牧を信じる者は必ず救われる。やがて我らに同調する者が各地に現れ、審判を下す。そして天の軍団が悪霊と賊徒を滅ぼすだろう。忠勇なる益州の民よ、邪悪を退けて共に光に満ちた漢を取り戻そう』
敵の部隊には、カルト宗教染みた敵の宣伝のビラが配られていた。文面考えたのは何処のどいつだ。
「敵の軍師、何て行ったかな？」
「程仲徳です」
「ああ程昱か。確かに、時が来れば平和が復活するかもしれない。束の間の平和だがな。それでも、あいつらが生きて人生を楽しむ事は無い。やつらの信念を砕いて、やつらの信じる天に送ってやれ」
陳宮が自由に動ける様に、呂布を征西将軍に任じ今回の戦の仕置きを一任した。二人の組み合わせは相性が良いからな。お手並み拝見だ。
その間に、俺は寄生虫を水源地に散布させた。これは謀略や後方攪乱の分類に入る。
住血吸虫は既存の寄生虫なので俺の指示でやったとはばれない。殺しをすれば、それは大切な人を守る力と成る。
細菌や寄生虫は管理しやすく実に経済的な戦略兵器だ。華佗（かだ）達、医師は良い仕事をしてくれた。賞与を出してやろう。
他にも懐柔し情報提供者を用意した。
人との繋がりは大切だ。金を積まれて転がらない奴は少ない。宦官だって汚職で法を左右した。高い賄賂に見合うだけの仕事ぶりなら良いが、ただの糞やカスは排除せねばならない。カスと付き合うとろくなことにならないからな。

鳳統に吟味させ、周泰（しゅうたい）と甘寧（かんねい）に連れて来て貰った益州の官吏を相手にする。
麻袋を頭から被せられて視界を塞がれ、手足を拘束された男はガクガクと震えていた。
「そう怯えるな。俺はお前と話すのを楽しみにしていた。だから、招待した。大切な客としてな。どうせいつか死ぬんだ。それが今日か明日になるかは、お前次第だ。大切な話だからよく聞いて考えてくれ。そうしたら、一生遊んで暮らせるだけの金をやろう」
用意した物語を噂や記事にして流布させる。情報は管理しなければ敵にも筒抜けになるからな。
こくこくと頷いている。自由も意思も金で買える。
「うん、分かった様だな。同意すれば帰してやる。だけど俺を裏切ったら、少々、面倒だがお前の家族をバラバラにして犬に食わせてやるからな」
愛とは犠牲を払う事だ。だから家族愛とかも利用して、敵の士気を下げようと俺はあれこれやったが、敵はそれでも戦おうとしている。
しかし駄目な者が武器を持っても駄目だ。抵抗するより自分達の指揮官を批判しろ。
「一歩間違えば、俺らが荊州ごと滅ぼされていたな」
鳳統と共に味方の攻撃の進捗状況を視察していた。
呂布軍は陳宮のバランス良い攻撃計画で勇敢に戦っている。生きる為に何の努力もしなければ、攻められる側の光景を俺は見ていたかもしれない。
「世界に輝く漢帝国だと今まで教えられて来ましたが、荊州で暮らす中で、世界の中心は漢ではなく他にも多くの国がある事を知りました。漢で輝く荊州を守る為にも、成都を落とした後は急いで戻り、謀反人を討ち滅ぼしましょう」
鳳統の言葉に頷く。
「ああ、終わらせて家に帰ろう。胸糞の悪い戦もこれで終わりだ」
敵の兵は皆、死を悟った目をしていた。こいつら羊かよ。盲目的な行動も過ぎれば命を失う。人生を反省しろ。

人生一回と限らないが、時間の大切さをわかってない愚民が多い。それがお前らの望んだ生き方か？　とりあえず場当たり的に対処すれば良いや、では長生きできないぞ。

武器を持てば遅かれ早かれ人を殺す。生きて家に帰る為に必要な戦場の掟だ。脱走して家に帰るのも手だ。劉焉も政なんか放り出して外の世界にとんずらすれば良いのに。そうしたら、俺もパルティアやローマまで追いかけようとは思わない。

7．劉琦様といっしょ

7―1

陣中料理に飽きた俺は近場の店に食べに出かけた。一仕事終えたご褒美だ。

お忍びや抜け出しも自重していたが、今回は目立たない様に護衛を連れている。常に危険見積と安全管理を怠らない軍師からの配慮だ。

食糧難とは言っても組合の加盟店はそれなりに営業していた。

（組合による市場の支配は完璧だな。加盟しないと日々の食材の仕入れにも事困る）

香辛料たっぷりな四川料理はこの時代に普及してるはずはないが、激辛麻婆豆腐が普通にあった。

世間ではろくな物も食べれず餓死者も出てるそうだが、商売は慈善事業では無い。金のあるなしで客を選ぶ。食材の原価や人件費がただでは無いから当然だな。貧乏人の出来ない分だけ金を持つ者が使い経済が回るってやつかな。

（まあ、美味しい物に罪は無い。牛も豚も鳥も命を頂くからには、俺はがっつり食べたい）

回鍋肉や担々麺を食べていると給侍の侍女が熱い視線を向けてくる。俺みたいな男は女が放って置いてくれないから、荊州では何人も深い関係になってしまった。やれやれ、益州でもか。

「美味しいですか？」

「ああ、上手い。これで明日の仕事も頑張れる」

くすっと笑って侍女は髪を楽しげに揺らし厨房へ下がって行った。

（可愛いな）

食後のデザートにおっぱいを啄むのも良いかもしれない。劣情を抱いたが、今はそんな状況では無い。

侍女の尻を視姦しながら楽しんだ後で店を出ると、俺の背後から距離を取って風体の良からぬ連中が着いてくる。

「ああ？」

馬上から振り返った俺に対して、平民風情が舐めた笑みを向けてく

る。人数は護衛より多い。数に物を言わせる物取りか。
「恵んでやる。感謝して拾え」
貧乏人に恵んでやるのも高貴なる者の務めだ。財布から金を出してばら蒔いてやったが、殺気と得物を向けて来やがった。
「やる気か。後悔するぞ」
俺の忠告は通じなかった。
「ぶちのめせ、やれ！」
怒鳴り声をあげて来た。だから俺の護衛が間に割って入る。
「王をお守りしろ！」
人前で王って呼ぶんじゃねえよ。身分を隠して出歩いた意味が無いだろう。
「王だって！　まさか楚王劉琦か」
「劉琦の首を取れば褒美は思いのままだぞ！」
目の色を変えて襲いかかって来た。
君主である俺が、前線で直接得物を振るう機会は数える位しか無いが、やっぱり装飾品としての武器は好まない。
戦場で頼りに成る得物は剣も槍も、色々な人が効率的な殺傷効果を試行錯誤した結果、今の形で落ち着いた。機能美に勝る物は無い。やっぱり武器は使えてこそ価値がある。
殺しの戦略、戦術、戦技も同じで、効率的な殺しの手順で出来ている。それらを理解して初めて戦場の勝利が実現出来る。
護衛は奮戦するが、敵の数はどんどん増える。
「ぬう、やむを得ん。王だけでも生き延び下され」
ものっそい提案だ。頭の良い部下は自己犠牲で役に立つ。
「駄目だ、家臣を犠牲にして逃げるなんてそんな外道な真似は俺に出来ん！　俺もここで戦うぞ！」
立場的に一応、遠慮しておいた。万が一、こいつらが生き残れば美談になる。
「それが荊州に暮らす民の為です。我らが王よ、先に行って下さい。この道を戻れば味方が待っています」
道ぐらい覚えてる。

「にゅあ！」
そんなやり取りをしてる内に護衛がまた一人倒された。
「あああああああああっ！　くそおおおおお」
俺を説き伏せていた護衛が飛び出して行く。次はこいつが死ぬ番か。
「我らに構わず行って下さい！　王よ、生きて下さい！」
「俺を恨ん良いぞ。約束しよう、残った家族には配慮する」
俺は馬を走らせた。振り返りはしない。
後で皆殺しにしてやる。
――で味方と合流した俺は賊徒を殲滅した。敗残兵か匪賊か知らんが、俺に剣を向けて来た糞塵が連行されて来た。皆殺しの前の余興だ。
「お……お願いします。た……助けて下さい。家では母親が病気で死にそうなんです」
よくもまぁ、そんな陳腐な台詞を言えた物だ。
「んん？　暴力が好きじゃなかったのか？」
立場は教えてやらないとな。弱者は淘汰されるって。
「天に唾を吐くと自分に返ってくる。お前らは襲う相手を間違えたんだよ」
俺の盾と成って死んだ護衛の遺体を回収したが、玉を切り取られたり、首を切り取られたり遊ばれていた。
「笑えるんだろう？　同じ体験してみろよ」
悲鳴や怨嗟の声が聴こえるけど、関係無いね。明日の力とは、今日の犠牲で成り立つ。殺しは明るく素晴らしい未来を作るからだ。それに――やられたらやり返すのが戦いだ。
ちなみに俺がばら蒔いた金は、連中、ちゃっかり拾っていた。三途の川の渡し賃代わりにくれてやった。
「野戦で雌雄を決する、ですか？」
程昱（ていいく）は、実戦部隊の指揮官として武官の代表である厳顔（げんがん）に呼び出された。

「劉琦の荊州兵は将と軍師が揃っている。対して我らは数こそ勝っている物の、手札は限られている。そなたの策に反して、あやつらは成都を落とす事に傾注しており、蔡瑁（さいぼう）の謀叛は効果が無かったようじゃな。このまま袋の鼠でなぶり殺しに遭うぐらいなら、打って出た方がましじゃろう」

厳顔は主君に忠誠を誓った。例え悪逆な主であろうとも誓いを違える事は矜持が許さなかった。それに黄権（こうけん）ら諸将が出陣を求めていた。これ以上、抑えておく事も出来ないと厳顔自身も感じていた。

だから乾坤一擲の勝負を申し出た。

「それで荊州牧の首を狙いますか？　無理は駄目です。それこそ敵の守りは堅いでしょう。ですから、風は桔梗（ききょう）さんの話には矛盾があると思うのです」

そこまで言われたなら代案を求めるのも当然だ。厳顔は軍師の計画を尋ねた。

「うむ。ではおぬしはどうする？　決戦を先伸ばしにすれば我らが勝てるのか？」

しかし返事は期待外れだった。

「敵の兵糧が尽きるのが早いか、我らの士気が砕かれるのが早いか根比べです」

厳顔は胸ぐらを掴み上げた。

「士気は既に地に落ちておるぞ。数で勝りながら呂布軍を破れず、成都に籠っておる。ここで盛り返さねば、脱走に歯止めがかからぬじゃろう。お主の魂胆は分かっている。曹公の復讐に益州の民を巻き込むな！」

程昱は指を一本立てた。

「呂布や関羽を抜いて荊州牧の首を討てるならお願いします。ですがあの軍勢を相手に、囲みを破って本陣まで攻め込める自信があるのですか？」

厳顔は首を縦に振り答えた。

「出来る出来ないでは無い。殺るんじゃ！　お主はそうやって小賢しい策を弄しているが良い。じゃが、我らの邪魔立て許さんぞ」

「風は邪魔なんて致しませんよ」
「ふん、我らの戦働き振りをそこで見ておれ。きっと思い知る時が来るじゃろう。出陣致す！」
厳顔はそう言って程昱を睨み付けると部屋を出て行った。
「はぁ……風も行かないと駄目でしょうね」
溜め息を吐いて程昱は後を追った。

世の中は二種類の人間しかいない。犠牲者と生きる物だ。
犠牲者は悪党ばかりとは限らない。だが殺さないより殺した方が良い。殺さなかった事を後悔するよりましだからだ。だからうちのやる殺しは将来の危険を取り除く正義の行いだ。
劉焉が腐っても、家臣は別だ。軍師は特に違う。強くならねば国を守れない。
東州兵は劉焉子飼いと言うだけで、正規軍に劣るのに精鋭の近衛扱いで温存されていた。指揮官、幕僚は正規の教育を受けていないので士官としても無能が多かった。
「それでも上手く扱うのが軍師の仕事だな」
そう思っていたが、どうも買い被りだったらしい。
守りを捨て出陣して来た。低下する士気を高める目的もあったらしい。
これを好機と見た我が軍は全面攻撃に出た。
「囲め、囲め。囲んで討ち取ってしまえ！」
雑兵が数を減らして行くのは早い。混乱が敵に広がって行く。将は兵を統率しようとするが、そうは上手く行かせない。
「敵将、厳顔。鈴々が討ち取ったのだ！」
ただでさえ実戦経験と錬度で勝る荊州兵相手に、東州兵は、将を失い劣勢を余儀なくされた。益州防衛の要は失われ劉焉逆転の道は途絶えた。
「張将軍が投降を勧告した所、これを拒絶。やむ無く討ち取られました」
厳顔を討ち取った模様が伝令から伝えられた。

「厳顔か。良いおっぱいをしていたらしいな」
俺がそう言うと鳳統は「知りません」と言い、顔を反らして、私怒ってますと態度で現した。
子孫を残すのはこの時代の絶対的な仕事で、鳳統も軍師なら理解してるだろうが、女としては俺の寵愛を独占したいらしい。
そして将を失った後、「素破（すわ）、やぶれたり！」と戦意を失い逃げ出す敵兵も多かった。お陰で数万余の数を揃えていても統制の取れない烏合の衆で、楽々と撃破して程昱を捕らえた。
陳宮の計画で敵を釣り上げて野戦で撃破した。鳳統は活躍の場所を取られたと、陳宮の才に嫉妬していた。
「計画通り、万事順調です」と関羽は意気揚々としていた。
程昱は自害せずに堂々と俺の前に姿を現した。他の軍師みたいに年齢不詳で容姿は幼い。食指は動かんな。
「よお、お前が程昱か。散々、手間かけてくれたな。だけど悪いな。最後に残るのは俺だ」
程昱は俺の本質を正確に読み取った。
「劉琦様、噂に違わず時代が何を求めているか御存知の様ですね。他者を排除してでも掴む平和、それも自分達以外は無価値と言う清々しい考えとは。本当に優しい御方ですね」
「本当は気付いていたんだろう。邪魔になれば同輩でも殺す。思い通りにならないなら宦官も民草も殺す。お前の敬愛した曹操だって取捨選択をしていた。未来に生きる席は限られているんだ」
「くくく、真理ですね」
「程仲徳、お前は面白い奴だ。ここで殺しても良いが、それではつまらん。そうだ、俺に仕えろ。荊州では使える者を無駄死にさせない。お前に天下なんて無価値だと教えてやる」
程昱はくすくすと笑い声を漏らす。
「風は生きてる限り、何度でも劉琦様の御命を狙いますよ」
駆け引きで何かを引き出す積もりか？
「そいつは困るな」
「では、このまま風を殺しますか」

やり取りが面倒に成った。一気に畳み掛ける事にした。
「てめぇ舐めてんのか。敗者の生殺与奪は勝者の権利だ。ガタガタ抜かしてると兵の慰み者にするぞ。絶望と恥辱を味わって見るか？戦で流した血を忘れてねえぞ。お前の首だけで落とし前つけれる積もりか？　首に価値なんてねえよ。だから命じてやる。荊州で生きろ。異論は認めん」
こいつに優しさや美しさを求めていない。亭主が他の女と寝たら玉を切りそうな女だからな。報国の志もいらん。軍師としての才があれば十分だ。気分を変えて生きて結果を出してくれれば良い。
「お断りします。稟(りん)ちゃんが待っているので、風は逝かないといけませんから」
この女、元から生きる屍だったか。
「ふん、俺の誘いを断りやがって。なら死ね、この雑菌が」
程昱は満足そうな笑みを浮かべて斬首された。何人も死なせて来たのに、汚れ無き純粋無垢な感じの笑顔が嘘臭くて面白くない。
この戦で三万程の敵兵を討ち取ったが、欲求不満が溜まっただけだ。不満は劉焉にぶつける事にしよう。

主力を失った後は脆い。内応した兵によって攪乱の為に成都の各所に放火が行われ、隙を見て甘寧と周泰の隊によって城門が確保された。そこに呂布軍が突っ込んで行く。
「りょ、呂布だあああ！」
悲鳴をあげる敵兵を、呂布は方天画戟で斬り倒して行く。その後に続く兵を陳宮は指揮していた。
「……劉琦様に誉めて貰える？」
「勿論です！　恋殿は武功第一位ですぞ！」
後は乱戦だった。まともに抵抗してる兵は千人も居ないだろう。
女子供だろうと武器を持って抵抗する者は皆殺しにした。勿論、世間体があるから「武器を持たぬ者、抵抗しない者に乱暴、狼藉は許さんぞ」と一応言っておいた。建前は大切だからな。
力と権力があるなら使わねば意味が無い。そして俺は上手く使っ

た方だろう。敵の悔しがる顔を見た方が達成感がある。
「うぇーい、はるばるやって来たぜ劉焉。お客様に水も出さないなんて失礼じゃないか？　ぶち殺しちゃうぞ☆」
　玉座に腰かけて劉焉は俺の兵に囲まれていた。俺は内緒と言うのが苦手で、部下の前で話す事を躊躇わない。
「やめろー！　余を誰だと思ってる。宗主じゃぞ。お前ら下賤な者とは価値が違う。どうだ、殺す気が失せるじゃろー！」
　威厳も何も無い。裸の王様だ。悪党は悪党らしく、最後まで格好良い好敵手を演じてくれたなら良かったが、無様な終わり方が望みらしい。
「ガタガタうるせえんだよ馬鹿野郎。何言ってるか意味が分からねえんだよ、この野郎！　お前が喧嘩吹っ掛けた癖に調子に乗りやがって、舐めてんのか！　お前も帝位を狙ったなら責任を果たせ。お前の死で益州の戦は終わりだ」
　俺の言葉に家臣は得物を構える。
「そんなー、余が何をしたと言うんじゃ。お前ら頭、おかしいじゃろう。なぜ余を殺すんじゃぁぁぁぁ！」
　好意の反対は無関心ではない。憎悪と敵意だ。うざい、鬱陶しい。嫌悪感も敵意だ。
　皇帝に成りたくて戦を始めたとか馬鹿だろう。自己顕示欲の塊か。どこまで行っても自己中心的で自己満足でしかない。俺は世界を変えたく無く、こいつは世界を求めている。俺の価値観とは合わない。
　出る杭は叩かれるって奴よな。
「お前は阿呆だ。せっかく益州なんて理想の場所を持っていたんだから、自分だけの世界に籠っていたら良かったんだよ。俺なら益州から出ない。本当、テロリストって最悪だな。下らない自己満足に巻き込みやがって。頸動脈切って一瞬で殺してなんかやらねえ。ゆっくり死ね」
「アッー！」
　俺の指示で劉焉の腹が割かれた。脂肪が厚くて斬るのに苦労していた。

「糞っ、豚野郎め」
筋弛緩剤を使えば苦痛を感じさせずに切り刻める。だけどそれでは面白く無い。
そのまま首を荒縄で縛り上げるとテラスから外に突き落とした。絞首刑は強欲の末路だ。人間の血は4リットル、失血でも簡単には死なない。そう思っていたら、首が締まり窒息する前に死んだ。内臓をぼとぼとと落としたら流れる量も多かったか。
「神の御加護を」
最高にチムドンドンする戦いだったぞ。
劉焉を殺したが俺は益州が欲しい訳では無かった。親を殺され怯える劉璋(りゅうしょう)に声をかけた。
「劉璋、益州の政はお前がやれ」
小便を漏らして呆けた顔をしている。野心は無さそうだが、凡愚だな。
「は、え?」
俺の留守中に母屋を盗んだ蔡瑁の仕置きが残っている。だから益州に関わってる暇は無い。
「理解しろ。俺はお前を傷付けたく無い。だから何も企まず、黙って指示に従え」
邪魔なら殺す。使えるならそのまま生かして活かす。それが政だ。以後、益州は俺の影響下に入るが、面倒臭いのでうちから何人か人を送って補佐をさせる事にした。
他にも戦利品として鳳統の進言で漢中郡から東部を荊州に併合させた。荊州の盾として新たに西城郡、上庸郡、房陵郡を作った。
同じ腐っていく肉なら有効活用しないとな。

7―2

老い先短い人生を楽しむ。その主旨は間違ってはいない。だけど蔡瑁(さいぼう)はやり方を間違えた。
謀叛を起こすだけならまだしも、親父を殺しやがった。
「蔡瑁は南郡(なん)、江夏郡(こうか)、南陽郡(なんよう)を制圧しており、賊軍は、我らが益州よ

り帰還する事を警戒し巫城と⊠帰城に軍勢を集結させております。張允、文聘の手勢の他に、民を根こそぎ徴用して動員しているとの事です」

孫権が荊州に残した者からの情報を纏めて報告してくれた。仕事の出来るおっぱいは役に立つ。後で誉めてやろう。

「巫城の守将は張達と范彊か。記憶に無いＭＯＢキャラだな。問題は地形か……」

俺達が荊州に戻るには山道を進むより長江を船で下るのが早い。夷陵から平野に出て北に進めば襄陽は直ぐだ。

荊州外縁部の交通は、外敵の侵攻を阻止、遅延させる為にわざと迂回経路となる山道を整備していた。直通の道は移動を容易くさせるが、同時に敵の進行速度も早める事と成る。そう考えたからだ。だから防衛戦では侵攻経路を想定しやすかった。

「荊州って案外、攻めにくかったんだな」

益州の抑えは黄忠と魏延に任せるから背後の心配はしていない。しかし問題は他にもあった。

周泰が代わって報告する。

「御報告致します。敵には諸葛亮が付いているとの事です」

「は？」

諸葛亮は溺死したはずだ。死人は生き返りはしない。それが世間の常識だ。

「何で、諸葛亮が生きてるんだ？」

俺は傍らの鳳統に話しかける。

「朱里ちゃんの事ですから、あの時は敗けは避けられないと分かっていました。ですから死んだのは影武者で、再起を図り潜伏していたのでは無いでしょうか」

「ふーん、他所の子供を身代わりにしたのか。形振り構わず、やるじゃねえか」

面倒な奴が再登場しやがった。だけど評価してやる。

負け戦確定の状況で粋がって死ぬより、再起を図ったのは良い選択だ。他者を犠牲にしたのもＧｏｏｄだ。上に立つ者としての覚悟が

感じられた。
「優秀な人材は生かして投降させたいが、ま、説得は無理だろうな」
俺の政が嫌なら、俺の領地から消え去れば良かった。それなのに荊州まで出て来た。それなりの覚悟があるのだろう。
俺は今回の戦の尻拭いは益州の民にさせてやろうと思った。陳宮や鳳統も賛成したので、劉璋に早速、要請した。
「7万の兵を用意ですか？」
「そうだ。元はと言えば、お前の親父が荊州にちょっかいを出して始まった戦だ。蔡瑁の謀叛だって、俺らを足止めする為に起こした策だ。だけど俺らはそれに乗らず、成都を落とした。その結果として罰を負うのはお前らだ。そして楚王として益州に軍役を命じる」
劉璋は渋った。
「しかし、それでは益州の民が犠牲に成ります」
――恩は無い。しかし領主に尽くすは民の義務である。
という心理で民は戦わされた。
劉璋は今後、荒れ果てた益州を再建する重責を担っていた。俺の怒りに触れず断ろうと考えたが、逃げ道は無い。
「格好着けるな。お前の所の民は消耗品なんだろう？　散々、今回の戦で死なせたじゃないか。今さら何万か増えた所で変わらんだろう。捨てる命なら俺が有効活用してやる。そうだな、一人に対して米1斗を支払ってやる。従軍してる間の面倒も此方で見るから心配するな」
そう説き伏せた俺は、益州から7万の兵を出させた。装備や兵糧は組合に手を回して用意させた。
一方、長江の南では、漢寿（かんじゅ）に詰める荀彧の差配で友軍が賊軍を足止めしていた。同じ荊州の民であっても俺に逆らう者は斬られている。報告を送って来たが、向こうは向こうで頑張ってくれてるみたいだし、その間に俺は7万の益州兵を磨り潰して鎮圧する積もりだ。
益州に黄忠、魏延を抑えとして残して俺は、荊州へ大返しを行った。鳳統は策に自信を持っている様だから任せている。馬一族は義理堅いから兵を出せと言えば応えるだろうが、今回の出番は無い。これは

荊州を取り戻す戦いだ。
俺の本隊は南郡に戻る形だ。関羽、孫権を主将に益州兵7万、対して敵は4万ほどらしい。
呂布の率いる別動隊が、南陽郡方面から戦略的包囲を形成すべく動いており、荊州南部には荀彧の指示で揚州方面から兵や兵糧が運び込まれている。李典、楽進が脇を固めているから荀彧は上手くやるだろう。
「さぁ、殺し合いの時間だ」
投石器と火矢による支援で、張飛を先鋒とした我が軍は巫城に攻撃を開始した。今後の再利用何て物は考えていない。うちの敵と成り得る勢力は尽く討ち滅ぼしたからだ。
全てが終われば荊州は安泰で侵入者を拒むだけで良いから、本格的な軍事拠点は必要でも無い。だから遠慮無く攻めさせた。さすがに非戦闘員の住民は殺さないけどな。
「突撃、粉砕なのだ!」
俺の配下には勇猛な将が数多く居る。これからは若手の時代だ。だから張飛に機会を与えている。
張飛に率いられた益州兵が連(中隊)、また次の連と新手を繰り出して前進して行く。
兵の装備は戟で統一されている。戟は慣れれば剣の様に片手で使える。間合いも槍の様に広く取れる万能の武器だ。
対して張飛は矛を愛用していた。
(成果をあげれるなら好きな物で戦えば良いか)
城壁の上から連弩や弓で敵も突撃破砕射撃をして来る。国境の要だけあって、前から連弩や矢を大量に備蓄していた。だから第一波が一瞬で壊滅したのも当然だった。
うーん、やっぱり益州兵を盾にして良かった。うちの兵を損ねずに済んだ。
「投降して来る者はどうしましょうか?」
「積極的に得物を向けて来た者は斬れ。ただし強制徴用された者は赦免する。戦場の片付けや復興の労役で帳消しにしてやる」

益州兵が調子に乗って、荊州の民から略奪したり虐殺をしない様に監視はさせている。戦争は終結後の後始末も考えて行う物だからだ。わざわざ領民を減らして喜ぶ状況でもない。俺の民で無いなら、赤ん坊も豚の餌にしてやったがな。

正義は見方で変わらない。悪党は悪なのだから、反旗を翻した瞬間から人としての権利を全て失っている。それがこの時代の常識であった。

城門を破ると、張飛の独擅場と成った。張飛は張達と范彊を易々と討ち取って来た。

「偉いぞ」

敵の首をぶら下げて、返り血を浴びた姿にドン引きだったが褒めておいた。

「にやははは」

引き続き前進した我が軍は⊠帰で頑強な抵抗に遭遇した。

ここには元曹操の家臣であった許褚、典韋が詰めていた。程昱が各地の旧臣に連絡を取り、俺を討つ為、蔡瑁に協力させたらしい。

あの女、死んでも面倒を残してくれる。

劉琦は漢のネームバリューによる一定の影響力を認めていた。それは同じ時代に生きる者にとって無視出来ない物だった。故に楚王に任じられた劉琦に謀叛を起こした罪は深い。

同じ様に敵対し矛を交えた袁紹は、戦に敗れ劉琦に降った。

しかし世間の評価はどうあれ袁紹は、依然として漢帝国丞相のままであった。皇帝に解任された訳では無いからだ。その名族が降る事で劉琦の権威はさらに高まった。

一方で虜囚と言うには、袁紹は自由気ままに暮らしていた。特に劉琦と同衾する事も多く、愛妾の一人として見られていた。しかし正室でも無く中途半端な立場だった。

人は貧しいと娯楽にも飢える。暇だとやることが無くて子作りばかりして、貧困の連鎖に繋がる。それは袁紹も同じで、ますます劉琦に傾倒して行った。

――なぜこの様に女ばかり増えたのか。
荀彧は全てを放り出して劉琦の元に行きたかったが、主君の側に居れない我が身の立場に歯噛みした。
勿論、軍師として冷静な部分では、劉琦の留守を守り、荊州を賊軍から守る事が信頼に応える事だと荀彧は考えていた。
「敵軍が夷陵(いりょう)に向かい進軍中です」
「分かったわ」
――劉琦様の軍勢を夷陵で迎え撃つ積もりかしら。
荀彧は若くして劉琦に仕え、軍師の筆頭を自負していた。
しかし曹操との戦に前後して鳳統に存在感を奪われている。呂蒙や陳宮も活躍をしたが、それぞれ孫権と呂布に仕える陪臣で、荀彧の地位を脅かす者では無い。しかし鳳統は同じ直臣であり、女としても寵愛を受けていた。
「あの泥棒猫!」
怒りで地団駄を踏む荀彧であったが、軍師として最良の選択をすべく頭は働かせていた。荊州を守るとは現状維持だけでは無い。機会があれば積極的な行動により賊軍に打撃を与えるべきだと考える。
蔡瑁軍主力は夷陵で決戦の構えだった。兵力的な余裕は無く、南に渡河して来る可能性は低いと見て取れた。
そして何の為に何を成すべきかと考えて、敵に合わせる必要も無いと再確認した。
最終的な勝利に寄与すべく、長江南岸に張り付けてる兵を江陵(こうりょう)に渡し敵後背を遮断、劉琦の攻撃に合わせて挟撃すると言う策が浮かんだ。
「見てなさい。劉琦様の軍師は私だって証明してやるんだから!」
荀彧は江陵の守将である侯音(こうおん)に投降勧告を行った。
『劉琦様に降れば、屑なあんたの罪を軽減してあげるわ。でもあんたがウスノロの馬鹿で逆らうって言うなら、劉琦様が勝たれた後にあんたの兵も家族も皆殺しにされるわね。ううん、劉琦様のお手を煩わせるまでも無く、私が殺してあげるわ。返事は明日の昼まで待ってあげる』

侯音は荀彧の文を読み脅えた。荀彧が劉琦を敬愛してる事は知っている。荀彧がやると言ったらやるだろうと理解出来た。
翌日を待たず侯音は開城し荀彧に投降したが、広場に連れ出され斬首にされた。
約束が違うと言う侯音に荀彧は冷たい眼差しで一瞥すると、吐き捨てる様に言った。
「本当、馬鹿ね。劉琦様を裏切った馬鹿を私が許す訳無いじゃない。それぐらい理解して自刃して欲しかったわ」
絶句する侯音は、冷静そのままな荀彧の表情に一片の慈悲も見出だす事が出来ず、心を絶望に塗りつぶされたまま処刑された。
敵は殲滅する。機会があれば完膚無きまでに皆殺しにする。それが戦場での掟だった。
かくして荀彧は長江北岸への橋頭堡を確保した。

☒帰を攻めていると、敵から使者がやって来た。俺の代わりに鳳統が話を聞いてきた。
「で、何だって？」
上擦って噛む事も無く鳳統は報告する。
「賊軍から和議を申し込んで来ました。どうやら勝ち目がないと言う事に気付いた様です。まともな見識を持った者も居た様ですね。でも朱里ちゃんは反対してるそうです。彼女なら戦いは負けると分かっていそうな物ですが、まだ負けるとは認めていません。私達とは何処か見えてる物が違うのでしょうね」
ポジティブに解釈すれば正義が悪を殲滅すれば、平和な世界がやってくる。
悪を殲滅する事が出来れば、侵略者は途絶えるのである――つまり、生き残りが居れば再度、侵攻の脅威が残ると言う事だ。全ての殺しは荊州の平和を実現する前座である。
話し合えば分かり合えるよ、なんて言うやつが居たらぶっ飛ばす。
殺し無しに安全保障の抑止力とはならないのだ。弱者は淘汰される。それが世の中のルールだ。

「何だそれ、今さら泣き入れて来たのか。その割に意思統一は出来てないとか、情けなくねえのか。プラチナむかつく」
他人の事情何か知った事じゃねえ。
俺は俺の目的の為に正義を貫くだけだ。
「え、ぷらちな？」
鳳統はきょとんとしていた。
まあ――返事は返してやる。話し合いを否定する物では無い。
「蔡瑁が出て来るなら会ってやる。首落とされる覚悟があるのだったら来い」
誤解の無い言葉だ。つまり――蔡瑁の返事がどうあれ、降伏するまで俺の攻撃は止まらない。☒帰への攻撃を続行させた。
俺の幸せの為に、不穏分子をこの機会に一掃するんだ。もっとも、会見自体が孔明の罠な可能性はある。
考える。諸葛亮を凡才な俺が倒せたら、難易度の高いゲームをクリアした様に最高の気分だろう。上手くやれるかは家臣達の働き次第だ。
その為にも決して油断をしてはいけない。だからこそ、力の出し惜しみは駄目だ。
……ひょっとすると、この考えこそ孔明に影響されての思考誘導なのでは無いか――こんな風に考えさせられるのも諸葛亮の名が怖いからだ。
幼女強い、マジで強い。それを俺は思い知っている。
軍師として知識を使う事と、武官として得物を振るう事が別問題な様に、幼女を侮ってはならない。そのお陰で今まで生き残ってこられたのだから。
血臭漂う☒帰の戦闘を見ながら、そんな益体も無い事を考えてしまった。
諸葛亮は蔡瑁から驃騎将軍に任じられ、劉琦の迎撃に限り軍権を握っていた。文聘が大将軍に任じられた事を考えると、Ｎｏ２と言えた。

「劉琮様の様子は？」
説得に当たっていた蔡瑁は、首を振り不首尾な事を表す。
「未だ納得成されず、我らの義挙に御賛同頂けていない」
自分にも姉の居る諸葛亮は、家族の情愛とはそう言う物であると理解していた。互いに憎み合ってる関係では無い家族であれば守ろうとするのも当然であった。
「この上は戦場で楚王を討ち、結果を以て納得して頂くしかありません」
官吏にとって君主は御輿であれば良い。そこに血筋や官位で、権威に箔が付く。
蔡瑁は劉琦を討った後の御輿に劉琮を据えようと考えていた。外戚として荊州を動かし、漢に影響を与える。そんな夢想すらしていた。
「ふむ……であるか。ならば劉琦を討て。その上で、劉琮様に起って頂く」
蔡瑁は決戦を決意した。頭を下げる諸葛亮の口元には歪んだ笑みが浮かんでいた。
諸葛亮は根が執念深く、受けた恥辱を忘れない。復讐の為なら努力を惜しまない。
その点では劉琦も同類と言えた。
劉琦が勝利を確信しながらも攻撃を継続したのは小心者であるが故の警戒心で、戦と交渉での主導権を握る為だった。
諸葛亮は劉琦の内心を正確に読んでいた訳ではない。夷陵で目立つ動きをする事で、荊州南部の劉琦軍を引き付ける事にした。そして交渉で劉琦軍主力を欺き、夜間行軍で夷陵から主力を前進させて決戦に持ち込むと言う計画だった。
狭い隘路は兵力差を無くしてしまう。遠征軍である外戦部隊と留守を守った国内軍、後備部隊として経験の差はあったが、劉琦の首を取れるかもしれないと考えていた。
（雛里ちゃんが相手でも、今度は負けない）
諸葛亮は揚州の戦いでの敗因は人命を重視した事だと結論付けた。

そうでなければ、負ける筈が無かった。
劉琦は君主で諸葛亮は軍師だった。史上最高の名君と成れる相手でも、政と戦は違う。軍事的に本質が素人である劉琦に負けた。その点だけは、忘れてはいけない。
人格的には女にだらしない。知識は家臣が補う。政に対しての行動力はある。
――行動力しか取り柄の無い相手だ。主導権を握られれば、窮地に転じるのは向こうだ。
蔡瑁が去った後、諸葛亮の姿勢はそのままだった。そして喉の奥から笑い声が漏れた。

勝つ為には幾らでも卑怯者になろう。だが今回は荊州が舞台だ。敵も味方も元は荊州の民。
社会体制を批判したり、アイドルに熱狂するのも若い内だけだ。年を取れば将来の安定を優先する。荊州とは安定した場所だった。
「くそったれめ」
夜明け前に敵から使者がやって来た。眠りを妨げられて不機嫌ながら、降伏でもするのかと聞けば会談を求めて来た。
だから会談の場を設ける事にした。
――しかし、裏をかかれた。
忠誠、義務、名誉、郷土愛、あれやこれやを奮い起たせて士卒が戦って居る。
「王！　敵軍がすぐ側まで迫ってきております！」
芽は早い内に摘み取るべきだ。敵もそれを理解していた。俺の首を狙っていた。
戦は最後に生き残った者が勝者だ。だから如何なる手段を使っても敵の総帥を倒せば勝ちとなる。
俺は関羽の側で守って貰おうと思った。だけど馬に乗ろうとしていた。
「愛紗、どこに行く？」
「御身には指一本触れさせません。お任せを」

関羽は愛用する青竜刀を小脇に構え、雄叫びをあげて敵兵の中に駆けて行った。一閃で倒される敵の姿が遠目にも見えた。
――って、感心してる場合では無い。いや、そこは俺を守れや。使えないおっぱいに苛立ちを感じた。
「劉琦様、劉琦様！　愛紗さんや私達、荊州の民は劉琦様の手足です。例えこの場で倒れ伏そうとも、異論は御座いません。ですから、ここは任せて行って下さい！」
人間関係は信頼だ。鳳統もそう言うが、こいつの頭は俺にとって必要な物だ。
「うん、分かってる。だが今は自分の運を信じるしかない――だから、お前も逃げるぞ！」
「あわわわっ！」
俺は鳳統を抱えて馬に乗ると、関羽とは逆方向に走らせた。
危なくなったら逃げる。それは恥とは言わない。損失の拡大を防ぐ損切りだ。
俺は、俺を守って死ぬ者には筋を通す。残された者には金銭的に生活を保証する。これは絶対だ。そうでなければ命を賭ける者も居ないだろう。
雇用主としての責任の取り方だ。英霊として葬式も盛大にしてやろう。
逃げる事の出来ない哀れな兵達の声が背中に聞こえた。
「臣下にとって、仕える主君の為に死ぬ以上に名誉な事はありません」
鳳統が俺の心を読んだかの様に告げる。
奴隷根性丸出しで、英雄崇拝のノリってやつだ。
「そうか」
たかが奇襲を喰らっただけだ。俺の気分はまだ負けていない。兵も残っている。
敵の策は、悪辣とはまだ程遠い戦い振りだった。やられてたまるか。
欲しい物は平穏だ。必ず手に入れる。生き残るのはこの俺だ。
いや勝とうが負け様が敵は兵力を消耗し、人的資源は枯渇する。継

戦能力云々を言う前に、税収や食糧にも事欠き自壊するだろう。
戦をするとはそう言う事だ。
まぁ、此方としても戦闘の長期化は望んでいない。敵を干上がらせる前に荊州の社会基盤が破綻してしまう。
最後に大事なのは結果で、実現する為の意思と行動だ。
諸葛亮の手駒は限られている。欲をかかずに攪乱する事を目的にしていた。
（意趣返しか。ああ、ヘドが出る）
尻尾に食い付かれ虚を突かれた。一銭にも成らず、理屈は通じない。
戦では敵を叩ける時叩く物だ。だから俺は背中を気にしながら逃げた。
だけど敵の追撃は関羽や張飛が抑える事で発生しなかった。
白帝城まで逃げる事も考えていたが、幸いにして俺は巫の手前で友軍の後続と合流した。
荊州兵の戦闘序列（Order of battle）で孫権の立ち位置は直臣と同等で、孫家の陪臣、民を纏め、必要に応じて編成・編合・編組して従軍する軍役を与えられていた。他にも戦で味方を無理させない現実的な指揮・統制が行える孫権は、兵站を司っている。だから後続を指揮していた。
「劉琦様、御無事で良かったです！」
「ああ、ありがとう。中々、楽しい体験だったが心配をかけたな」
泣きながら抱き付いて来た孫権を軽く抱擁しながら、敵を撃退した関羽達が下がって来るのを待った。
国家の指導者とはそう言う物だ。Ｆ／Ａ―１８に自ら乗って異星人の宇宙船を攻撃する様な立場では無い。戦の趨勢（すうせい）を見極めるべき統率者だからだ。
関羽は兵を失った事を謝罪したが、俺は気にしていない。自分に厳し過ぎるだろうと思うが、個人の美意識の問題だ。ただ、コミュニケーションの一環としてフォローはしておく。
俺の前に跪く家臣を見渡して、地獄の釜の蓋を開ける決意をした。
「信念、努力、勇気にお前らは満ちている。そこでもう一働きをして貰

おう」
戦いは何でも解決出来る手段だ。
「王よ、ご命令を！」
関羽の目は闘志に満ちていた。
オッカムの剃刀の法則――哲学で言う所の、一番単純な考えが、一番正しい。戦争も単純にやろう。
「真面目に相手をするのが間違いだった」
俺は広げさせた地図の一点を指差す。
「そこは……」
驚く関羽に俺は笑みを向けた。
「最低限の兵力で襄陽を急襲し阿呆の首を取る。お前らは派手に動け。賊軍を撃滅しろ」
襄陽――政治的にも軍事的にも影響を与える敵の中枢だ。

7―3

普通。その二文字は戦場ヶ原ひたぎや織斑一夏、球磨川禊、兵藤一誠の様な生き方をして来た人間にとっては、決して望んでも手に入れられない物である。それはライトノベルと呼ばれる『おファンタジア』ではお約束の展開だからだ。
だけどここは『おファンタジア』とは違う。
俺は高望みをしない。普通の生活を手に入れるのだから。
誰もがゴールに立てる訳ではないし、いずれにしても、普通の生活を送る為には敵を潰すしかない。それも頭だ。
「派手に暴れろ。そして敵の目を引き付けろ。増援が到着する前に襄陽を確保する」
俺は指示を出した。軍師達は、具体的目的を達成する為の行動計画立案に移った。
「秦の白起将軍が楚の西陵を攻めた進路を逆に進む、か。面白いな」
戦国の頃、白起は楚の⊠（えん）を攻略すると郢（えい）を目指した。その前段階として西陵へ南下した。中々、気が利いており俺は計画を承認した。
「劉琦様自ら別動隊の指揮を成されるおつもりですか。それなら私も

お側に居させて下さい」
鳳統の言葉に俺は首を振り却下した。俺は敵の首魁をぶち殺すと言う仕事がある。
「諸葛亮の目はここに向いてる。だから雛里はここに残って、愛紗を支えてやってくれ。俺の本陣はここに残ってると信じさせる為だ」
普段は言わない俺が、真名を人前で呼んでやるのは効果的だ。鳳統は顔を赤らめ、ペコリと頭を下げて了承する。
行き掛けの駄賃。鳳統に金目に成りそうな物の再利用を命じておいた。軍師は政策と戦略イノベーションを研究したり、プラグマティストで理解が早くて済む。金があれば大抵の問題は解決出来るし、みんな幸せになれる。話はそれだけだ。
「者共励め！」
甘寧、周泰の手勢を尖兵とし、張飛を前衛に、孫権の兵から抽出した軍勢で襄陽を襲撃した。その前段階として、敵の増援を阻止すべく華佗の開発した幻覚剤を貯水池や井戸に流して敵を混乱させた。
「……宜しいのですか」
と周泰は命じられた時に躊躇っていた。目を丸くして、口を震わせ、怯えていた。
俺は周泰に自信を持って答えた。
「躊躇うな。これは純然たる兵法の一つで恥じる事は無い」
それに命令によって起こった事象の責任は、命じた物が取る。この場合は俺だ。
何を言った所で、民を利用する事には変わり無いがな。正直、悪辣な手口だ。
貯水池や井戸の意義は、民に必要な水分を補充して生存を維持させる為だ。そこに幻覚剤を入れたのは、民の賊軍に対する反発心を増進して蜂起を促す起爆剤としてだ。
荊州の一般的特性で民は俺に忠実だった。普通の日々が送れる暮らしに満足していたと言うのも大きい。そこで馬鹿が謀叛を起こして不満が溜まっていた。幻覚剤はそれを解放する。
「これより我らが王は荊州を取り戻される。民草は勇み喜べ。王が御

帰還成される。忠を尽くすは今ぞ」
幻覚剤で人的戦闘能力を飛躍的に発揮した民の蜂起は、賊軍の行動力を拘束し我に寄与する。ラリった所に扇動してやれば簡単に動き出した。
正義や真実は勝利の中にある。勝てば良いのだ。だから妥協はしない。やるべき事をやる。

失敗は仕方が無い。明日よりも今日を大切に生きるべきだ。何がしたいか、何が出来るか。夢を描き、たどり着く為の目標を立てて、達成する為の努力を実行に移した。
挫けたり、影響を受けるだけではなく、自分を貫いて襄陽を攻めた。
戦は数だ。個人が持つ武を積み重ねた戦力より、兵力の多さが戦の優劣を決める。だから敵の兵力は民の暴動で分散させた。
「敵は此方の動きを警戒して兵を各地に振り分けました」
「過大評価してくれてありがたいな」
「まったくです」
トップダウンの旧体制な敵と違い、うちはボトムアップな領地経営が行われていた。部下に丸投げとも言えるが、お陰で身軽に動けた。だからケツにひのきの棒を突っ込んでやる。
昨日の敵は今日の友なんて割り切る事は無理だ。憎悪を込めて殺してやる。
降伏勧告はしない。城内からの手引きで兵を突っ込ませた。
「ぎゃあああああ」
「た、助けてええええ」
陳腐な悲鳴が聴こえた。
夜と朝の境界が曖昧な時間帯、馬蹄が敵の死体を踏み潰しながら入城した。頭蓋骨が砕かれ脳漿やしわの寄った脳回の断片が飛び散る。それ以上に城下は血の臭いが漂っていた。
「殺せ、殺せ。裏切り者はぶち殺せ」
地下に潜る事も許さない。枯れ木も残らぬ程、完膚無きまでに叩き潰す。

解けない疑問は幾らでもあるけど、敵は撃滅する。それにあいつらが望んだ戦争だ。
旧約聖書によると神は御遣いを送り、アッシリア軍１８万５千を滅した。対して俺達の仕事は、荊州に糞を垂れた阿呆野郎の敵を倒すだけ。たったそれだけだ。
理想だけでは平和を得られない。この機会に官吏、商人、将来的に邪魔に成りそうな者は全て殺した。目的を達成する為に手段は問わない。大切なのは結果だ。溝（どぶ）に浸かるなら掃除もついでにしてしまおう。悲しいけど、必要な尊い犠牲だ。
人類は排他的で攻撃的な種族だから食物連鎖の頂点に立てた。戦では野獣の様に戦う事も生存本能故だ。だから本日も何事も無し。
世の中には絶対、完璧と言う事はある。完璧な結果を出す為に、戦いの合間にも休憩は適度に入れる。交代で飯を食わせた。
「しっかり飯を食えよ」
兵士は腹一杯食ってから戦う。飢えた兵士は頭に栄養が回らず、録な働きが出来ないからだ。栄養は活力であり、満たされて満足な働きが出来る。
「――だから、戦場では食欲のある、よく働く者から死んでいく。そして臆病者が生き残り、食わない者が正しいと捏造されているんだ」
ま、指揮官としては自分の体力も分からない馬鹿の方が動かしやすいけど程度による。
次と言う未来の無い次の世代の１億人を犠牲にして、更に最底辺の１０億人を殺害しても自分の手の届く範囲の者が救えるなら、大多数の幸福より殺戮を選ぶ。それが組織を動かす者だ――きっと、死んだら地獄の業火に焼かれるだろうけど。
食事を終えたら殺しの続きにかかる。血の宴で襄陽は盛り上がっていた。
謀叛人の末路は哀れで惨めで無惨な物と決まっている。見せしめとして処断されるからだ。一生の内に何かを成し遂げられるのは極少数の者だけだ。だから家畜の様にただ従い何もしないのが一番の生存する道だ。

権力、金、名誉、愛、世界は様々な餌と乗り越えられない罠に満ちている。そして鴨はネギを背負って罠に飛び込んで行く。
奇跡の逆転と言うのは存在しない。戦に百戦百勝があるように、逆転は必然で起きる。だから用意の出来て無かった賊軍は俺の前に破れた。
（とは言っても、諸葛亮の率いる軍勢が残っているか。ま、俺の軍師達に抜かりは無い）
襄陽は解放された――そして俺には一仕事が残っている。
疑わしきは罰する。それは敵の侵入を防ぐ防御の一つだ。粛清をやろう。未来の為だ。
「劉琦様」
家臣が耳打ちして来た。俺は頷いて、用意を進めるように指示を出した。
「馬鹿な勝負に命をかけた結果、この様だ」
王座に腰かけた俺の前に謀叛人共が引き立てられた。蔡瑁だ。
「ユダは銀貨３０枚でキリスト様を売った。お前は幾らで俺を売ったんだ？」
跪いて蔡瑁は命乞いをした。
「私の持ちます財産全てを差し出します。その上で劉琦様、そして臣下の皆様、関係者各位へのお詫びと償いを、誠心誠意をもって対応して行きたいと思います！　ですから何とぞ命だけはお助けを下さい！」
この阿呆は俺を罠に誘い込んでくれた裏切り者だ。
俺は性善説を信じていない。人は環境で左右されるのではない。ＤＱＮな毒親から生まれた子供でもまともに育つ場合がある。だから悪に染まる以前に、元から悪の気質がある悪党だったのだ。
被害者は俺だ。親を殺され、民を傷つけられた。けじめを付けよう。
「てめえを殺して財産は国庫に没収だ、ボケ。それともそんな事すら分からなくなったのか？　思い出させてやるよ」

そう言うと剣を受け取って蔡瑁の太股に剣を突き刺してやった。４２０ＨＣのブレイドと感触は違うが、面白いほど切り裂いて血を吸った。
「うわあああああああああああ！」
絶叫の声が耳を打つが、でもまぁ、どうでも良いと思う。視床下部から攻撃性が刺激される。
力が沸くのは鍛練では無い。憎しみからだ。
「押さえておけ」
甘寧と周泰が俺の指示に従い蔡瑁を押さえ付ける。袁紹に声をかけた。
「麗羽、他所に行っても良いぞ」
「私は御側に控えております」
笑みを向けてくれたが、俺は素っ気無く答える。
「好きにしろ」
俺は蔡瑁の汚いケツを丸出しにさせた。悪い子にはお仕置きが基本だ。
「心配するな、痛いのは一瞬らしいから」
「何をする気だッ！　よせ、なぁあああああああ！」
ひのきの棒をケツに突き刺してやった。肉を裂く手応えが伝わって来る。
「んほおおおおおお！」
悲鳴をあげた蔡瑁は失禁し、ケツから血を流して気絶した。本当の強さとは必要な時に武器を振るえる力だ。
そのまま俺は斬首を命じた。
「宜いのですか。この者の罪は斬首でも温すぎると思いますが」
甘寧は首を跳ねる前に訊いてきた。
「ああ、だけど糞の相手を長々やるのは時間の無駄だ」
斬首した首は城壁に晒した。その瞬間、「王を讃えよ！」と、歓声が聞こえる。そこは空気を読んで俺も笑顔で手を振った。熱狂する民や兵の笑顔が怖い。
（一歩間違えたら俺の首がこうなっていた……）

さて、問題は汚い血で俺の手が汚れてしまった。
「失礼します」
女官から水の入ったタライを受け取った袁紹が、俺の手を拭ってくれた。
当たり前の様に奉仕してくれる彼女に礼を言うと笑顔を向けてくれた。やっぱり、俺のおっぱいを選ぶ目は間違ってない。こいつは良い女だ。

蔡瑁が討たれた事を知ると諸葛亮は意外にもすんなりと投降した。罠かと思ったが、素直に武装解除に応じ軍勢は解散された。しょせんは烏合の衆か。
「もう少しであやつの首を取れたのですが……」
関羽は悔しそうに報告する。そんなに手柄が欲しかったのか？
「御苦労だったな。ま、良いって事よ」
関羽達を労いながら諸葛亮を視界の端に捉えた俺は連れて来る様に命じた。
大人しく連行されて来た諸葛亮は俺の前に跪かされた。
「お前が阿呆共を扇動してくれたお陰で不穏分子は一掃出来た」
俺の嫌味に表情を歪める。
「何人死んだかな。五万ぐらいか？」
諸葛亮は答えない。そりゃ当然か。代償が大き過ぎた。
「今回、謀反の協力者は片っ端から殺してる。残る大物はお前だけだ」
まさか偽者じゃないよな、と思っていると諸葛亮は口を開いた。
「先般来の戦におきましては、仕えた主を失う等色々な事故が起きまして敗け戦の要因にもなったのでありましゅけれども、私は軍師です。将として統率する力は不足していました」
そう言いながら武官連中を一瞥する。ふん、確かにこいつは主と将に恵まれて無かったな。
「で？」
俺は続きを促す。
「軍師は政、あるいは戦における様々な出来事に対して最善の職責を

果しまする為に、その力を最大限まで発揮すると言う事は、これは当然やらねばならぬ事であると今更申すまでもない事です。しかし軍は軍師一人が思う通りに動かす事は非常に困難です。主との信頼関係もありますが、士卒には武の心得の無い百姓も居るという事から、これはやむを得ない事でありましょう」

ま、俺の家臣達と比較するには差があるしな。そこは仕方無い。

そして諸葛亮は言葉を区切り、俺の目をしっかりと見て答えた。

「ですから私は悪くありません。私の助言を活かせなかった主が負けただけで、私は負けていません」

「ははは、良いぞ。その自信と傲慢。軍師はそうでなくてはな」

諸葛亮はぶっ殺そうと思っていたが、気が変わった。こいつは面白いやつだ。まだ腹に抱えてる物がありそうだが、きっと俺を楽しませてくれるだろう。生かして馬車馬の様に使役してやる事にした。

とりあえずはこれで、漢帝国での戦いは一つの終りを迎えた。

勿論、これで戦いは終りではない。エロゲーをクリアしても、ファンディスクやシナリオ追加のリニューアル版があるように、政治闘争や復興事業と言う戦いが待っている。

だから俺は仕置きを終えてある程度落ち着くと、劉琮に荊州を任せて俺は田舎に籠った。と言っても田畑を耕す泥臭い生活は出来ない。

おっぱいに出仕させて稼いで来て貰い、俺は秘宝館を営業しながら家で食っては寝て過ごす自堕落な毎日だ。

「兄上、西のパルティアから使者が参りました。ローマとの戦で漢の力を借りたいとの事です」

政から身を引いたとは言え、まだまだ弟は俺を頼って来る。優秀な家臣に丸投げする「君臨すれど統治せず」どころか完全に俺の指示待ちかよ。

頼られたら答える。兄弟だからな。

「それは敵の謀略だ。使者の首を跳ねろ」

本当に力を借りたいのであったとしても、わざわざ戦に参加する必然性は無い。

「旅先で賊に襲われて死ぬのはよくある事ですね」

流石は我が弟。理解が早くて済む。だがこいつはまだ甘い。他人は信用しても信頼すべきではない。頼れば齟齬があった時の損失が計り知れない事に成るからだ。

大陸中央の均衡が崩れると防波堤が無くなると考えるかもしれない。だが漢までの道のりは遠い。アレクサンダーですら到達出来なかった。

「それに戦と成っても、我ら荊州が残る限り漢の意思は引き継がれます」

「あ、そう」

郷土愛はあるが、一国の政は割りとどうでも良い。孤立主義・排外主義が一番だろう。

多くは求めない。この日常が続くなら。

何かを背負う弱者より、捨てて身軽な方が生き残れる世界だから。

劉琦

後漢末期の君主。劉表の長男。心卑しく女色に耽り、その弟、劉琮が荊州の守相を継ぐ。

一方で、宗主を殺害。諸侯を対立させ楚王と成り漁夫の利を得た事から汚い劉琦で知られる。

晩年は荊州を離れ揚州呉郡で秘宝館を営みながら過ごした。

昭和１００年、日中共同の学術調査の結果、劉琦の墳墓を上海郊外に発見した。長年、荊州を追放され流れ着いた終焉の地と考えられていたが、劉琦本人の他に正室と多数の側室の骨壷、埋葬品が発見されており、墳墓の規模、出土した埋葬品の量から裕福な生活を送っていたと考えられる。

どっとはらい。